

---

# 黄昏ゆく街で

光野ワタル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

黄昏ゆく街で

### 【Nコード】

N4355D

### 【作者名】

光野ワタル

### 【あらすじ】

不治の病に倒れた一人の高校生。その最期の時間を、親友は、そして彼自身は何を想っていたか。

## プロローグ（前書き）

皆様初めまして。

光野ワタルといたします。

よろしく願います。

稚雑な文章ではありますが、最後のゴールのテープを切るまでお付き合いただければ幸いです。

## プロローグ

『キーンコーン…』

講義の終了を告げる鐘が鳴り響いた。

『…では、本時間の講義はこれまで。』

学生カードをレコーダーに通し、講義室から出たとき、後ろから声がした。

「水無月君。」

水無月が振り返ると、後ろに同じサークルの三嶋麗華がいた。

3

「三嶋か。何かあったのか？」

「今日のサークル後、みんなでご飯を食べに行くんだけど、水無月君はどうするの?」

「…済まないが、今日は打ち上げしか出ることにはできない。」

「そう…。」

麗華は誰にでも分かる顔で、残念そうに呟いた。

「でも、珍しいね。水無月君がサークルを休むなんて。」

「今日は…大切な人間のために使いたくてな。」

水無月は意識していなかったが、麗華は彼の表情の変化に気付いて、慌てて謝った。

「ごめんなさい！ ……水無月君のこと…。」  
「いつものことだ。」

三嶋は俺の事について、思い込む癖がある。

（どうにかならないものか。）

水無月は麗華に気付かれぬよう、軽い溜め息をついて、麗華に言った。

「…三嶋、君の思っている事とは、違う用事だ。」

「え…？」

「命日だよ。」

そう告げて、麗華のいる場所から立ち去る。  
気付かぬ内に、空を見上げながら。

「あいつは…。」

「あいつは、どう生きたのだろうか。」

麗華の視線を感じながら、水無月は一本メールを打ち、大学の駐車場へと足を向けた。

『…カーン、コーン…』  
学内の喧騒から離れた建物の一室は、この時間はやけに騒がしい。この一室からは、人の声が絶えないらしい。

「…つつそ!」  
「マジだつて。あの時はさあ…」  
「じゃ、なんでテニス辞めたの?」  
「え…」

「でも、龍ちいはほんつとマジで面白いよね」  
「龍ちいはネタの山あ、みたいな?」

「そーかい?」  
『龍ちい』と呼ばれた彼は、得意満面の笑みを浮かべた。  
屈託のない、少年のような明るさで。

「龍ちい…さん。」

この部屋は声が絶えない。  
声は絶えないが、どうしても、場の空気についていけない人間はい

るものだ。

この異様な会話スピードについていけない人間は。

「おう、勇ちゃん、どうしたよ？」

「あの…」

「勇ちゃん。」

彼は、勇の言葉を遮る。

「俺のこと『さん』ずけしなくていいって、いつも言ってるだろ。そ・れ・に。」

100万ドルまではいかないけど、10ドルの価値はありそうな笑顔を勇に向け、耳元で囁く。

「話すときは、用件を簡潔に、伝わるように、だろ？」

「…はい…。」

耳まで真っ赤になった勇を、その場にいる人間が冷やかしにかかる。

「勇ちゃん、赤ーい！」

「ちよつと、マジあつついんだけどー！」

「アツいねー、ほんと。」

「はいはいはい、そこまでー。」

冷やかしが一段落したのを見計らって、彼は場を収める。

「勇ちゃん、少しはこの空気に慣れた？」

「はい…！」

本物の100万ドルの笑顔が、彼に向けられる。

「そ。よかつたぜ。」

「さって、学食で何か食いに行こつかな〜。」

「龍ちい、いつも『何か食いもんない？』って、飢えたこと言っ

るよね？」

「この前みんなでご飯食べたときなんて、なんか長い名前の料理食べさせたし。」

「ってゆうかあ、マジありえなくね？ その細さ。」

そろそろと連れ立って、部屋から移動したとき、お笑いマニア『形態哀歌』の着メロが響き渡った。

「あ、メール。」

彼が携帯を開くと、『水無月 樹』と表示されている。

(アイツからか…。)

やや重くなりかけた気持ちを堪えながら、メールを開く。

「水無月って、龍ちいの親友なの？」

「え、あのクソ真面目な？」

「確か、この前研究論文で表彰されたって、板に書いてあったよ。」

7

(どーせロクなことじゃねえだろ…)

自分の第六感は正しい。

本文を見た自分の表情が、変わったのが、彼は自分でも分かった。

(そうだったな…。)

「悪い！」

(俺は、大切な何かを無くしかけているのか…。)

「ちよ、やべえ用事忘れてた！」

(…らね…)

「じゃ、お先！」

そう言って、勇めがけて自分の学生カードを放り投げる。

何故、他の人間ではなく、勇なのか。



(しかし、あいつらは堅えなあ…)

駐車場へ向けてダッシュしながら、独りごちる。

(第一、あんな時に『龍一』はねえだろ普通…。)

ぼやきながら、龍一は愛車のスカイラインGT-R4tHに乗り込んだ。

## プロローグ（後書き）

皆様始めまして。

光野ワタルです。

本文の再修正、終わりました。

今度こそ、大丈夫…だと思います。

まだ、不慣れな部分がありますが、精一杯、自分らしい読み物を書いていけたらと思います。

これからも『黄昏ゆく街で』と光野ワタルをよろしくお願いします、

## 第一話：夕闇（前書き）

命日を迎えた「彼」の家に向かう、樹と龍一。  
二人は、彼との約束を果たしに行った…。

## 第一話：夕闇

（龍一の髪は目立つ。）

樹は、前を歩く龍一の銀色の髪を見ながら、そう思った。

「…どうかしたか？」

「いや、何でもない。」

「だったらじろじろ見るな。」

こいつは、時々鋭いことを言う。

そして、その発言は、俺やあいつより、より真実に近いものだ。

龍一が自分たちの輪に入ってきたときのことを思い出しながら、樹はそう思った。

「…二年か。」

「二年だな。」

「長いな。」

「あつという間だけ。」

「…そうかもな。」

目的地の近くの有料駐車場にそれぞれの車を止め、駐車場近くのコンビニで樹が柚子茶を買っているときに、龍一は追いついた。

（…あいつは檸檬だったよな。で、俺は…）

遅れて悪い、と樹に告げ、龍一は一番甘いホットココアを買う。（

こうして、三人でたまにコンビニで一本の飲み物でくったべる。）

樹には恥ずかしくて言えないが、自分の中では大切な思い出だ。

そして、普段は誰にも見せない、本当の自分の姿が出せた場所でもある。

二人で連れ合って歩く道のりは、とても寒い。

まだ、一月の中頃だから、春まではまだ時間がある。

恐ろしいほどの静寂に包まれた住宅街を、目的地まで、歩く。

「あのコンビニ過ぎたら、ほんつと何もねえな。ここは。」

「これでもまだ出来たほうだ。俺たちが小さい頃は、本当に何もなかった。」

「そうだったなあ。」

「尤も、あいつは俺たちだけでなく、全ての人間を避けていたみたいだからな。」

「…その原因の一つは俺も思い当たる。」

「…だろうな。」

「俺たちは散々言われた。」

龍一は心底嫌そうな顔をした。

「あいつの親じゃなかったら、ぶん殴ってたぜ。」

「…否定はしない。」

夕暮れの朱が、二人を染め上げる。

二人は、完全礼服である。

そして、樹は花束を、龍一は菓子折りを携えている。

「間に合ったみたいだな。」

「…気分、いろいろな意味で重いぜ、俺はよ。」

「まあまあまあ、よく来てくれたねえ。」  
二人を出迎えたのは、初老の女性だった。

「忙しいときにお邪魔して、申し訳ありません。」

「陽子おばさんも、元気そうで何よりです。」

「それで、二人で何しに来たのかねえ？」

陽子の発言に、樹と龍一は目を合わせて軽く苦笑いをする。

「今日は、涼の三回忌ですから。」

樹がそう言うと、陽子は突然人が変わったように怒鳴りだした。

「ああ、そういうえばそんな馬鹿息子もいたっけねえ。あの馬鹿息子のせいで、使いたくもないお金がどれだけ流れたことか。まったく、くたばるなら、苦しまずにころっと逝けばいいのに。」

「本当に、馬鹿な息子だったよ。でもこの三回忌で終わり。やっとあの馬鹿から開放される。そうそう、この後、永代供……」

陽子が更にまくし立てようとすると、奥から彼女を呼ぶ声が聞こえた。

「……ああ、呼ばれてるみたいだから、失礼するねえ。」

陽子がそそくさと声のした方へ立ち去ろうとしているのを見て、樹が慌てて呼び止めた。

「おばさん、僕等はどうしたらいいでしょう？」

陽子は二人に見られないよう、軽く舌打ちをしてから、笑顔で二人に言った。

「そうそう、そうだったねえ。席は玄関に近い場所だから。」  
よろしく、といったその笑顔は、一切の反論を認めない怖さがあっ

た。

(相変わらずだな、この人は…)

(やれやれだぜ。全くよお…)

二人も、陽子に見られないように溜め息をついた。

「…有縁の大導師…華経…。」

読経が終わり、法話の時間になる。

仏壇には、今日の主役である、青年の写真が飾られている。

鮮やかな蒼い髪に、左右非対称の瞳の色。

クォーターではない。生粋の日本人である。

「本唱院信君術徳日涼居士」

僧侶が青年の戒名を読み上げる。

「ああ、これで、本当に彼は彼方の人になってしまったのだ」

樹はそう思った。

僧侶が『如月家の五徳豊饒を…』とのたまっている。

しかし、彼が死んだこの家には、栄えなどこない。

むしろ、彼を苦しめたこの血筋は、親族の子孫に至るまで絶えてしまえばいい。

心から、そう思った。

『これにて、如月涼三回忌を、つつがなく終えました。』

(ま、つつがねえだろうねえ…)

龍一は、ある意味で冷めた目で見ていた。

（俺と樹以外で、涼がくたばったのを悲しんでいる奴なんていねえだろ。）

龍一にとっては、それは異様な光景だった。

龍一と樹以外は、涼の遺影を直視せず、僧侶の読経にも力強さが感じられない。

まるで、義理とか付き合いか。

そんなもののためにここに集まっているみたいだ、と龍一は断じた。  
（少なくとも、涼が逝って、本当に悲しんでいる奴は、いない。）  
龍一は、早くこの歪んだ世界から抜け出したいと、心から願った。

法話も、永代供養の儀式も済んだ。

（頃合だ）

そう思い、樹は、懐から一通の書面を取り出した。

「ここにお集まりの皆様は、故人から遺言を預かっています。」  
席上がどよめく。

「故人の資産、約100万ドルは、税差分を差し引いた残額のうち、私水無月樹とここに同席する神無月龍一がその一割を。残余分は親族の皆様方で均等に分けてください、とのことです。」

部外者の戯言に、列席者から失笑が漏れる。

しかし、その失笑の渦も、龍一が無言で見せたアメリカの銀行の通帳と、「1,000,000」の数字の前に、沈黙が消し去った。

「但し。」

樹が沈黙を破った。



「故人の財産を相続するには、彼の遺した手記のコピーを読んでいただくことが条件になります。」

席内でどよめきが起る。

樹はどよめきを無視して、更に続ける。

「そして、私水無月が故人の手記を編纂して出版することの許可、こちらの神無月が故人のことを詩曲にすることの許可。最後に…」

「陽子さん。あなたを絶対に許さないということです。財産の分与も、法律で定める分以外の分与は絶対にしないということです。」

樹が一気に言い終えて、息を吐くと、龍一がすかさず後を継いだ。

「…今までこの遺言状を表沙汰にしなかったのは。」

「この遺言状は、個人の遺志により、俺たち二人に執行してほしいという故人の意思。」

「そして…」

龍一が、殺気を込めた視線で陽子を見ながら言った。

「陽子おばさんに、この内容を握り潰されなくなかったからです。」

再び席内を沈黙が支配する。

「…以上が、如月君が遺した遺言です。この遺言に関しての連絡は、私共どちらでも構いません。それでは。」

「俺たちは、これで失礼します。…あ、そうそう。この遺言は。」

帰りかけた龍一が立ち止まって、陽子の方を見返して言う。  
「前の遺言の続きですから。それじゃ、そういっこと。」

我に帰った陽子が投げかけた呪詛は、まるで日がすっかり暮れた、夜の闇のようだった。

## 第一話：夕闇（後書き）

ご覧ありがとうございました。  
お疲れ様です。

如何でしたでしょうか。

場面の描き方がやや不適切なきらいがあります。

ご了承ください。

ご意見感想、おまちしております。

## 第二話・追憶（前書き）

涼を携えて、帰路につく樹と龍一。二人の感情が交差する場所は  
…。

## 第二話：追憶

大きく息を吐いた樹は、疲れ切った顔をしていたのが自分でも分かった。

すっかり暗くなった道を、涼の遺影を抱えながら、龍一と共に歩く。涼の家でのやり取りは、まだ若い彼らにとっては、疲れたに違いない。

待ち合わせのコンビニまでたどり着いた二人は、どちらからともなく立ち止まった。

「樹」

「龍一」

同時に呼び止めて、また沈黙が支配しようとする。

しかし、樹は、何とも言えない重苦しい空気に、負けたくはなかった。

「龍一。」

「…前から訊こうと思っていたのだが。」

樹は、以前からこの疑念を龍一に対して持っていた。

だが、それを言い出したら、龍一が自分のそばからいなくなってしまいそうで、怖くて言い出せなかった。

「この日記の…」

「…読んでねえよ。」

龍一は即答する。

龍一も、いつか、樹からこの質問が発せられることを覚悟していた。

逃げたくないのに、逃げている。

忘れたくないのに、忘れようとしている。

矛盾する感情を抱えながら、なるべく涼のことは話題にしないようにしていた。

互いの感情が交錯したのか、気まずい空気が流れる。

だが、樹から発せられた言葉は、龍一の想定外の言葉だった。

「俺も……詳しいところまでは読んでいない。粗筋しか知らない。」

「

なんだって？

どうということだよ、おい。

涼と樹といえば、小学校から高校まで、知らないものはないぐらいの有名人だったはずだ。

それなのに。

涼の想いを、樹もまた、自分と同じように持て余しているのか？

考えたくもない想像が溢れてくるのを抑えながら、龍一は、樹の黒い瞳を見つめた。

『読んでねえよ』

想像通りだった。

龍一は、やはり涼の想いを持て余している。

読まれていたらどうしようかという不安が消えたことは、樹にとって、気持ちが悪くなった。

やはり、龍一も、自分と同じように、「如月涼」の死に、区切りをつけられないでいる。

しかし、区切りをつけたら、龍一との関係が消えてしまいそうで不

安だった。

龍一の、左右非対称の瞳の色（恐らくカラーコンタクトだろう）のアンバランスの間に、今の自分の居場所はある。樹は、そう思った。

言葉が紡げない。

樹はともかく、龍一にとっては、沈黙というもののほど苦痛なものはない。

樹も、今のような空気での沈黙は、あまり好きではなかった。

「…なあ。」

沈黙を破って、龍一は話しかけた。

「この後、時間あるか？」

何となくだが、こう言っておいたほうがいい。

この空気からは早くエスケープしてしまいたい。

「…悪いが、今からすぐに付き合うことはできない。」

樹は、三嶋との約束を思い返していた。

どんな理由があれ、自分が姿を見せないと、三嶋麗華という女性は納得してくれないらしい。

『過去にとらわれながら、今を生きる、か…。』

涼もそうだったのだらうかと思うと、また気持ち沈みそうになる。しかし、過去から繋がるこの男だけは、別格だ。

「だが、俺も、龍一と話がしたいと思っていた。」

樹はこの後の予定を考えながら、話を続けた。

「…10時に、例のファミレスに。皇月と霜月も一緒だと心強い。」

意外だな。

龍一はそう思った。

てつきり、二人きりだと思っていた。

いくら涼の最期を看取った仲とはいえ、忍と悠太か。

「…意外だな。」

龍一から呟きが零れた。

「…意外？」

その呟きに、険を読み取ったのか、樹がやや険しい顔で聞き返す。

「お前が、涼のことを他人に委ねるなんて、珍しいと思っただけさ。」

「

…！」

明らかに険しい顔で、樹は龍一を睨む。

「そんなつもりで言ったんじゃないよ。」

龍一が慌てて否定する。

「俺もお前に同意だぜ。…涼は、一人の人間じゃ抱えきれない。」

「そんなことは」

「そんなことはある。珍しく、その顔に書いてあったからな。」

これだけのことを知れば十分だ。

樹も自分も、「如月涼」を持って余している。

後のことは、後々明らかになるだろう。

「じゃ、俺は忍と悠太に繋ぎをつけてみるぜ。」

そういつて、龍一は、珍しく思考が混乱している樹を尻目に、駐車場のほうへ足を向けた。



龍一の後ろでは、樹がまだ何か言いたそうな顔をしていた。

龍一に逃げられた後も、しばらく樹は動けなかった。

龍一の発した一言に、心を乱されているのが、自分でもよくわかった。

しかも、それは完全に否定できるものではなかった。

『お前が、涼のことを他人に委ねるなんて、珍しいと思っただけさ』

樹は、三嶋からのメールが来るまで、立ち尽くすしかなかった。

## 第二話：追憶（後書き）

書き上げました。

話を続けようかどうしようか、迷いました。主人公はまだ一言も喋っておりませぬ。

### 第三話：再生（前書き）

『二人で支えきれない』

樹と龍一は、違う立場で同じ思いを抱いていた。

龍一は、涼の最期を看取った二人を呼ぶ。

### 第三話：再生

十時より一時間も早く、樹は某ファンシーファミレスの喫煙席の一角に席を占めていた。

煙草は本来嫌いなのだが、龍一がいるときは別だ。

いつも通り、灰皿を二つ注文して、高価そうなビジネスバッグの身を確かめる。自分の想い出も、詰まっているそのバッグを眺めながら、三嶋に謝罪のメールを打っていた。

『人付き合いとは、中々面倒なものだ…特に異性が相手だと。』

三嶋に謝罪のメールを打った後、樹は何を見つめるわけでもなく、ただぼんやりしていた。

一ヶ月前、新種の栄養物質を発見し、その研究論文で国際化学賞を受賞したことが、何故か頭に浮かんできた。

『元々、この研究論文は、涼のことがあったから始めたものだったが…。』

『何時の間にか、俺の生き甲斐になっているな。』

樹はそろそろだ、と思い、準備を始めた。

「ねえねえ、樹くんもいるんでしょ。早く早くっ」

「龍一のくせに、僕ら呼び出すなんて、結構生意気。ていうか不機嫌。責任取れよ。」

「ねえねえ、樹くとまたあつゝい夜を過ごしたいなあ。」

「…速度遅すぎ。燃費悪いし、スポーツカーの意味ないし。」

「あーもう、後ろでごちゃごちゃうるせえ！」

屈託のない笑顔と、生意気そうな顔を乗せて、龍一のスカイラインは夜の街を疾走していた。

「ねえねえ、龍一くんが僕を呼び出すなんて。」

黒髪の屈託のない、少年の面影を随所に残した青年が、龍一に告げた。

「もしかして、僕と樹くんとの関係に妬いてるの？」

「…ありえねえこと言うんじゃねえよ、悠太。」

悠太は、顔を赤らめながら、更に続ける。

「でも、僕らは、如月君公認の『めおと』だからv」

「…悠太ったら、バカみたい。」

アッシュグレイの髪をした、クールな青年が横槍を入れる。

「第一、語尾にハートマークなんてありえないし、なんであのムツリがいいのか良く理解らないし。」

「忍、ムツリは言いすぎだぞ〜」

龍一はおどけてフォローする。

しかし、かえって、アッシュグレイの青年、臯月忍の突っ込みが龍一に向けられるきつかけになってしまったようだ。

「…エロ丸出しの人はフォローできないと思う。」  
「ぼそつと忍が呟く。」

「うんうんw」

悠太も同意し、更に追い討ちをかける。

「変態だもんね、龍ちいはv」

全く正反対の性格なのに、この二人のコンビは、絶妙なタイミング

で獲物を追い詰める。

高校生の時と変わらず、ターゲットにされたことを自覚した龍一は、「…おまえらと話すと、俺の繊細でピュアなハートが光速でリサイクルだぜ…」

二人に聞こえないよう、細心の注意を払いながら呟くと、龍一は運転に集中しようと、アクセルを踏む足に力を入れた。

独特のエンジン音が響いたとき、樹は何か、覚悟を迫られた気分になった。

『持て余している』

龍一に言われたその言葉は、樹の今までの時間を揺さぶるには十分すぎるほどだった。

やがて、悠太と忍が現れ、その後に龍一が、店内の視線を集めながら入ってくる。

「相変わらず、時間だけはちゃんと守るんだな。」  
樹が龍一に呼びかける。

しかし、返事はない。

悠太と忍がいることを考えれば、龍一が車内でどのような扱いを受けたか容易に想像がつく。

樹は苦笑しながら、悠太達に呼びかけた。

「悠太も忍も、あまり龍一をいじめな。…尤も、二人が言ったことは事実なのだろうから、龍一は反論ができないのだろうが。」

しばしの沈黙。

「…光速でリサイクルされた俺のピュアハートが、今度はスクラップか…」

龍一は、気の毒なくらいしょんぼりとした顔で呟いた。

「樹くんv」

そんな龍一のことなど、眼中にないように、悠太が抱え込んだ腕に顔を擦り付けてくる。

「…やめないか、悠太。」

傍目から見ると、樹と悠太は、悠太の外見もあいまって、恋人同士に見える。

「いや。」

悠太は即答する。

その幼い顔に似合わない、大人びた瞳で樹を見つめながら。

「久しぶりに、逢えたんだから…」

「それよりも。」

「今日は涼の命日なんだろ。」

忍が、龍一の煙草を横取りしながら助け舟を出す。

「早く見せてよ…如月の遺書。」

「わかっている。」

樹は、覚悟を決めて、ノートパソコンにDVD-Rを読み込ませた。

「…始まるな。」

龍一が言う。

「何が？」

悠太が言う。

忍と龍一の声が被る。

「涼の…メッセージだって。」

キューン…

乾いた機械音が鳴り止んで、瞬時。

四人にとって、二年ぶりの声が、聞こえてきた。



「こんにちは。」

「あれっ、こんばんわかな？」

「ともかく、みんな、久しぶり。元気にしていた？」  
「忘れられていたら悲しいから、自己紹介。」

「県立朝陽ヶ丘高校3年A組、出席番号4番」

「如月、涼です。」

### 第三話：再生（後書き）

長く間が空きました。

何度書いても納得がいくものが出来上がらなくて。

悠太くんがかなり壊れたキャラになってしまったのが残念です。

いよいよ主人公の登場です！

#### 第四話・回想（前書き）

樹が取り出した、涼の遺品のDVD。  
再生したDVDから語られたのは、まだ、ここにいた、涼の声だった。

## 第四話：回想

『このDVDを聞いてくれているのは…』  
涼が喋りだす。

『樹と龍一、多分悠太と忍もいてくれているかな？』  
画面の中の涼が、緩く微笑む。

『みんな、ありがとう。』

『…そして、運命とはいえ、みんなに辛い想いをさせてしまったことを、心から謝るよ。』

そういった涼は、蒼い髪がベッドにつくくらい、深く頭を下げた。

『でも、僕個人としては、複雑な心境。』

頭を上げた涼が、悲しそうな顔で呟く。

『彼女の許へ逝けるのだから、嬉しいはずなんだけど…』

『でも、みんなと離れたくないという気持ちも、確かにある。』  
強い瞳で、涼が言い切る。

『どちらもあるの感情…みんな、みんな大事。』

真っ直ぐに前を見据えた涼が、また緩やかに微笑む。

『思いました。』

『僕が、まだみんなの傍にいた時間を…』

「涼ー！ 樹ー！」

息を切らして駆け寄る龍一の髪は、平日なので黒い。

学校が休みの日になると、彼の頭は色鮮やかに彩られる。

しかし、学校に知られるわけにはいかない。

龍一たちが通う県立朝陽ヶ丘高校は、公立校では県内一の進学校だ

からである。

「龍一、今終わったの？」

鮮やかな蒼い髪をした青年が、にこやかに微笑む。

「その前に。」

蒼髪の青年の隣に立っていた青年が、瞑目して説教を始める。

「廊下は走るな。仮にも生徒会会計がやるべきことじゃない。」

「う…悪かったよ…。」

「また、反省文を提出したいのか？」

「嫌だいやだ…ムツツリと二人つきりで添削されるのだけは勘弁…」

「…何か言ったか？」

そんな二人のやりとりをみて、蒼髪の青年が微笑む。

「龍一をみて思ったんだけど、今月の標語は『ゆとりを持って行動しよう』にしようかな。」

「え…」

「だって、龍一はいつも余裕がなくて焦ってて、肝心なところで間違えて…」

「ちえ、生徒怪鳥には適いませんよ〜だ。」

『かいちよう』の文字に違和感を覚えた青年は、深く溜め息をつく。

「怪しい鳥…か。」

「あ？何か言ったよ『副怪鳥』？」

「…別に何も。」

『副怪鳥』と呼ばれた青年は、県立朝陽ヶ丘高校3年A組、出席番号17番水無月樹。

冷静沈着、理屈の天才。

「永遠の2番目」である。

生徒会副会長、学級副委員、図書副委員長、成績、チヨコの数、その他もろもろ…。

185cmを超える身長にも関わらず細身なのは、運動を好むから

だろうか。

蒼髪の青年は、3年A組出席番号4番の、如月涼。全てにおいて、「天然」である。

ほんわかとした笑顔と、優しく明るい口調。

一部の女子生徒から「女の子の格好して！」と言われる容姿。生徒会長で学級委員で図書委員長。

テストは100点を切ったことがない。

本人曰く、「これでお金があれば完璧なんだけど。」  
極度の貧乏性で、主夫。

蒼い髪は地毛である。

左の眼は赤色、左の眼は翠色である。

校則に引っかけりそうな髪形をしているのは、3年A組出席番号3番の、神無月龍一。

派手好きなのは、きっと幼いころこの地方に引っ越してきたからではないだろう。

黙っていれば涼や樹より二枚目…のはずだが。

こちらに引っ越してきたから出会った涼に完敗を喫してから、涼を終生のライバルと勝手に決めつけ、行動をとりにしている。

実は成績は涼と樹に続いている。

意外なところで博識である。

ちなみに、彼から見た水無月樹は、「むっつり」だそうだ。

「ところで。」

涼がにこやかに微笑みながら言う。

「龍一はまた振られたの？」

「…お前、地獄耳だろ…」

「だって。」

涼の顔から微笑が消える。

それを見た樹は、

『…始まったな…』

そう、感じていた。

自分が龍一に説教するのは、最早生活の一部である。

龍一は、涼と自分にとっては、自分たちの世界についてくることができる数少ない人間だと思っている。

龍一のことを、自分なりに認めているから、小言が出てくるのだ。しかし、涼の場合は別である。

中学の三年から、涼の態度に変化が出てきたのは理解していた。

感情というものをまるで持たなかった、人形のような人間だった涼が、少なくとも自分たちの前では感情というものを持って話しているように思えて仕方がなかった。

「…龍一。」

「聞いているの?」

「グーで殴るよ?」

涼の脅迫に、樹は現実に戻される。

そこには、『ぶんぶん』した涼と、可哀想なくらいしょんぼりした龍一がいた。

「…あい。聞こえてまふ…」

龍一は最早戦闘不能である。

潮時か。

「涼、そこまでにしてあげ。」  
止めに入る。

「十分反省して大人しくなったようだから、もうそれくらいで良いだろう。」

これで涼も。



そう思った樹は、いつもと空気が違うことに気がついた。

「…涼？」

涼の方を見やった樹は、慌てて涼から目を逸らす。

涼の『ぶんぶん』した視線が、自分にも向けられていること気づいたからである。

樹は回避は不可能と判断し、道連れを…

探さなくてもいた。

龍一のほうに駆け寄り、そっと耳うちする。

（状況はわからんが、巻き込まれた。逃げるぞ。）

龍一は救いに船とばかりに樹の誘いに乗る。

（わかった。健闘を祈る！）

（行くぞ！）

樹の合図とともに、龍一と樹はその場から逃げ出す。

不意打ちを食らった涼の顔は、微笑みを取り戻していた。

「あゝあゝでも、まだまだだね。」

涼は携帯を取り出して、そそくさとメールを打った。

「はあ…はあ…はあ…」

夢中で校舎を飛び出した龍一は、プール裏に逃げ込んだ。

水泳部はまだ寒いのに練習をしているらしい。

「元気なこつて…」

そう呟いた龍一は、我に返る。

「水泳部？ 練習？ こりゃ……」

龍一はいそいそと鞆を漁り、目当てのものがあることを確認した。

「雨のち、快晴だぜ……」

龍一の周りの空気が、生々しいピンクに染まったのは気のせいではないかもしれない。

「ほ……最近の後輩はこう、スタイルがアレで、いいなあ……」

龍一は至福の笑みを浮かべてオペラグラスを覗き込んだ。

「顔も好みだし、体型は文句ねえし……」

涼のことなどすっかり忘れて、どんなタイミングで声をかけようかと算段していた龍一は、背後からの気配に気づくのが遅れた。

「……何、してんの？」

「あひゃ！？」

やられ声みたいいな叫び声で振り向くと、水に濡れたアッシュグレイの髪の毛、華奢な青年が立っていた。

雨のち快晴、曇り……？

龍一の思考が混乱の色を帯びてきた。

「あ、いや、これは。」

冷静になれ、冷静に……

龍一は自分にそう言い聞かせて、その青年を見ると、苦虫を噛み殺したような表情になった。

「んだよ、忍じゃねえか。」

龍一を心底驚かしたのは、隣のB組の、皐月忍だった。

皐月忍。

出席番号6番。

いわゆる、『美少年』の顔かたちである。

ただし、黙っていれば。

口を開くと、そこから説教と嫌味が解き放たれ、空気を破壊する。

『相当腹黒い』という話もちらほら聞こえてくる。  
が、容姿のせいであり突っ込まれることはない。  
成績は中の上、得意科目は物理。

「そつちこそ、練習抜け出していいのかよ？」

「残念だったね。」

忍は龍一に背を向けながら言う。

「僕はもう軽く泳いだ。教室まで用事があったからちょっと戻って  
いたら。」

忍がクスクス笑う。

「例の二人が、会長にこつてり絞られているのを見ちゃったからさ。」

「い？」

龍一は、自分が何故ここにいるのかを思い出して、絶句した。

「頼む！ 見逃してくれ！」

「…条件。」

「はい？」

「だから、条件。見逃してほしいんでしょ？」

「…特製のビデオじゃだめか？」

「龍一の趣味は僕の趣味じゃない。」

「何なら良いんだよ…」

「今度、服おごつてよ。」

「ち…しゃあねえ。分かったよ。」

「詳しいことはまたメールで。」

「了解。」

「何が了解なの？」

第三者の声だ。

しかも、今一番この場においてほしくない人間の声。

二人にとって、特に龍一にとっては、よく聞きなれた声。

龍一はもちろん、忍も恐々声のしたほうを振り返ると。

「今の話、よく聞かせてほしいな。」

満面の笑みを浮かべた涼がそこに立っていた。

「りよ、涼、これは…」

龍一が言い訳をしようとするのを遮って、涼が話し始める。

「生徒会役員が、盗撮と買収、か。」

「あ、いや、その」

「…龍一。」

涼がにっこりと微笑む。

その微笑みは、龍一にとって、閻魔様がにっこりと微笑んでいるように、空恐ろしかった。

「お説教だね。」

龍一の顔色が、絶望色に染まる。

そんな龍一を見ながら、忍は

『これで逃げ出せる』

そう、思った。

「…じゃ、龍一は涼に任せるから。僕はそろそろ部活に戻っていい？」

そういつて、忍はプールに戻ろうとした。

しかし、事態は忍の希望通りには進まなかった。

「待つて。」

忍はその声に、微かに肩を震わせる。

「何を言ってるの。忍も共犯じゃない。」

「…ありえないんだけど。」

忍は涼につつかかろうとして、涼の顔を見て、凍りついた。

涼の顔から微笑が消えていたからである。

「忍は収賄。未遂だけど、立派な校則違反だよ。」

そう言った涼の顔には、再び微笑が戻っている。

「…もしかして、僕もお説教？」

恐々尋ねた忍に、涼は止めを刺す。

「もちろん。」

忍は龍一をちらりと見やり、ぼそっと呟いた。

「馬鹿龍一…」

忍の恨み節は、プールから聞こえる喧騒に、無情にも消し去られた。

プール裏で龍一と忍が、涼に捕獲されていたころ。樹は、特別教室棟の一角にいた。

校内では涼、龍一、樹は有名人である。

職員室や生徒会室などへいけば、教師や他の生徒に捕まる可能性が極めて高い。

涼はそこを狙い撃ちしてくるに違いない。

幼馴染の思考を予測し、生徒会の腕章をつけて、校内巡視と思わせながら、何をするわけでもなく特別教室を歩いていた。

どうやら、文科系のクラブ活動は、今年も堅調のようだ。

夏の展示会や発表会に向けた準備が、どの教室でも行われていた。

「水無月先輩。」

不意に、後ろから呼びかけられ、樹はどきっとした。

『涼が色目を使うわけではないが…』

振り返ると、女子生徒会書記の、河本真琴がいた。

涼が卒業した後の、生徒会会長の最有力候補である。

「河本か。どうした。」

緩く微笑みながら、真琴に話しかけた。

真琴は、爽やかな笑顔で、

「先輩、霜月先輩が、さっき家政科教室の辺りで先輩を探していましたよ。」

「そうか。ありがとう。」

礼を言っつて、家庭科教室へ向かおうとした樹を、真琴が呼び止めた。

「先輩。」

「どうした？」

「あ…いえ、今日は如月先輩と一緒にではないんですか？」

「涼とは先程別れたばかりだ。心配しないでも、会議の時間には涼も龍一も来る。」

真琴の表情が、ほんの微かに、別の影を帯びたような気がした。そんな樹の変化を知ってか知らずか、真琴は普段の明るさで、「いえ、如月先輩とご一緒ではない水無月先輩を見るのは珍しいので。」  
それでは、と言って、真琴は立ち去る。

『河本…龍一のことを口にしないのは、まだ許していないのだな…。』

『…俺と涼はセットか…。』

軽く溜息をついて、樹は、また深い溜息をつく。

『悠太、か。』

眩暈を覚えたのは気のせいということにしておこう。  
樹は家庭科教室へと足を向けた。

「わああ〜W あっちもこっちも美味しいや。んぐんぐ。」  
小学生？ それとも中学生？ が、家庭科教室で、料理研究会の作った洋菓子を食べている。

「悠太くん、口汚れてるよ?。」

一人の女子生徒が、悠太の口元を拭う。

「あ、ずるい！ 私が拭こうと思ったのに〜」

「悠太くん、まだたくさんあるから、遠慮なく食べてね。」

「悠太くん、オレンジジュースもあるよ。」

無我夢中で手当たり次第菓子をほおぼっていた少年？ の顔が、また明るくなる。

「うんうんww もっと食べるwwww」

一見すると、中学生、小学生でも十分通用する見かけの少年はそう言っていて、オレンジジュースをこきゅこきゅ、と飲み干した。

少年の名は、霜月悠太。

全く見えないが、高校三年生である。

クラスは忍と同じ、B組である。

出席番号は7番。

頭にはリボンをつけられているが、本人は全く気にしていない。

むしろ、「似合ってる？ 似合ってる？」と、ぴよこぴよこ跳ね回っている。

女の子と間違われてナンパされたり、職務質問を受けることは日常茶飯事である。

「おなかに入るものだったら何でもだいすきだよw」

…羨ましい。

それ以上に羨ましいのは、たくさん食べてもスタイルが変化しないことである。

「うにゃ、おいしいにゃ〜。よは満足にゃ〜v」

悠太がにつこり微笑むと、周りの生徒たちは、女性用の服を取り出す。

「悠太くん、今日はこれを着てみて。」

「あ、こつちこつち。こつちが先だから！」

「悠太くんもお化粧してみない？」

「先輩』とは呼ばれない。」

「悠太くん』である。」



そんな家庭科教室に、心底樹は入りたくなかった。しかし、『ぶんぶん』している涼に捕まることを考えると、「前門の虎、後門のなんとやら…か。」  
意を決して、家庭科教室の扉を開けた。

ガラガラ。

「はい、料理研究会です。…あ、珍しいですね。」

「…ああ。」

辛うじて微笑らしきものを作りながら、樹は何かの宣告を受ける前のような気分になっていた。

「なになに、誰か来たの？」

首をひよいと入り口のほうに向けた悠太の顔が、お日様も翳る笑顔を紡ぎだす。

「樹く~~~~んvvvvvv」

ひよい、と椅子から飛び降り、とととて、と樹のほうに悠太は駆け出す。

「じーる！」

悠太が全身で突っ込んだのは、毎度のごとく、樹の鳩尾だった。

「ぐはつつつ」

樹は一瞬息が詰まる。

呼吸を整えながら、樹は悠太の頭をくしゃくしゃ、と撫でた。

「悠太。」

悠太にとって、樹が名前を呼んで、頭を撫でて、微笑んでくれるのが一番好きだった。

「にはは」

悠太が照れ笑いをする。

「もー、あなたったら、帰りが遅いよv」

「…頼むから、俺を正常な人間にしてくれ…」

「でも、迎えに来てくれたから許す！」

「迎えに来たつもりは毛頭ないのだが…」

「でも、樹君一人で迎えに来てくれるなんて、感激。」

悠太が樹の腕を抱え込む。

樹の腕章が、悠太の頭をつんつんする。

「ね、今日は如月君と龍ちゃんはいないの？」

「あいつらとは少し前に別れた。…生徒会の会議が始まれば、また嫌でも一緒になる。」

「じゃ、樹くんも、お菓子を食べよう！」

そうしよう、といった悠太は、樹用の席とお菓子を調達してくる。

「水無月先輩、どうぞ。」

女子生徒が、樹にお茶を差し出す。

「ありがとう。今日は何のお茶かな？」

「先輩が飲みたい、と仰っていた、宇治の玉露です。」

「それはご機嫌だな。」

目の前に出された創作菓子をほおばりながら、

「この分なら、今年の発表会もいい成績が期待できそうだな。」

樹が心から賛辞を述べる。

悠太のときとはまた違った反応が辺りを支配する。

『悠太くんがかわいいなら、水無月先輩は「かつこいい」だよねー。』

『だよねー。彼氏候補だよ。』

そんな内緒話を周りがしている。

『こんな毎日が、この先もずっと続いていけば良いな…』

何となく、樹はそう思った。

あと1年。

あと1年で、高校生活は終わり。

今年限り。

今年、だけ。

がらがらがら。

樹の平穩は、扉を開ける音にかき消された。

「ここにいたんだ。」

この声は。  
聞き違うはずもない。

「おじゃまします」と言って、その声の主に続いて、かなり見覚えがある顔が2つ、続いてくる。

「忍。」

何故忍が涼といえるのかは分からなかった。

が、忍の表情から察するに、あまり良くない感じだ。

「よう……。」

龍一の声には生気が感じられない。

おそらく、ここに来るまで、たつぷりと絞られたのだろう。

そして、涼の微笑みを認めると、自分も龍一の後を追うのか、と思わされる。

そんな樹の思考を読み取った涼は、

「その前に、せっかくだから僕もただこうかな。」

にっこり微笑むと、手早く自分の座る場所を確保した。

「ほら、龍一も忍も座りなよ。」

龍一と忍を座らせると、涼は、「それでは、いただきます。」と、手近にあったケーキをほおばった。

「うん！おいしい！」

につこり微笑むと涼は味の解説を始めた。

「檸檬の中にほんの微かに感じたりキユールが、全体の甘みを、甘すぎないように調節しているね。」

涼はさらに続ける。

「生地にキウイを刷り込んだアイディアもいいし、これなら今年も良い結果が期待できるね。」

「ごちそうさま、と言って、樹たちを見やる。」

「きさらぎくんvvv」と擦り寄ってくる悠太の頭をくしゃくしゃにしながら。

しかし、龍一と忍は、口にしない。

そんな二人をみて、涼は、

「このケーキは、カツ丼なんだから。」

早く食べようよ、と促す。

涼の発言にきよとん、とした悠太は、

「ねーねー、きさらぎくん、これケーキだよ？ カツ丼じゃないよ？」

カツ丼も食べたいけど…と付け加えながらそういう。

「ゆーた。」

涼はにこにこしながら言う。

「警察の人は、よく悪い人にカツ丼出すでしょ？」

「うん。出す出す。」

「僕が警察の人で…」

一瞬、微笑が消えた顔で三人の犯人を見やって、また微笑みながら、  
「悪い人三人に、カツ丼の代わりにケーキを食べて貰いたくて。」  
「そっかあ!」

納得、という顔で、悠太はびよんびよん跳ねる。

「じゃ、僕もついていってもいい?」

「うん、いいよ。」

それでも食べない龍一と忍に向かって涼は

「は・や・く・た・べ・よ・う・ね」

観念した龍一と忍はほそほと食べたす。

4人を見ながら、涼は、

「そういえば、今年で卒業なんだよな……」  
ほそつと呟いた。

『樹とは保育園から。

龍一とは小学校から。

忍と悠太とは高校から。』

『大切な、大切な、友達。』

『…僕が得た、掛け替えのない、人たち』

『ずっと、こんな風に過ごしていけるんだ』

『疑いもしなかった。』

『信じていた。』

『みんなと離れることはないんだと、思ってた…』





#### 第四話・回想（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

長さが自分の中では非常に長いですが、1111ではつきりしとせせておきたいこともありましたので。

第五話・予兆（前編）（前書き）

涼が樹たちに思い起こさせた、日常。  
それは、全ての始まりだった…。

## 第五話：予兆（前編）

『僕が、自分に異変を感じたのは、三年生になって直ぐだった。』

『今思えば、僕の身体は、もう崩壊を起こしていたのかもしれない。』

『普段通り』

『未だ何も知らなかった僕にとって、一番苦痛だった。』

「はい、みんな。」

まだ若い女性教師の声が、教室に響き渡る。

「昨日から続いた検査も、今日で終わりです。」

「今年も朝陽ヶ丘高校の名に恥じないように、がんばってくださいね。」

そういつて、「如月君、手伝って。」

と、今日の検査項目である、身体測定用の紙を配る。

「はい、みんな、今日は男女に分かれて、身体能力の検査をします。」

「昨日の学力テスト、お疲れ様。」

昨日から、毎年恒例の全国一斉検査が、行われていた。

「真奈美ちゃん、俺の検査を、真奈美ちゃんのむんだがぶっ！」

龍一が、見境なくセクハラ発言をしようとしたその刹那、涼の鉄拳が龍一の横つ面を直撃した。

「龍一。」  
にっこり微笑んだ涼は、

「石川先生に、そんな失礼なことをしてはいけないよ？」

「だから、早いうちに謝ろうね。」

涼の鉄拳で、一瞬意識が途切れた龍一は、自分を見下ろす涼の背中に、花と悪魔を認めた。

「…ふあい。」

涼には逆らうことができない。

「真奈美ちゃん、ごめんよ。」

「俺の嫁になったときに、まっ…ぶっ！」

懲りずに教師を口説こうとした龍一の鳩尾に、今度は樹の鉄拳が突き刺さる。

「いい加減にしないか。」

「そうだよ、龍一。」

「また、お説教だよ?」

新学期早々、延々と涼の説教を喰らった龍一は、

「…真奈美ちゃん、ほんつと、ごめんなさい…」

そう、呟くしかなかった。

すみません、と行って、涼が着席し、樹も座る。

もう慣れたよ…といったら、全国一位の成績の青年は、きつと怒るだろうな…。

真奈美は、そう思った。

石川真奈美。

26歳国語教師。

国立教育大学を首席で卒業。

教師暦4年で、学年主任を務めている。

龍一が指摘した通り、その子供っぽい顔に似合わない体型の持ち主。多くの生徒の憧れの的である。

「彼氏とは別れたばかりだって」とは、龍一の調べ。

「それじゃ、男子は体育館で着替え。如月君、水無月君、よろしく

ね。」

「はい。」

「わかりました。」

涼と樹に続いて、男子がぞろぞろと立ち上がって、教室から外に出

る。  
ぼんやりしていた龍一は、樹に首根っこを捕まれて、名残惜しそうに外へ出た。

名残惜しいのは本当だが、龍一には別の疑念が持ち上がっていた。  
樹の鉄拳は相変わらず容赦無いが…。

「涼の鉄拳、いつもと違った…」

いつも涼に『グーで殴られ慣れている』からだろうか。

龍一には、涼がいつもと違うように見えて仕方が無かった。

『文武両道』

如月涼と水無月樹を評するのに、これほど適切な言葉はない。

こちらに引越してきた龍一は、迷わず空手の道場の門を叩いた。

喧嘩が強くなりたくて始めた空手は、幼い龍一の自己顕示欲を満たす手段になっていた。

しかし。

如月涼と、水無月樹には、全く適わなかった。

特に涼には。

一本も取れず、鬨討ちも失敗して、龍一は心を改めた。

『こいつを越えることが、俺の生涯を変える』

後で知ったことだが、涼と樹は「神童」と呼ばれていた。

古くから彼らを知るものは、何処かよそよそしく彼らに対して接していた。

特に涼に対しては、いい大人までが、どこか引け目と皮肉をもって

接していた。

しかし、龍一はひたすら彼らに挑み続けた。

そして、いつの間にか、彼らと共に過ごしていた。

だから。

龍一は、涼の異変をなんとなくが感じていた。

自分の予感が外れてくれることを願いつつ。



第五話：予兆（前編）（後書き）

読んでいただいております。同じ時間を3つに分けて書いて見ました。ご意見感想、お待ちしております！

第五話・予兆（中編）（前書き）

龍一がいつものごとく、問題を起こしながら始まった身体検査。どうなってしまうのだろうか…？

## 第五話：予兆（中編）

体育館では、各クラスの男子生徒が集まり、着替えを始めていた。

「いつきくう〜んvvvvv きさらぎく〜んvvv」

人並み外れた高い声が、体育館に響き渡る。

その声を聞いたとき、樹は、

『今日は厄日になりそうだ…』

全力でダッシュしてくる悠太の頭を撫でながら、樹はそう思った。

「…相変わらず、きれいな肌しているんだな…」

龍一が、忍をじろじろ眺めながら、そう呟く。

「…セクハラ、やめてくれる？」

忍がムツとした表情で、龍一に突っかかる。

また爆弾を踏んだ。

龍一は、しまった、と心底そう思った。

忍と悠太はよくナンパされる。

悠太は老若男女問わず人気だが、忍は年下趣味の人に大人気だ。

悠太はお菓子を奢ってもらえると大喜びだが、忍はそんな自分の容姿が気に入らない。

男らしい、樹や龍一みたいなカッコよさ、大人らしさがほしかった。

「あ…いや、わりいわりい。」

龍一はバツが悪そうに忍に謝ると、いそいそとカッターシャツを脱ぎ始めた。

しかし、龍一の悲劇は、まだ始まったばかりだった。

「え〜いwww」

ちようどカッターシャツごとアンダーウェアを捲り上げた龍一の腰に、悠太がぶら下がる。

「むggg…!？」

慌てて龍一は、悠太を引き離そうとした。

しかし、脱ぎかけのシャツたちが、首に絡まってしまった。

「y…t、h…h…r…!」

龍一の声にならない叫びが、体育館中にこだまする。

すっかり着替え終わった忍は、先ほどのお返しとばかりに、龍一の後ろから満面の笑みを浮かべて抱きついた。

「k…k…t y、k…!」

満面の笑みを浮かべて、わざと龍一の首に抱きつく忍。

何も知らずに腰に全体重をかけ、顔を『すりすり』してくる悠太。

立場と思考は違えど、絶妙なコンビネーションは、龍一の体力を急速に奪っていった。

龍一の顔が真っ青になっていくのを見た男子数人が、慌てて涼と樹を呼びに行く。

その頃。

「涼、見事に割れてるな。」

「樹だってそうじゃない。また自己練してるの?」

「…一度は、お前に勝ちたいからな。」

「ふふ…負けないよ。」

涼と樹は、体育館の片隅にある控え室にいた。

「着替え終わったから、先に行くね、樹。」  
そう言つて、荷物を抱えて控え室を出ようとした矢先、数人の生徒が飛び込んできた。

「如月！ 水無月！ 大変だ。すぐに来てくれ！！！」

「k r s... m、 m、 gg...」

人だかりをかぎわけた涼が目にしたものは、首と腰を見事に極められている、青ざめた龍一の姿だった。

「...」

涼は、しばらく俯いていた。

涼の姿を目にした生徒が、涼のそばへ駆け寄ってくる。

ぷちん。

涼の中で、何かが音を立てて切れた。

その瞬間。

「くらあ~~~~！！！」

我に返った涼は、自分でも何て大きな声を出してしまったんだろうと思うと、少し恥ずかしかった。

体育館の中。

衆目の中。

本気で怒っている涼の目の前には、三人の容疑者がちょこん、と正座していた。

…尤も、約一名はきよとん、としたままだが。

「…龍一。」

怒気を隠さずに、龍一の方をじろり、と睨む。

その殺気が伝わったのか、回りの生徒たちも涼を見つめている。

「…龍一、返事は？」

「…はい。」

消え入りそうな声で龍一が返事をする。

「みんなが知らせてくれなかったら、とんだ大惨事になるとこだったんだよ。」

「だからって、そんな怒ること…」

言いかけてた龍一は、涼の表情の一瞬の変化を見逃さなかった。

ああ、そういえば。

涼は人の命に関して、過敏なくらい反応する。

何時からか忘れたか。

あれは、一時期、中学校に来なくなってからか。

龍一の沈黙を確認した涼は、忍を見つめた。

「忍。」

「わかってるよ。」

開き直り気味に答えた忍に、一部の生徒が『いい気味だ』『さまあみろ』という野次を飛ばす。

しかし、涼の視線が、周囲の喧騒を一瞬にして沈黙させてしまった。

「やりすぎだと思っているんだったら、何故止めなかったの？」

「龍一の限界を知りたくて。」

「こつという結果になると分かっているのに？」

「龍一が。」

無意識に口を尖らせて反論する忍に対して、涼は一言。

「自分の感情を他人のせいにするのは、僕の中では割と最低な部類に入る。」

「…」

何故だろう。

涼の小言は、苦痛だけど、嫌じゃない。

龍一にナンパされたのがきっかけで知り合った、過剰にお節介な、変人。

でも。

その言葉は。

僕の、深いところまで、染みてくる。

最後に、やや困った顔で涼は悠太に呼びかけた。

「ゆーた。」

「きさらぎく〜ん」

にこにこして、立ち上がるうとした悠太。  
しかし。

「悠太、正座だよ。」

厳しい顔で、悠太に告げる。

「う〜」

「悠太。」

さすがの悠太も、涼の本気の怒りには適わなかった。

涼の目を、潤んだ目で見つめている悠太に、

「ゆーた。」

いつものように、優しく語りかける。

「いつも言っているだろ？」

「…ごめんなさい…」

「…ごめん…なさい…ひつぐ、ひつぐ、ごめんなしやい…」  
うえーん、と、いきなり悠太は泣き出してしまった。

「悠太が一番素直だね。」  
そう言つと、

「ほら、龍一と忍とみんなに『ごめんなさい』するよ。僕も一緒に謝るから。」

「うん…。」

そういつと、大きな目に涙をなみなみと浮かべながら、

「龍ちゃん、ぶらさがつてごめんなさい。しのぶきゅん、巻き込んじゃつてごめんなさい、みんな、迷惑かけてごめんなさい。」

最後のほうは嗚咽になって聞こえなかったが。

「はい。よく言えました。」

につこりと涼は微笑む。

また一部の生徒が、悠太に対して「キモい」とか、「ウザい」とか言い出す。

どくん。

駄目だ。

このままじゃ、止められない。

駄目だ。

しかし、涼にかかっていた重圧と不安は、涼の心の枷を緩ませてしまった。

「…いい加減にするんだな。」



地の底から呻くような低い声で、涼が周囲を見渡す。

「こいつらは俺が罰した。」

微笑みが完全に消えた涼の顔は、いつもの涼とはまるで別人のようだ、

「文句があるなら受けて立つ。」

「それとも。」

瞑目した涼が目を見開いたその瞬間、凄まじい重圧が体育館を包んだ。

「…きさらぎ、きゅん?…」

不安に怯えた顔で、悠太が涼を呼ぶ。

「…如月?」

忍が『信じられない』と言う顔で見つめている。

「目エ覚ませ!」

バギッ。

龍一が渾身で放った右ストレートに、涼の体が揺らいだ。

破壊された空気が、平穏を取り戻す。

「…うーん…」

沈黙を破ったのは、いつもの涼の声だった。

「あれ、みんな、どうしたの?」

にっこり微笑んだ涼の顔を、誰一人として直視できなかつた。

「…そう。そんなことがあったの。」

「はい。」

申し訳ありませんでした、と頭を下げる樹に、真奈美はしょうがないよ、と手を振る。

「如月君も、だいぶ疲れているのかな？」

「涼は誰にも弱音を吐きませんから…」  
自分たちにも、と付け加えようと思ったが、樹はその言葉を飲み込んだ。

それを口にしてしまったては、認めたくない溝を認めてしまうようで嫌だった。

「…神無月君たちは？」

真奈美は話題を変える。

如月涼のことははっきり言って分からない。

が、水無月樹のことならば、ある程度分かる自信がある。

樹の心情に配慮して、真奈美は話題を変えたのだった。

「涼が責任を持って対処していますから、心配ないです。」

平静を取り戻した涼は、いつも以上の鮮やかな手並みで、予定時刻5分前に着替えを完了していた。

「…今は涼が抑えています。」

「…なあに？」

「涼がいなくなったら、問題が山積していたと思います。」

「それを言われると弱いな。教師として。」  
「先生を責めているわけではありません。」

「ただ、人が人の心を忘れてしまっているような気がしてならないだけです。」

そういった青年の顔は、真奈美が今までに付き合ったどんな男よりも、魅力的な男の顔だった。

「また、そういう顔をするんだから。君は。」

「…せ、先生？」

真奈美が樹に顔を近づける。

明らかに職権を乱用しているのだが、樹はどうしていいのかわからない。

いや、龍一のように自分にはできない。

湯気が出そうなほど真っ赤になっている樹に、真奈美は更に顔を近づける。

「もう少し、肩の力を抜いたほうが良いよ。」

樹の唇に、微かな温もりが残る。

呆然としている樹を尻目に、『女子の方を見てくるね』といって、真奈美はその場から立ち去る。

「…」

樹は自分の唇に手をやり、涼が自分を探しにくるまで無言で立ち尽くしていた。

「あーあ、あんな良い男、そうはいないな…」

別れたばかりの最低な男の顔と、先程まで自分のそばにいた青年の

顔を思い比べる。

「断然、彼のほうがいいのだけど。」

問題は年齢差だけじゃないかな、と思い込み、自分の気持ちを封印した。

「はい、これから検査を始めます。」

教壇にたった真奈美は、女の顔から教師の顔になっていた。

「如月君、手伝って。」

「はい。」

真奈美と涼が、検査場所の用紙を配る。

いつもの風景である。

しかし、樹だけは、先程の真奈美の行動を思い返して、一人俯いていた。

「樹、どうしたの?」

涼が呼びかける。

「いや、何でもない。」

努めて平静を装って、そう答える。

樹の横の席の龍一が、ぼそっと

「またエロいこと考えてたんじゃねえの?」  
と茶化す。

クラスの女子が、

「龍ちゃんじゃないんだからそんなわけないでしょ。」

「水無月君に限ってそれはありえないし。」

と龍一を非難する。

『ムツツリなんだけどな…』

龍一は拗ねたような顔で、真奈美のほうを見つめた。

「はい。みんな、静かにして。」

流石である。

騒がしくなりかけた教室を静かにさせる、教師暦3年で学年主任を務める真奈美の手際は、誰が見ても素晴らしいものだ。

「男子は水無月君、女子は如月君の指示に従ってね。」

涼が女子を引率して教室を後にし、樹は男子を引率して体育館へと向かう。

体育館へ向かう途中。

「水無月！、今年は如月に勝てそうか？」

男子の一人が樹に語りかける。

「いつも勝つつもりでやっている。」

「そんなこと言って、また負けるんじゃないの？」

違う男子が樹に絡む。

「今年は絶対負けない…そんな気がするんだ。」

何故だろう。

体育館での騒動から、樹の胸に消えない疑念が沸き起こっていた。

『涼…何もなければお前は俺より数段勝っているはずだが…』

「オラ、ムツツリ、時化した顔してんじゃないぞ！」

興奮している龍一が荒々しく肩を叩く。

「今年こそ、涼に勝ってやろうぜ！」

「ああ。」

龍一の声に、胸に疑念を抱えながら、樹は検査を始めた。



第五話：予兆（中編）（後書き）

お読みいただいております。いかがでしたでしょうか。

涼がそろそろ物語の主役になってきます。

これからも光野ワタルと『黄昏行く街で』をよろしくお願いします。

## 第五話：予兆（後編）

「みんな、一日お疲れ様。」

夕暮れ時の教室に、どよめきが溢れている。

「はい、みんな静かに！」

真奈美が声を荒げて、中々静かにならない。

「静かにしようよ。」

微笑を湛えた涼が、沈黙を促して、やっと騒ぎは落ち着いた。

「もうみんな分かっていると思うけど…。」

真奈美もやや興奮している。

「今年は学年内の順位に変動がありました。」

クラス内がざわめき立つ。

「昨日の学力検査は3人が1位でした。名前は言わなくても良いよね？」

わかってまーす、という顔がクラス中に溢れる。

「今日の身体測定の結果を加算した総合結果ですが。」

真奈美が名前を呼び上げる。

「学年1位、水無月樹君。」

おー、という声が響き渡り、

「やったじゃん水無月！」



「おめでとう水無月君。」  
「という声が聞こえてくる。」

しかし、真奈美が呼び上げた次の声に、沈黙が支配する

「学年2位、神無月龍一君？」

真奈美も、『信じられない』という顔をしている。

「やった！、ちょ、俺様如月抜いたぜええええー！」

雄叫びとともに、龍一のガッツポーズ。

『これで校内の女の子たちも、俺の魅力を…あれ？』

龍一が勝利の余韻にひとしきり浸り、我に帰ると、クラス中が、龍一に対して疑問の視線を送っていた。

「龍、オマエどんな詐欺やったん？」

「龍、幾ら積んだん？」

「龍ちゃんが水無月君はともかく、如月君より上なんてありえない。」

「龍ちゃんの奇跡キターーーーーーーー」

「え？樹みたく賞賛のコメントはないの？」

拍子抜けした龍一がきょとんとした顔で、クラス中を見渡す。

そんな龍一に真奈美が止めを刺す。

「そうねえ…」

「教師が言うのもなんだけど、何かの間違いであると思いたいな…」

「ま、真奈美ちゃんまで…」

がつくりとうなだれた龍一は、燃え尽きた顔をしていた。

「学年3位、如月涼君。」

「はい。」

微笑を絶やさないう涼。

そんな涼に、

「如月、秋でリベンジだ！」

「如月、龍には絶対勝てよ！」

「涼君、お疲れ様。疲れがたまってたんだよきつと。」

「涼君、私の中ではキミが一番だから。」

次々に向けられる励ましの声。

みんなありがとう、とあって、涼は微笑んでいる。

「なんで涼と俺じゃこんな扱い違うんだよ……」

龍一の呟きは、クラスメイトのざわめきに、空しく消え去った。

ガタン、とあって、電車が停まった。

地元の駅に降り立った涼、樹、龍一は、帰宅ラッシュの混雑を、慣れた速さで進んでいく。改札を過ぎて、再開発中の駅周辺を抜けるまで、三人とも終始無言だった。

何となく漂っていた気まずい雰囲気を消し去りたい。

そう思った龍一が『いつものコンビニ行こうぜ』と言い出して、三人はコンビニへと立ち寄る。

涼は檸檬、樹は柚子、龍一はもう春なのにホットココア。

手早く店の裏手に回り、龍一がどっかと腰を下ろす。

樹は顔を顰めた。しかし。

「じゃあ、今日は僕も座ろっかな。」

意外である。

いつもあんなにうるさい涼が、ちょこん、と龍一の右隣に座った。

「涼。」

顔をしかめながら、樹は立ったままである。

「や、涼。やっつと勝てたぜ！」

荒々しく涼の肩をポンポン叩く。

痛いよ龍一、と言って、涼は相好を崩す。

樹の眉間にまた皺が刻まれた。

「んだよ、ムツツリ。」

三人だけの時は、龍一は樹をムツツリという。

龍一の青少年らしい若さに付き合わされたのがきっかけらしい。

樹を見やっつて龍一は、

「念願の如月越えだぜ？ もっと喜ばうぜー！」

と言つと、樹は

「…本人を前にして喜ぶことはできない。」  
と応じる。

『つたく、いつもの調子か、不機嫌二割増しだぜ…』  
やれやれだぜ、と言つて、龍一はホットココアを残り一口まで一気に飲み干す。

「龍一、飲むの早いね。」

涼が微笑む。

「龍一の早飲みや早弁には勝てないなあ。」

「…お前、絶対え嫌味だろ。」

「ホントの事じゃない。」

すくすく育っているんだね、と結論づけた涼に、龍一は食い下がる気持ちになれなかった。

「そーいえば。」

話題を変えようと思つた龍一が、

「お前ら今週の週末空いてんの？」  
と聞く。

「うーん…僕は夕方からなら空いてるよ」

「俺は大丈夫だ。何かあるのか？」

「実は…」

と言つた龍一は、懐から二枚、ライブのチケットを取り出す。

「や、これ余つちまつたからさ。」

一緒に行かねえか？と誘いをかける。

「俺はパスだ。」

『どうせ振られた彼女と行くつもりだったんだろう。』  
樹はそう断じた。

それだけでなく、普段の龍一の素行は学校に知られたら、退学も十分あり得る。

「生徒会役員が遊びに興じるのは宜しくない。」

樹は龍一に釘を指す。

「それでなくても、俺たちは受験生だ。平時ならともかく、進路を決める時期に遊興に耽るのはどうかと思うぞ。」

説教モードに入った樹。

しかし、龍一はライブのチケット 万円を無駄にはしなくなかった。

「いーじゃんか。白鶴図書館で勉強した後に行けば。」

「…部活と生徒会があると知っていて言ってるのか？」

「良いじゃない。」

涼が二人の会話に割り込む。

「樹、龍一、行っておいでよ。生徒会は僕と河本でちゃんとやっておくから。」

そう言い抜けた涼を、樹は不快の念を隠そうとせずに睨み付けた。

涼は涼しい笑顔で微笑んでいる。

「納得できる理由があるの？」

穏やかに涼が樹に告げる。

「だって、樹は肩肘張りすぎて、余裕がないから。」

「…思い当たる節、あるでしょ？」

にっこりと涼は微笑む。

『石川先生の事を涼は知るはずないが…』

思い出して、はっとする。

真奈美に指摘されたばかりだというのに、この体たらく。

樹は己の不甲斐なさを呪った。

「ムツツリ、真奈美ちゃんとかあったのか？」

龍一がニヤニヤしながら樹を見上げる。

「そーだよな。炉キヨヌーの真奈美ちゃんに『萌え』って感じじゃねえのか？」

「…龍一のような疚しい心は持ち合わせていない。」  
呻くように言うが、龍一も涼も信じていない。

「ともかく。」

樹の苦戦を見かねて、涼が助け舟を出す。

「樹も、龍一のようになれとは言わないけど、効率的な気分転換を学んだ方がよいよ。」

うんうん、と龍一が頷く。  
が。

「…ちよつと待った。」

「どうしたの？」

「涼、オマエ密かにバカにしただろ？」

むくれっ面で龍一が涼に絡んだとき。

『うんうん』

コンビニの店長の声だ。

「げげっ!？」

龍一が慌てて残りのココアを飲み干しながら、走り出す。

「じゃ、学校で！」

涼も走り出す。

樹は暫し呆然としていたが、

「樹、早く逃げるよ！」

涼に強引に手を引かれて、釣られるように走り出した。

「ここまで来れば大丈夫だね。」

「そうだな。」

急なダツシュというのに、涼も樹も息は切れていない。

「龍一は……」

「龍一なら大丈夫だよ。」

涼が強い口調で言い切る。

「何でそう言い切れる？」

訝しげに樹は涼に尋ねた。

涼は一言、か細い声で、

「信じてるから。」

樹はそれ以上何も言えなかった。

「それじゃ、樹。」

そろそろ帰らないと色々五月蠅いから、と言って涼は別れようとする。

しかし、樹はどうしても確かめないといけないことがあった。

「…待ってくれ。」

「どうしたの？」

深刻そうな表情をした樹に、涼の顔から微笑が消える。

「今日の検査、お前は全力だったのか？」

「…。」

「答えられないのか。」

「…。」

「手抜きでお前に勝っても、俺にとっては意味のないことだ。」

「…。」

「…黙ってばかりいないで。」

樹は涼の胸ぐらを掴む。

「何とか言えよ！ りよ…。」

その刹那、樹の顔に、涼の平手が飛んだ。

樹が殺意を持った目で見つめてくる。

しかし、涼の威圧と平手打ちが、樹の殺意を内側に封じ込めてしまった。

「…樹。」

涼の声がやや低くなる。

「僕は手を抜いてない。」

樹に背を向けながら、言の端を続ける。

「今の。」

「…今の僕の全力を尽くした。でも、君が不服になるのも分かっていた。だから。」

樹のほうに向きなおる。

「さっきの一発は、甘んじて受けた。」

「…。」



樹は絶句する。

そんなことはない、涼の本気は自分をはるかに凌駕しているはずだ。

「そんなことは。」

樹の口から、本音が零れ出た。

「…君がどう思っているのか知れないけど。」

「普段の僕は、普段の僕なりに全力だ。」

もう話すことはない、といった素振りです、樹に背を向け歩き出す。

樹にとっても、今日は悪夢のような日になった。

『…樹。』

画面の中の涼は、悲しそうな顔をしている。

『君は僕に対して、コンプレックスを持っていた。』

『その反動で、特に龍一にはきつく当たってしまったんだ。』

『もっと、水無月樹という人間を知らないといけないと思う。』

『でも。』

『君が僕を見てくれていたことは、本当に嬉しかったよ……。』

第五話：予兆（後編）（後書き）

お読みいただいておりますがとうございまして。  
複雑な心境の樹くんです。

ご意見ご感想お待ちしております。

## 第六話：忍従（前書き）

涼と樹の擦れ違い。

二人を囲む人間たちにも、その擦れ違いは、変化をもたらす…。

## 第六話：忍従

地下鉄の出口を出て、樹は憂鬱な気分になった。  
昨日のことがあってから。

樹は、一人で学校への道を歩いている。

普段なら隣に、穏やかな笑顔と賑やかな笑顔があるのに。  
それなのに、今日は二人と共にいようという気がしなかった。

校門に咲く桜の枝が、樹の頭を掠める。

そんなことに気づかない彼の体は、生徒会室へ向かっていた。

生徒会室の前に着いて、樹は、彼と涼と真琴しか持っていない、生徒会室の鍵を取り出す。

しかし、鍵は空いていた。

未だ朝の七時過ぎなのに。

『まさか、涼も同じ電車…？』  
そんなはずはない。

朝、何時もより二本早い急行に乗ってきた。  
駅に涼も龍一もいないことは確かである。  
意を決した樹は、扉を開ける。

「あ…水無月先輩…。」

「河本か。おはよう。」

心底ホツとした。

涼でなくて良かった、と溜め息を漏らす。

「水無月先輩。」

真琴が樹を呼ぶ。

少し、呆けていたようだ。

「あ、ああ。」

「河本、今日は早いな。どうした？」

真琴に動揺を悟られぬよう、努めて平静に話しかける。

「いえ、一昨日の会議で、如月先輩に頼まれた資料の準備を。」

真琴は樹の方に向き直り、

「それより、水無月先輩、今日はお一人ですか？」

「ああ。」

「珍しいですね。」

「そうかもな。…その資料作り、俺も手伝おう。」

「でも…！」

「…迷惑か？」

「そ、そんなことないです。」

先輩鞆下ろして下さい、と真琴は樹に促す。

後ろ手で、樹に気づかれないうよう、生徒会室の鍵を掛けながら。

自分を全く疑っていない樹を見ながら、真琴は、

(こんな機会…何て…)

神様、少しでも勇気を下さい。

そう、祈った。

その頃。

「涼〜。」

龍一は待ちくたびれた顔で涼を見る。

「うん…ダメ。メールも電話も繋がらない。」

「しゃあねえ。先行こうぜ。」  
「そうだね…遅刻できないしね。」  
そう言っつて、涼は携帯のキーを一瞬滑らし、龍一とともに朝のラッシュアワーの電車に乗り込んだ。

「先輩、ありがとうございました」  
そう言っつて、真琴は樹に頭を下げる。  
「俺は大して役に立ってない。河本の努力には、こちらこそ頭が下がる。」

そう言っつて、樹は緩く微笑んだ。  
その笑顔を見た真琴は、決断した。

「…先輩。」

真琴は、樹の背中に抱きついた。  
樹の背中に、真琴のふくよかな感触がのし掛かる。

「先輩…ずっと、ずっと…」

樹は突然の事に、何もできない。  
涼はともかく、龍一とは因縁浅からぬ相手。  
それに、女性の扱いほど苦手なものはない。  
しかも、樹の周りには、常に女性の影が絶えない。  
そんな自分なのに。

河本は、総て理解っているのか。

「…河本。」

ゆっくりと真琴の腕を解きながら、樹は諭すような口ぶりで話しかける。

「知つての通り、俺と龍一は友人だ。それでも」

「それでもいいんです。」

真琴は樹を見据えてそう言い切った。

「先輩のこと、ずっと好きでした。」

「…河本は涼の事が好きだと思つていた。」

この場に涼や龍一がいたら、今の発言は全力で否定される。

一人で来て良かった、と妙な安心感を覚える。

「…如月先輩は、純粹に尊敬できる先輩だと思つています。」

「私は、水無月せんぱ…」

樹は真琴の言葉を待たず、振り向きざまに、真琴の背中を胸へ引き寄せる。

「河本。」

「はい。」

上気だった真琴の顔は、ほんのり紅が射して、健康的な美しさを醸し出していた。

「…これが俺の返事だ。河本。」

「…真琴つて、呼んでください。」

「それじゃ、俺のことも樹でいい。」

朝陽の反射の中、改めて向かい合った二人は、どちらともなく唇に口づけた。



「おはよう。」

「はよー。」

教室に涼と龍一が入るだけで、教室の空気が変わる。

「はよー、如月。」

「おはよう、涼くん。」

涼にクラスメイトが声をかける。

おはよう、と言いながら涼は自分の席に鞆を置く。

毎日のことだが、龍一は、

「俺には挨拶ナシかよ!？」と言う。

そして、毎日のような、クラス中の『だって、龍ちゃんだし』という反応に、しよげ返る。

『樹、いないな…。』

結局、涼と龍一は樹を待たずに学校に来た。

珍しいこともあるんだね、と道中龍一に語ってはいたのだが。

『いないと、何か違うな…。』

平静を装っていても、涼は落ち着かなかった。

結局、樹が教室に入ったのは、ホームルーム直前だった。

樹の表情が、いつもより明るいのを見て取った涼は、

「樹、おはよう。今日は朝からご機嫌だね。」

と、微笑みながら語りかける。

しかし、樹の反応は、涼が期待していた反応ではなかった。

「…おはよう、涼。」

樹から先程の明るい表情が消え失せ、陰鬱な顔になって、涼の隣に座る。

「…やっぱ、怒ってるの？」

「…別に。」

「じゃ、なんで不機嫌そうな顔になるの。」

「…涼には関係がない。」

関係ないどころか、涼は不機嫌の当事者なのだが。

樹は、昨日から今までの出来事を、まだ消化しきれていなかった。

「変な樹。」

そう結論づけた涼と樹を見た龍一は、密かに携帯をいじりだした。

「…で、僕が？」

「ああ。」

二時限目が終わって、龍一は、三時限目は半分サユウナラするつもりで、メールの相手である忍と駄弁っていた。

「そんなに深刻なの？」

「ああ、ありや当分冷戦だわ。」

それよりさ、と行って、

「涼の奴、やっぱ昨日おかしかったのかな？」

と聞く。

「…僕にとっては、ムツツリが涼に勝ったのが一番の驚きだよ。」

「へえ、何で？」

「あのムツツリは、涼の前だと変に硬くなつて、本来の実力が出不いから。」

ああ、忍も俺と同じことを思っていた。

更に切り込もうか、と思つた龍一に、忍から思いもしない言葉が発せられる。

「涼…最近おかしい。悠太もそう言っていた。」

「例えばどんなところだよ？」

「見かけはいつもと変わらない。僕も悠太も、どう変かと言われたら、返事に困る。」

「それって。」

「龍一が、『見かけ』として得意としている、直感だよ。」  
さらりと言つてのける。

「珍しいじゃないか。忍が俺に同意するだけじゃなくて、おまけに褒めてくれるなんて。」

「龍一。」

ムツとした表情で、忍が龍一を睨む。

「すぐおどけるの、止めてよね。…僕らは友達なんだから。」

「龍一は悲観しすぎ。確かに龍一が周囲を誘導して、そういうキャラに仕上げているんだろうけど。」

屋上の手すりに体を近づけて、忍がゾツとする微笑を見せる。

「龍一は、自分が思っているより、賢い人間だよ。」

「…」

龍一は、照れくさそうに頭を掻いたまま、黙ってしまった。

「…龍一。」

三時限目の鐘が鳴り、龍一は樹に呼び止められた。  
見かけは変わらない。

が、涼と龍一だけが知っている、樹の本気。

「…ここじゃマズいだろ」  
場所を変えようぜ、と言って、樹を屋上に連れ出す。

「…むくれ面が7割増しだぜ、樹。」

無論、龍一もこんな冗談でこの状況を乗り切れるとは思っていない。

「何故、俺がこんな顔をしているか、分かっているな、龍一。」

「真奈美ちゃんの授業を半分サボタージユしたことかあ？」

「それもある。が。」

このメールは何だ、と言って、樹は携帯の画面を差し出した。

そこには、『涼と早く仲直りしろよ』と書かれている。

『真奈美ちゃんの炉キヨヌーをじっくり拝めなかったのも残念なんだがな…』

龍一は、自分の授業で必ず本文を朗読させてくれる、真奈美の現代文の授業がお気に入りだった。

「…聞いているのか、龍一？」

「…わりい、もう一回。」

「…！」

樹の顔に、明らかに怒気が立ち上る。

「何の意図があつて、こんなメールを送ってきたんだ、と言っている。」

「…どつかのお馬鹿さんに。」

龍一もやり返す。

「起こつちまつたことは、素直に受け入れろつてことだ。」

樹の怒気に、龍一は殺気で応じる。

「テメエが涼にご執心なのは結構なこつた。だがな。」

解き放たれた龍一の野性が、頭をもたげる。

「いつもいつもストーリーカーみたく付きまとわれている涼に、本気を常に出していると要求するのは、あまりにも酷じゃねえか？」

「何だと…！」

「へっ…やるか？ 四時限目の鐘も鳴つたしな！」

言うが刹那。

龍一の右ローキックが樹の左足を直撃する。

樹の長身が揺らぐ。

そこで踏みとどまるのは、樹が空手をやっていたせいだろう。

間合いを取るうとする龍一に、お返しとばかりに左のボディープローを叩き込む。

「…はあ、はあ、はあ…」

「ふーっ、ふーっ…」

樹と龍一は散々殴りあい、蹴りあった。

学生服はおろか、カッターシャツも脱ぎ捨て、屋上で生徒会副会長と生徒会会計が殴り合っている。

「そろそろ…」

「とどめ、行つとくか？」

その時、階段のドアが荒々しく開かれた。

逆光から、一人の学生が飛び出す。

啞然としている龍一の鳩尾を掌底で突き、返す刀で樹の顔面に鮮やかなジャンプ・ハイキックを決める。

情けない体で二人を転がした人物は、

「樹。龍一。」

忘れるはずもない。

如月涼、その人だった。

「何でこんなことになってるの。」

樹たちが本気だったように、涼も本気だった。

樹が懂れた、本気の涼の姿がそこにあった。

「何が原因でこんなことになってるの。」

樹も龍一も、涼を直視できない。

「そう。」

その直後、涼の口から、思いもしない言葉が発せられた。

「やっぱり、僕が原因で、僕が理由なんだね。」

「それより。」

床に情けない姿で転がっている樹に話しかける。

「朝、僕が打ったメールや、伝言、聞いてくれたかな？」

樹は目を逸らす。

朝、余裕がなく、そんなことを確認している暇がなかった。

第一、学校では電源を落としている。

それを告げると、

「地下鉄の駅から学校までの時間、電源を点けてなかった樹が悪い。」

「それに、朝一言言ってくれば、僕に対して言いにくければ、龍

一に言えば済んだ話。」

正論だけに、反論できない。

「龍一には借りができちゃったな。」

「へ？」

「だって、本来僕がやらないといけないことをやらせちゃったから。」

龍一痛かった、と言って、龍一を立たせる。

じろり、と樹の方を見て、言葉を続ける。

「龍一が何を言ったか知らないけど、僕の想いの一部を言ってくれたことは間違いないから。」

ありがとう龍一、と言って、連れ立って涼は保健室へと向かう。

「待て。」

呻くように樹が言ったが。

「自分で立てば。」

冷たく言い捨てた涼の背中に、樹は心底寒気を覚えた。

ガタン。

電車が停まり、涼と龍一は連れ添ってまた、再開発中の街並みを歩く。

電車の中でも、涼と龍一は無言だった。

涼の顔から微笑が消え、龍一の顔から笑顔が消えている。

いつもいる、もう一人のせいだ。

『すまないが、今日は遅くなる。…先に帰ってくれ。』

私用なんて殆ど涼と龍一と済ます人間なのに。

龍一は勿論、涼も不機嫌だった。

いつものように、涼は檸檬、龍一はまたもホットココアを買い、いつものコンビニの裏に座る。

「…龍一。」

「…涼。」

「先、喋れよ。」

「そっちこそ。」

お互いの顔を見やって、二人は深い溜め息をついた。

「樹の自由を制限したいわけじゃないけど。」

「昨日からの樹には、本気で怒ってる。」

「…今回ばかりは俺も同感。」

そういつて、二人は手にした飲み物を、喉の奥に押し込む。

六時を回ると、闇の気配が急速に早くなる。

三人を飲み込まれてしまうように。

「あ、メール。」

涼の携帯から、『勇者皇帝』のテーマソングが流れる。

「ダダダ、ダダダ、ダイテイオー…」

独り言を言いながら、メールを開くと、『河本 真琴』と表示されていた。

「何だろう。生徒会かな…?」

涼の予想は、思いもしなかった形で裏切られた。

『如月先輩にご報告です。…一応、神無月さんにも。』

『私と水無月先輩、付き合うことになりました。』

『それと、喧嘩は早くやめて下さいね。』

「…おい、涼、おい…」

龍一がガンガン小突くまで、呆氣にとられていたらしい。

「あ…うん、ごめん。」

「何なんだよ、一体。」

「龍一には…見せたくない。」

「とてもじゃないけど見せられない。ただでさえ混乱してるのに、こんな事言われて、僕はどうしたら良いか…。」



「オーバーだぜ、涼。」

龍一はひょいと涼の手から携帯を奪い、画面に見入る。

「……」

龍一の顔に、明らかに殺気が表れた。

「……だから、見せたくないといったのに……」

涼は、龍一の手から携帯を取り返ししながら、そう呟いた。

「あんのムツツリ野郎……！」

「龍一、落ち着いて。」

そういった涼も、興奮気味である。

「……ま、うすうす解っていたがな……。」

龍一は急に大人しくなって、そう呟く。

「え……？」

「見れば、真琴ちゃんがあのムツツリにぞっこんラブなのは解っていた。」

「そう……なんだ。」

涼はホツとした。

涼も、真琴が樹に想いを寄せているのが解っていたからだ。

「俺が怒ってるのは。」

「涼と俺をほつぽいといてることだ。」

頬を膨らませながら、龍一が呟く。

その時。

「……僕も混ざっていい？」

涼と龍一は、声のした方を振り向く。

そこには、旅行カバンを持った忍が、スポーツドリンク片手に立っていた。

「よいしょ……っと。」

カバンとともに、涼の隣に座った忍。

「あれ？忍、どうしたの？」

疑問がいつぱいの表情で、忍を見つめながら、涼が訊ねる。

「…そのエロのところへ泊まりに行く予定だったんだけど。」

忍が龍一を怨めしそうに見つめて、

「まだ帰っていないって聞いたから、ブラブラしてたら、発見したから。」

「そう…なんだ…」

そう言った、涼の、紅と翠の眼から、涙が零れ落ちる。

「あれ、どうしたのかな、何でかな…？」

そう言いながらも、涙が止まらない。

「お、おい、涼？」

「ごめん、忍…少し、少しこのままでいさせて…」

そう言った涼は、忍の胸に顔を埋め、声を上げて泣きだした。

「如月…。」

涼の背中を不器用になぞりながら、

「辛い時は、辛いって言いなよ。」

そういって、忍の顔に朱が射す。

「りよ、涼が、そう言ったんじゃないか…」

「龍一は、自分を偽って、型に嵌めてしまっていた。」

「龍一の素顔が、僕は好きだった。」

「龍一は、本当に優しかった。」

「あの時、忍が来てくれて、本当に嬉しかった。」

「忍は。」

「本音を曝け出さないし、辛口だったけど。」

「僕以上に、人付き合いが上手くなかった。」

「でも、僕を抱きしめて泣かせてくれて、本当に嬉しかった。」

『樹に関しては、呆れて声も出ないけど。』  
画面上の涼が、大きな溜め息をこぼす。

『それでも、僕たちは、孤独じゃないんだ。』

『それだけは、強く信じていることができた…』

## 第六話：忍従（後書き）

お読みいただいておりますが、とうとうございました。  
いかがでしたでしょうか。

あえて、途中で切りました。  
ご意見、ご感想お待ちしております。  
これからもよろしく願います。

## 第七話：欠席（前書き）

画面上の涼が語りだす、一つの物語。

それは、悠太の理由、そして、涼の真実へと導かれる…。

## 第七話：欠席

『じつで。』

画面上の涼が、真剣な顔になる。

『一つ、知ってほしいことがあるんだ。』

『悠太には、辛い思いをさせてしまっけど…。』

『それでも、大切なことだから。』

『じめんね、悠太。』

「…如月君、如月君…？」

最近ぼーっとしてることが多いよ、と真奈美が言う。

「ごめんなさい。」

「本当なら、隣の寺島先生にお任せするべき話なのですが。」  
そういつて、涼は苦笑する。

「しょうがないよ。寺島先生だし。」

真奈美も、涼の意図する事を察して苦笑する。

「…それで、霜月君は？」

「当分、施設からの登校になると思います。」

「そう。…しょうがないわね。」

あんなことがあった後じゃ、と言って、真奈美は溜め息をつく。

「問題ついでなんだけど。」

真奈美はいつになく真剣な顔で涼を見つめる。

「水無月君とは、多少は仲直りできたの？」

「多少は。」

そういつて、涼は茶を濁す。

「樹も、きつと分かってくれます。」

「あまり、私を冷や冷やさせないでね。」

「分かってます。」

ふう、と溜息をついた真奈美。

『こうしている分には、普通の高校生なのだけど…』



新任として、如月涼の担任になる前のことを真奈美は思い出していた。

『この子が…ね…』

髪と瞳の色が違うことを除けば、優等生。

成績優秀、スポーツ万能、人望や人気もある。

更に容姿端麗。

なのに。

「先生…石川先生？」

「あ、ごめん。」

考え事をしていたから、と行って、真奈美も茶を濁す。

涼は、先程児童保護施設に送り届けてきた悠太のことが、気がかりでならなかった。

「悠太、今日も休みなんだ。」

忍が、深刻な顔で涼に告げる。

「寺島先生はどうしてるの？」

「あのジジイは役に立たない。」

涼は苦笑するしかない。

忍と悠太の担任、寺島裕輔。

今年で定年。

社会科担当で、歴史を主に教えている。

その授業は分かり難いと評判である。

忍は、そんな寺島のことを嫌いだった。

「それで、忍はどうしたいの？」

「悪いけど。」

一緒に悠太の家まで来てくれないか、と涼に頼む。

「僕だけじゃいけないから、龍一と樹にも来てもらうけど、それで

いいかな？」

「別にいいけど。」

『龍一と樹』という呼び方に、忍は違和感を覚えた。

『樹と龍一』でなければいけないのに。

やはり、涼も引き摺っているのかな…。

忍は、そんな涼の横顔を眺めていた。

「どうしたの？」

「…いや、何でも。」

「それじゃ、生徒会終わってから、いつものファミレスに。」  
「了解。」

そういつて、涼は立ち去る。

『あのムツツリ、どうにかならないかな…』  
忍は涼の背中を見ながら、そう思った。

昼休み。

真琴のクラスには、樹の姿があった。

たまには一緒にご飯を、と言って、樹を招いたのだった。

樹と真琴が付き合っているのは、校内の殆どの人間が知っている。

真琴には、羨望と嫉妬が入り混じった眼差しが向けられていた。

「はい。樹。」

あーんして、と言われて、樹は顔が真っ赤になった。

「…真琴、恥ずかしいのだが…」

「私の料理は嫌？」

「嫌な訳がない。」

だったら、といつて、真琴は樹に『あーん』をさせる。

『これは…何の羞恥だ？』

樹の思考は完全に混乱していた。

周囲の女子生徒が、

『水無月先輩、押しに弱いね…』とか、『完全に尻に敷かれている』

と言いつ出す。

樹は、

『こんなとき龍一だったら…』

と、親友のことを思うが、

『いけない。今は冷戦中だ。』

と、思いつ返す。

涼との一件があつてから、涼や龍一だけでなく、忍や他のクラスメイトとも、何となくだが話し辛くなっていた。

もちろん、表面上の挨拶や雑務などはできるのだが。

前と変わらずに接してくるのは、悠太だけだ。

しかし、その悠太は、最近学校を休んでいる。

「…どうしたの、樹。考え事？」

真琴が樹の顔を覗き込んでくる。

「いや、何でもない。かわ…真琴。」

まだ、『真琴』と言う呼び名に慣れない。

17年の人生で、一人しか付き合つたことがないからか。

龍一みたいに、手当たり次第というわけにもいかないが。

「だつて、眉間に皺寄つてた。」

「これは。」

「言い訳しないの。」

「ごめんね、ラブラブなところ邪魔して。」

クラス内が色めきたつ。

樹の後ろには、申し訳なさそうな顔をした涼が立っていた。

「ここだつて聞いたから。」

涼は影が射した微笑で樹を見つめながら、

「ごめん、ちょっと悠太のことで話があるんだ。」

「…そうか。」

それは深刻だ、と樹は思った。

無断欠席が続いているにも関わらず、寺島は何もしていないらしい。

忍からそう聞かされた樹は、

「何かあるんじゃないのか？ 例えば、病気とか…」

「病気にしたつて何にしたつて、連絡が一切無いのはおかしい。」

忍がそう断じる。

「だな。」

「寺島の奴、悠太の家には行くな、って言ってるらしいぜ。」  
隣のクラスのくせに、よくそこまで知ってるね、と涼が言い、下世話だね、と忍が突き放す。

「とりあえず、今日僕が行ってみるよ。」

涼が言う。

「生徒会のことでは伺いました、と言っし、そうそう邪魔はさせないよ。」

「分かった、涼、無理はするな。」

樹は自然と零れた自分の言葉にはっとする。

龍一は、そんな二人を見ながら、羨ましいと思った。

第七話：欠席（後書き）

お読みいただきありがとうございます。  
いかがでしたでしょうか。

ご意見感想お待ちしております。  
これからも光野ワタルをよろしく願います。

## 第八話：潜入（前書き）

学校に來ない悠太。

その理由を探るため、涼は悠太の家に向かう。

## 第八話：潜入

ピンポーン。

ピンポーン、ピンポーン。

ピンポーン。

ピンポーンピンポーンピンポーンピンポーンピンポーン……

涼は、悠太が住んでいる家のチャイムを、荒々しく鳴らした。

『おかしい……？』

涼は、違和感を感じていた。

この時間なら、悠太の母親はいるはずだが。

「はいはい、今行くからのう。」

玄関に現れたのは、点滴をぶら下げた、悠太の祖母だった。

申し訳ありません、と非礼を詫び、涼は本題に入る。

「私、県立朝日ヶ丘高校で、生徒会会長をしています、如月涼と申します。」

「実は、悠太くんに生徒会のことでお邪魔しました。そういうと、悠太の祖母は。怪訝そうな顔をする。

きつと、自分の髪の色と瞳の色を見て、納得が行っていないのだから。」

「ああ、悠太と仲良うしてくれている子じゃな。」



「おかしいのう。」

そう言つて、悠太の祖母はまた、訝しい顔をする。

「悠太は」

よろめきながら言葉を続ける。

「悠太は毎日学校へ行っているはずじゃが。」

「え……？」

涼は衝撃を受けた。

この老婆が嘘をついているのか？

確かめる術は、涼にとって、一つしかなかった。

「……すみません。」

涼は瞑目する。

刹那、見開かれた涼の目は一瞬だが、確かに両目とも金色の光を帯びていた。

「しかし、涼の奴、毎度の如く遅刻魔だなあ。」

未成年にはダメなアレを懐から取り出しながら、龍一がぼやいた。

「……止めるとは言わないが、学生服では止めてくれ。」

「結局、止めるって言ってんじゃん。」

忍にそう突っ込まれて、樹は苦い顔になっていた。

「…巻き込まれるのは勘弁だ。」

そういつて、樹はドリンクコーナーへ向かう。妙に強調された、アニメのキャラクターを抜けるのに慣れたのは最近のこと。

いつものファミレスに、樹、龍一、忍はいた。

樹が去ったのを見て、

「あーあ。俺も新しい女の子との出会いがほしいな…」

と、龍一がつぶやく。

「馬鹿じゃない。」

「そうそうある訳な…」

そう言いかけて、龍一の指が、自分の後ろを指していることに気づいた。

指の指す方向には、私立のお嬢様高校の制服を着た、栗色のポニーテールの女子高生がいた。

「かわいいよな…」

「だね。」

龍一と忍は、目と目を合わせて頷いた。

と、その時、女子高生が、龍一たちの席に向かってくる。

「ラッキー、俺様、超ツいてる！」

「龍一、抜け駆けはナシね。」

「うつせえ、お、こっち来るぜ。」

その女子高生が、龍一たちの隣まで来て、

「隣、宜しいですか？」

と、淑やかな声で尋ねてくる。

『うわ…ゾクゾクくるぜ。』

最近覚えた、『萌え』というやつか、と龍一は断じた。こんなカワイイ娘だと、色々とやりがいがある…。

『ふーん…世間知らずのお嬢様つてやつ、か。』  
そーゆーのに色々と教えるのも悪くはない。  
無防備にも近寄ってきた君が悪いんだよ…と、忍は微笑んだ。

「…で、松海学園の一年生なんだね。」

「はい。」

「…いつもここにくるの？」

「いえ、今日が初めてです。」

素敵な方たちに出会えて嬉しいですよ、と言って、女子高生が微笑む。  
その微笑に、龍一はもちろん、忍も鼻の下を伸ばしていた。

「やー、嬉しいこと言ってくれるねえ。」

「お、もう一人帰ってきたぜ。」

「…。」

三人分のドリンクを無造作にどかっと置いて、樹はあからさまに不機嫌な顔をする。

「お前達…また、こんなことをして…」

「いいじゃない。…君には素敵な『年下』の彼女がいるんだから。」  
僕たちだつていいじゃない、と忍が言う。

「はじめまして。」

そう微笑んだ彼女に、真琴の微笑を重ねてしまった自分の不覚さを、  
樹は呪った。

「神無月さんのご学友ですか？」

「おいおい聞いたか、樹。」

「『ご学友』なんて、今時使わねえよ、おい。」  
と、その時。

女子高生が下を向いて、クスクスと笑い出した。

「ふふつ。」

その声は、三人にとって、馴染み深い声だった。

カラーコンタクトとウィッグをしまい終わった、松海学園の制服を着た涼がにこにこ微笑んでいる。

樹も龍一も忍も、毒気に当てられた顔をしていた。

やがて、龍一が、

「涼く、オマエ、性格悪いぞ。」

「ごめんごめん、遅れたのはこの格好のせいなんだ。」

たくさん男の人から声をかけられて困ったよ、と平然と言う涼に、三人とも呆れた顔をしていた。

「でも、変装は大成功したから、次は北海学園の制服を着てみようかな。」

にこにここと、涼は微笑んでいる。

「まさか。」

樹が怖い顔になる。

「まさか、その格好で。」

「樹の推測通りだよ。」

おかげで、たくさん情報が集まったよ、と、涼は言っただけ。

「今から集めた情報を、一斉送信するから。」

しばし、沈黙が支配して。

一番最初に口を開いたのは、龍一だった。

「なあ……」

「これって、かなりヤバくねえか？」

「まさか、こんなことになってるなんて……悠太……」

忍があからさまに感情を吐露している。

「……みんな。」

樹が言う。

「本意ではないが、この件からは身を引いたほうがいいと思う。」

三人が樹を見る。

「俺たちだけで解決するのは、無理だ。……直ちに警察に。」

「警察なんて、当てにならないよ。」

忍がムツとしながら言う。

「僕も悠太と同じことをされかけたけど、『証拠がない』というこ

とで、警察は最後の最後まで動かなかった。」

僕が突き出したのは現行犯だけだよ、と付け加える。

「だから、僕は、できることをやりたい。」

「悠太は僕の大切な人だから。」

忍は、熱い眼差しでそう言い切った。

「……俺は中立。」

「おまえらに合わせる。……樹の言い分も忍の言い分も一理あるから

な。」

今すぐにも悠太のところへ向かいたい衝動を抑えながら、龍一は

そう言った。

「じゃ、僕は忍に同意。」

「でも。」

三人を見渡しながら、

「今回の事は、僕に任せてくれる？」

涼が微笑みの消えた顔でそう言った。

「俺は同意。」

「不本意だけど、僕も。」

龍一と忍は首を縦に振った。  
が、しかし。

樹は、頭を横に振った。

「俺は不同意だ。」

第一、涼一人で何ができるんだ、と付け加えて。

「樹。」

ややあつて、涼が口を開く。

「…無理はしない。だから、僕を信じて。」

瞑目して、

「…分かった。俺も同意だ。」

樹も、首を縦に振った。

その頃。

悠太の家では、悠太の祖母が小水を漏らしながら、悪魔を見たよう

な顔で、座り込んでいた。

## 第八話：潜入（後書き）

お読みいただいておりますが、ありがとうございます。

いかがでしたでしょうか。

非常に短いですが、復…おっとと。

ご意見、ご感想お待ちしております。

これからも光野ワタルをよろしくお願いします。



第九話：救出（前書き）

悠太を探して、一人彷徨う涼。

## 第九話：救出

暗い闇が支配する時間に、涼は港の近くにいた。栗色のウィッグに、薄い茶色のカラーコンタクト。誰が見ても、世間知らずのお嬢様にしか見えない姿で。

「確か…」

悠太を乗せた車は、ここにいるはずである。

涼はいる港は、海外との貿易を専門にしている。

倉庫や工場が立ち並び、夜なのにトラックや工事用車両がひっきりなしに行き来している。

「隠れるのにはうってつけ…か。」

オーバーにキョロキョロしながら、コンテナの奥へと向かう。

その時、何者かに物陰に引き込まれ、布を口に宛がわれたまま、涼は気を失った。

薄暗い部屋の中。

涼が目を覚ますと、後ろ手に縛り上げられていた。

「よう、目を覚ましたかい、お嬢ちゃん。」

「何をなさるのですか、ここはどこですか？」

「まあ、日本から離れる、ってとこだ。…上玉の嬢ちゃんだから、高く売れるぜ。」

2000万位か？、と若い男は卑猥な笑みを浮かべる。

「離して、離して！ …お父様、お父様！」

涼が絶望を湛えた声で絶叫する。

「いくら叫んでも無駄だぜ。ここは法律の手の届かない場所だ。」

「『お父様』を呼んでみるか？ ははは！」

男は更に醜悪な笑みを浮かべる。

「嬢ちゃん、安心しな。」

「今、隣の部屋でもう一人、ガキを捕まえている。」

どう考えても小学生にしか見えない餓鬼だが、と付け加え。

「仲良く売り飛ばされてしまえ。」

男は悪意と殺気に満ち溢れた顔で、そう言った。

「ふふふ…」

涼が地声で笑い出す。

「な…」

貴様、男か？と問いたです。

「…おめでたい奴等だよ。君たちは。」

その刹那、涼を縛り付けていた戒めが、空気の中に乾いて消えた。  
「ひ……！」

男の顔に、狼狽と絶望に満ち溢れている。  
そこには、先ほどまで涼を脅迫して楽しんでいた、歪んだ人格の顔はなかった。

転落者の哀れな末路の顔だった。

「……目障り。消えて。」

涼が左手を掲げると、男の姿は、足元から闇に解けていった。

「悠太……待っててね。」

そう言った涼もまた、足元から闇に解けた。

その部屋に残ったのは、涼のウィッグと、カラーコンタクトだけだった。

「ケケ……この餓鬼、よく締まったぜ。」

男にしておくのが勿体無い、と、半裸の若い男が言う。

「そうでしょう。」

自信ありげに答えた中年の男は、悠太とどこか似ていた。

「毎日仕込ませましたから……身体が覚えているんですよ。」

中年の男がにやにや笑う。

「しかし、アンタも悪だね。」

「実の息子を犯すどころか、売り捌くなんて。」

若い男が呟く。

「大したことはしてませんよ。」

そう言つて中年の男は微笑んで、

「『実の息子』だから、誰にも分からない。」

そう言つて、中年の男は、若い男を見やる。

「後は、必要になつた駒を、始末すればいいのですよ。」

微かに金属が磨れる音がする。

間をおいて、下半身裸の男が、胸から血を流して転がった。

部屋の片隅には、中年の女性が同じように胸から血を流して転がっている。

男は、薬物で意識を失っている悠太を引き摺りながら、部屋を出ようとした。

その時。

足首を掴まれた感覚に、足元を見る。

信じられないことに、黒い手が地面から生えて、男の足首を掴んでいた。

男は反射的に銃の引き金を引く。

しかし、手は闇の中へ消えてしまった。

まるで、床に吸い込まれるように。

何だったのか、と思い返したが、気のせいということにして、男は悠太を引き摺る。

違う部屋に悠太を引き摺りこんだ男が、部屋を出た瞬間。

黒い手が、男の両足を掴んでいた。

男が足元を見やった刹那、地面から人影が舞った。  
男の目の前に降りた影は、背中に『紅』の文字を背負っていた。

「何ですか、一体…。」

全身黒装束で固めた男が、無言で悠太の父親に近づいてくる。

悠太の父親は引き金を引くが、弾は男に当たらない。

黒づくめの男が眼前まで近づき、立ち止まる。

「悠太を…返して貰う。」

男は、殺気を込めた声で、悠太の父親に告げた。

「馬鹿馬鹿しい…。」

「それだけの力量があるなら、私とともに…。」

悠太の父親がそう告げた瞬間。

男が視界から消えた。

「貴様の下衆な仕事に付き合う道理は無い。」

「俺の…質問に答えるんだな。」

男の両目が金色に輝き、眩い光を放つ。

「輝石眼…発動しろ。」

「貴様の本名は？」

「ひ…！」

「…まだ、精神は抵抗するか。」

男の両目の輝きが、金から銀に変わる。

「答える。」

「本名は？」

何かに取り付かれたような顔をしながら、悠太の父親は、男の質問に答えだした。

「…竹本…孝也…」

「売り飛ばしたのは悠太で何人目だ？」

「…6人目…です…。」

「売り先は？」

「アメリカ…ロツク…」

覆面の下の男の顔が、憎悪の色を帯びる。

「いつから悠太を犯した？」

「…小学生…2年…」

「幾ら儲けた？」

「…13億…2000万…」

「名前を何回変えた？」

「…7回…多重生活を…」

「悠太の担任には幾ら渡した？」

「…700万…です…」

「その二人以外に、何人殺した？」

「…9人…」

「そうか。」

男は、悠太の父親に当て身を放つ。

ぐったりとした悠太の父親を、汚らしいものでも見るような眼で見下ろしていると、

「閣下、ご苦労様です。」

男の背後から、声がある。

「残念な報告があります。」

「その少年の祖母は、先ほど自殺しました。」

「…そうか。」

連れて行け、と声のしたほうに指示をした。

死体と悠太の父親が立ち去って。  
おもむろに男は覆面を取った。

そこには、銀色の瞳をした、如月涼の姿がそこにあった。

「悠太、悠太……。」

「悠太。」

裸の悠太が眼を覚ますと、そこには如月涼の顔があった。  
赤と翠の瞳に涙を浮かべながら。

「……如月……君……。」

「ゆーた！」

涼と悠太は、抱きしめあいながら、声をあげて泣き出した。  
嗚咽が一段落して。



悠太と涼は、隣り合って座った。

「悠太、僕は、何から話したら良いかわからない…。」  
裸の悠太を見つめながら、そう言う。

「でも、悠太が生きていてくれて、本当によかった。」

「如月君…」

大人の顔で、悠太が呟く。

「僕、いっぱい、大人に汚された。」

「それでも…」

「こんな僕でも。」

悠太の顔が翳る。

涼は、泣きながら微笑み、

「良いんだよ。」

悠太の顔を見つめながら、そう言った。

「悠太は悠太だから。どんな事されてても、悠太だから。」

「大切な、友達だから…。」

「樹、ごめん。夜遅く。」

「仕方がない。…そんな事になっていたとは…。」  
樹が深い溜息をつく。

僕だけじゃいけないから、という理由で、涼は樹を呼び出したのだ  
った。

やがて、服を着た悠太が、児童保護施設の職員に付き添われて出て  
くる。

「龍一と忍には？」

「無論連絡済みだ。…二人とも、すぐ来るそうだ。」

「そう…あ、来た来た。」

息を切らして、龍一と忍が走り寄ってくる。

「悠太！」

叫びながら忍は、一直線に悠太のところに駆け寄り、悠太を抱きし  
めた。

「悠太のバカ…僕は…」

忍は言葉を続けようとしたが、こみ上げてくる涙に、言葉が打ち消  
された。

「涼！」

龍一の右ストレートが、涼の右頬を直撃する。

「テメエ、なんでも一人で背負い込むなよ…」

龍一の目に、大粒の涙が浮かぶ。

「…お前のせいで、目が汗かいたじゃねえかよ…」

「龍一。」

ありがとう、と言いながら、龍一の胸に、涼は顔を埋めた。

「如月君、水無月君、神無月君、皐月君！」

私服姿で駆けてくるのは、学年主任でもある真奈美だった。

「ごめんね、警察へ寄っていたから。」

真奈美は、悠太に、父親が逮捕されたこと、祖母が自殺したことを簡単に説明した。

「ごめんなさい…。」

「みんな、ありがとう。」

悠太がいつも通り頭を下げる姿は、可愛さなど一片も無く、ただ空しかった。

「…悠太…」

画面上の涼と悠太を、交互に見比べながら、忍は呟く。

「僕は…何もできなかった。」

「そんなこと無い。」

忍きゅんは、いつも一緒にいてくれた、と悠太は微笑む。  
その微笑みは、生前の涼の微笑みによく似ていた。

「これが…悠太のこの真実。」

「でも、僕は言い出せなかった。」

「自分が死んでから言い出すなんて、卑怯だと思っ」

「それでも。」

「それでも、僕は知ってほしかった…」

『 本当の僕の事を…… 』

## 第九話：救出（後書き）

お読みいただいております。ありがとうございます。  
いかがでしたでしょうか。

ご意見、ご感想、お待ちしております。  
これからも光野ワタルをよろしくお願いします。

第十話：旅情（前書き）

涼が語り終えた悠太の真実。

そのことをきっかけに、樹はあることを思い出す…。

## 第十話：旅情

画面上の涼が語る、悠太の真実に、樹の胸に、ある疑念が沸き起こっていた。

『もしかして、他にも何か隠していたことがあるのではないか。』  
樹が思い当たるのは、修学旅行のことだった。

「…それで、お前は今年も不参加か。」  
「うん。…ごめんね、樹。」

仕方ない、と言って樹は諦めた顔をする。

折角の修学旅行なのに、本人曰く、『授業扱いの大切な用事』のた



めに必ず欠席するのだ。  
5日間だけだというのに。

悠太の一件があつてから、涼と樹は、以前のようにともに過ごして  
いた。

そして。

「そろそろ来ると思うよ。」

涼が見やった方角から、これまた本人曰く、『バツチリキめている』  
龍一が現れる。

「よ！ 涼、ムツツリ、おはようさん！」

元気よく二人の肩を叩いて、

「さ、今日も楽しい学校だぜ！」

「痛いよ龍一。」

「涼、そんな元気のないこと言つてんなよ。」

「…お前が元気すぎるだけだろうが。」

三人は連れ立って、ぎゅうぎゅう詰め of 電車に乗り込んだ。

「あふ…おはよ。」

「いつきくん、きさらぎくん、龍ちゃん、おはよー！」

いつものように、地下鉄で忍と悠太と合流する。

寝起きが悪い忍は、低血圧なのか、朝はいつも異常に機嫌が悪い。

そんな忍に対して、悠太は朝から元気いっぱいだ。

いつものように、樹を目ざとく見つけて、『とてとて』と走り、鳩  
尾に飛び込む。

そんな悠太を見ながら、忍は、

「毎日毎日、よく飽きないよね…ってゆうか、何であのムツツリが

いいのかな…」

親友の無邪気な笑顔を見ながら、そう思った。

「おはようございます。」

「おはようございます。」

朝陽ヶ丘高校の校門の前で、生徒会役員と執行役員が立って、朝の挨拶運動をしている。

生徒会関係者である涼たち5人は、他の役員や委員に混ざって、挨拶運動をしていた。

左側の門には忍、悠太、龍一。

右側の門には涼、樹、樹の横になるように真琴がいる。

『何も無ければいいのだが…』

樹の願望は、あっさりと裏切られた。

「おはよう…遅刻しちゃった。」

真っ黒なスーツに身を固めたのは、真奈美。

「おはようございます、石川先生。」

「おはよ！ 真奈美たん！」

「…どこで覚えたの、その言葉…。」

忍が、龍一の方を見やって、深く溜め息をつく。

「お姉さん先生おはよう〜」

忍の不機嫌さとは対照的に、悠太はぴよんぴよん跳ねている。

「…相変わらずだな、色々な意味で…。」

「相変わらずね、樹。」

真琴がふふ、と微笑む。

「…あんなことがあったというのに、誰もいつもと同じ顔をしている。」

「良いことなのだろうが。」

「…俺が割りきれれていないだけかな。」

樹の端正な顔に、苦笑を浮かぶ。

「樹。…言いたくないけど。」

真琴が樹の方を見ながら言う。

「ちよつと…じゃなくて、相当老け込んでるよ。」

樹の表情が凍った。

自覚はしていた。

しかし、彼女に指摘されるといっのは…。

「…き、樹。」

「樹。」

自分を呼ぶ声に、樹は我に帰る。

「何ポーンとしてるの、樹。」

樹の眼前に、『ぶんぶん』顔をした涼がいる。

「朝の活動に集中してないのは、悪いことだよね。」

につこり微笑ながら、涼が呟く。

「龍一と一緒に、後で反省文提出してね。」

「…。」

「そうそう。」

樹の耳元に顔を近付けながら

「河本には、言い繕っておいたから。」

そう言い残して、職員室に用事があるからと、涼は樹を置きざりにして校舎の方へ歩きだす。

我に返った樹は、しょんぼりしながら歩く龍一の背中を目指して走り出した。

コンコン。

「失礼します。」

どうぞ、という声に、涼は部屋に入る。

涼が尋ねた会議室には、真奈美が沈痛な面持ちで座っていた。まるで気にしていない風を装い、涼は真奈美の正面に座る。

「それで、昨日の件ですが。」

涼はいきなり本題を切り出す。

「…寺島先生は、このままよ。」

あからさまに不機嫌な口調で、真奈美が言い捨てる。

「証拠もないし。」

そんなことが外部に漏れたら大変なことになる。

幸い、この件を知っているのは、涼と真奈美だけである。

「如月君、分かっていると思うけど。」

「分かっています。口外はしません。」

悠太が傷つくから、と言い添えて。

「それでは、失礼します。」

ホームルームが始まってしまつから、と言って、涼は会議室を後にしようとする。

と、その時、涼の体が揺らめいた。

「如月君？」

真奈美が涼のそばに駆け寄る。

「大丈夫です。ただの立ち眩みです。」

心配かけてすみません、と言い、涼は会議室から去る。

真奈美は、今朝方の出来事を思い返し、気が重くなった。

「はい、みんなおはよう。」

教室に真奈美の声が響く。

「今日のホームルームは、修学旅行の班割りです。」

その後を引き継いで、涼が喋る。

「みんな、今年も僕はみんなと一緒に行けないから、修学旅行のことは樹と。」

龍一のほうをちらっと見て。

「やや頼りないけど、龍一に任せます。」

「石川先生と、二人の言うことに従って、楽しい修学旅行を過ごしてきてください。」

委員長の涼に指名された二人が、挨拶する。

「涼ほど完璧にできないけど、精一杯努力します。」

「みんな、特に女子！俺の萌え滾る熱い……」

「ごすっ。」

涼の鉄拳が、龍一の鳩尾に綺麗に滑り込む。

「委員長！、暴力反対！」

龍一が息も絶え絶えに言うと、クラス中から、

「龍、オマエが悪い。」

「龍、お約束だな。」

「龍ちゃんセクハラ〜。」

「龍ちゃんのKY〜。」

次々と発せられる言葉に、龍一は、

「みんな、俺の繊細でピュアなガラスのハートを、どうして理解っ

てくれないんだ！」

ばきっ。

今度は樹の鉄拳が、これまた綺麗に龍一の鳩尾に綺麗に滑り込む。

「…毎度毎度、懲りない奴だ…。」

真琴に言われた『老け顔』で、樹は深く溜め息をついた。

「…それで、樹と龍一は違う班なんだ。」

ふーん、という顔で、忍は購買で買い込んだできた食事に手をつける。忍と悠太を交えて、三人は昼ご飯を食べていた。

五人の仲の良さは、校内では有名である。

クラスが違っても、五人はほぼいつも一緒にいるから、誰も違和感を感じない。

「ホント、涼がいねえと締まらねえんだ、これが。」

龍一が手当たり次第に食物をやっつけながら、そう呟く。

「…仕方が無いだろう。」

マイペースで胃に優しい食べ方をしている樹が、食事の手を休めて言う。

「涼が修学旅行に来ないのは、小学校のときからだ。」

「そもそも、遠足ですら一緒に来たことがあるか怪しい。」

「…んだな。」

溜め息を吐いた龍一も、樹に同意する。

「…僕は自分のクラスと。」

「悠太のことがあるから何もできないけど、メール相談なら受け付けてるよ。」

忍が珍しく笑う。

その笑顔に下心を認めた樹と龍一は、

『忍、無論、友人として無償で相談に乗ってくれるんだよね？』  
声を揃えて同じ台詞をぶつける。

忍は悪魔も籠絡する笑顔で、

「もちろん、友人としての最低限の保障で。」

『…』

樹と龍一は、問題の当事者二人を見ながら、また白髪が増えそうな溜め息をついた。

気難しい顔をした三人をよそに、涼と悠太は、そこだけお花畑が咲いたような、ほんわかとした空気を醸し出している。

「はい、りょうきゅん、あーん。」

「あーん。」

悠太の手作りの、たこさんウィナーが、涼の口に入れられる。

「じゃ、僕もお返し。」

「ゆーた、あーん。」

「あぁーん。」

大きく開かれた悠太の口に、涼お手製のオムレツが入れられる。

もぐもぐもぐ。

もぐもぐもぐ。

「おいしいー！」

涼が満面の笑顔で、悠太の料理を褒める。

「りょうきゅんのもおいしいよ〜」

悠太の顔も、ぽかぽか笑顔である。

涼と悠太は、すりすりしながら、『あーん』を繰り返している。

「能天気っつーか、何だかなあ…」

呆れた顔で、龍一が呟いた時。

『3年A組、如月涼君、至急職員室まで来てください。』

「呼び出されたから、僕、先に行くね。」

樹後片付けよろしく、と言って、涼は席を後にする。

立ち去っていく涼を見ながら、忍は一言。

「樹って、涼の家政夫だよな。」

樹は何も言い返すことができなかった。

修学旅行当日。

A組とB組は、同じバスで東京へと向かう。

「…」

朝に弱い忍は、不機嫌そうな顔で、悠太と一緒に集合場所にいた。

悠太は、忍の家から出発である。

悠太の家族はもういなく、親戚も遠方に住んでいるため、悠太は施設からの一時帰宅の場所に、忍の家を選んだのだった。

「しのぶきゅん、僕たちが一番乗りだよ〜。」

「…そうみたいだね…」

悠太のエネルギーに気圧され気味の忍は、朝なのにもう疲労感を覚えていた。



「…ねえ、悠太。」

「なに、しのぶきゅん。」

「何でそんなに朝早起きで元気な訳？」

悠太の顔から、微笑が消えた。

微笑みの消えた悠太の顔を見た忍は、一気に目が覚めた気持ちになった。

「朝になると。」

「朝になると、僕は逃げ出せる。汚い大人の手から逃げ出せる。」

「夜の闇に紛れて、僕を汚すものから、逃げられるから。」

嬉しくて。

寂しそうにそう言った悠太に、忍は掛ける言葉を知らなかった。

「…おかしいわね…」

怪訝そうな顔で、真奈美が呟く。

「一番早く来てそうな子が、まだ来ていないなんて…」

そう言つて、真奈美は樹のほうを見やる。

「申し訳ありません、先生。」

「神無月から朝連絡がありまして、今日は先に行つてほしいのとこのでしたので…」

申し訳ありません、と、樹は真奈美に詫びる。

「水無月君のせいじゃないよ。」

と、その時、後方の生徒たちがざわめきだす。

「みんなー、静かにし…」

「…！」

ざわめきの方角を見やった真奈美と樹は絶句する。

そこには、銀色に染め上がった髪の龍一の姿があった。

「いやーわりいわりい。」

巨大なスーツケースに、何故持つてきているのか分からないギターを携えて、龍一が堂々と現れた。

「神無月龍一、ただいま参上であります！」

人気アニメのポーズで、元氣よくビシツと決めた龍一。

毒気にあてられた顔で、真奈美が龍一を凝視している。

樹は半ば無意識的に龍一の髪を携帯に収め、送信した。

『No Way We goes Love So Long a  
go...』

洋楽のラブソングが鳴り響く。

『さすが水無月君、センスいいよねー。』

『年下の女には勿体無いよね...。』

『だよねー。奪おうかなー。』

そんな声が囁かれていることにも気づかずに、樹は電話に出る。

『もしもし。』

『メールみたけど...あれ、何?』

電話の向こう側の相手の声が殺気立っていることは、予想できた。

『とりあえず、龍一に替わって。』

樹は、無言で、自分の携帯電話を差し出す。

龍一を、嫌な予感と、想像できる展開が支配する。

こわごわ樹から携帯を受け取った龍一が、先ほどの元氣さからは想像できない声で、もしもし、と呟く。

『...ああああああああああああああああああああああああああああああ...』

携帯電話から聞こえてきた涼の声は、周囲に聞こえるほど大きかった。

「いやー、しかし、東京のメイド喫茶ってのは、あれか。」  
いろいろすげーな、と同じ班の人間にそう言う。

「龍、オマエの髪型とギターの方がよっぽどすげーよ。」

「如月マジギレだったじゃねえか。」

「過去最高更新じゃね？」

「うっせーな…朝のことを思い出すと、俺のピュアで繊細なハートが大暴落だぜ…」

結局、一緒に来ることは許されたものの、涼の即決と真奈美の承認による、過酷な処罰を思い返して、龍一は苦い顔になった。

「やー、アキバ堪能したぜ。メイドさんにコスプレってすげーな！」

「  
次は渋谷行こーぜ、と、龍一たちは山手線の方へと歩き出す。

そんな龍一たちの横を、黒塗りのリムジンが数台、通り過ぎた。  
が、間抜けにも、最後尾のリムジンが、信号に引っかかってしまっ  
たらしい。

龍一は何気なくそのリムジンの中を覗こうとした。

リムジンのガラスは、濃いスモークが張られていて、中はよく見えなかったが。

龍一は息を呑んだ。

「龍一早く行こうぜー。」

「あ、ああ、俺の熱い魂をぶつけてやつぜー！」

そういつて、龍一は先頭を切って歩き出す。

しかし、龍一の顔に、疑問の表情が浮かんだ。

『まさか…な…。』

龍一は、自分の疑念を封印して、自分の髪を凝視する人混みの中へ消えていった。

樹、悠太、忍の班は、大勢で浅草に来ていた。

地下鉄を上がり、古い商店街を抜けると、雷門が見えてくる。

仲見世に立ち寄り、主に悠太の食欲を満たしながら、そろそろと修学旅行の学生の集団は歩いていった。

「みんな、これから、花やしきにいこうか、台場へ行こうか決めたと思うのだが。」

樹が穏やかな笑顔で、恋人つなぎをしてくる悠太を宥めながら言う。

「花やしきー！」

「台場ー！」

「ここはアキバ…」

様々な意見が飛び交う。

「悠太、忍、お前たちはどちらがいいんだ？」

「ボクはいつききゅんが一緒ならどこでも」

悠太が顔を赤らめながら即答する。

「僕は…お台場。」

忍はそう言う。

「今日、『SNAK』の撮影会があるらしいから。」

そう付け加える。

「決まりだな。」

SNAKという単語が決め手になったらしい。

樹たちは、水上バスの方へと歩き出した。

樹たちが水上バスの乗り場に着いたとき、外国人と思われる一団が、ぞろぞろと降りてきた。

悠太が顔を輝かせながら呟く。

「赤、青、黄色、銀、金…」

絵の具みたい、と悠太はにこにこしながら呟く。

外国人の一団と、樹たちが擦れ違う。

樹は、青い髪の外国人と思われる人間と擦れ違ったとき、はっとその方向を振り向いた。

「すまない、俺は少し調子が悪いようだ。」

樹は無意識に呟く。

我に返り、忍のほうをちらっと見やる。

忍も樹の意図を了解したようだ。

「…じゃ、そのへタレはおいといて、僕たちだけで先にお台場へ

行こう。」

忍がサラッと行って、樹の変わりに引率を受け持つ。

忍が一瞬目くばせをする。

忍が一瞬目くばせをする。

樹は、忍に感謝しつつ、悠太を振り切りながら外国人の一団の後を追った。

「思ったとおりだ…。」

仲見世へ行くと見せかけて、巧妙に路地をすり抜けながら、一団は幾つかの班に分かれながら去っていく。

樹は他の班には目もくれず、青い髪の男の後を追っていた。自分の目間違いが無ければ。

正装をしていた。

サングラスをかけていた。

髪型も違った。

でも。

あの男は、如月涼に間違いない。

「見失った…か…?」

細い袋小路を抜け、樹は完全に男の影を見失った。諦めてその場を立ち去ろうとした時。

樹の目に、青い髪の男が、車に乗り込もうとしているのが目に入った。

駆けた。

無我夢中で駆けた。

時間にしたら10秒の距離が、樹にとっては縮まることもないような距離に感じた。

間一髪。

車は荒々しく男を乗せ、走り去ってしまった。

「涼……」

樹は荒い息を整えながら、呟いた。

刹那。

今まで感じたこともない気配とともに、樹の背中に、金属の感触が押し当てられた。

「中々の身のこなし、高い知性：貴様、何者だ。」

背後から響く男の声は、穏やかだったが、樹にとっては寒気しか感じなかった。

「…あなたには関係のないことだ。」

樹は続ける。

「あの青い髪の男は、俺の友人だ。」

「14年共に過ごした、掛け替えのない友人だ。」

「あの男のためなら俺は死ぬる……。」

そこまで一息に言い切って、ゆっくりと後ろを振り返る。

そこには、初夏に近いのにロングコートを着た、樹より背が高い男の姿がそこにあつた。

「…そういうことか。」

男は全てを察したようだった。

「おい。」

男が合図を出すと、黒塗りの高級車が颯爽と現れた。

「彼を、彼の目的の場所まで案内しろ。」

男は意外なことを言った。  
更に。

「彼は一般の国民だ。そして。」

男は運転手に何やら囁いた。

「どうか、お乗り下さい。」

男は丁寧な口調だったが、有無を言わせぬ絶対さが感じられた。

樹を乗せた車が立ち去って暫し。

男の部下と思われる人物が近づいてきた。

男は頭を振り、

「彼は、『あのお方』の、私的友人であり、ご学友だ。」

「手など下してみろ…あのお方の怒りが爆発することは目に見えて  
いる。」

そういつて、彼方を見つめながら。

「閣下…貴方はよい方を友人に持たれた…」

そう、呟いた。



『... 4510150...』

『僕の部下が迷惑をかけて、申し訳ないと思っている。画面上の涼の視線が、自分にだけ向けられているようで、樹は複雑な思いがした。』

第十話：旅情（後書き）

お読み頂いてありがとうございます。

今まで一番長いです。

長さがこれで良いのか不安です。

ご意見ご感想をお待ちしています。

第十一話・発露（前書き）

校則違反の龍一に下された、罰とは…？

## 第十一話：発露

「ところでよ。」

龍一がパソコンを一時停止にしながら言う。

「どうせゲロるんだから、あの話をしないか？」

樹も同じことを考えていたらしく、即座に龍一に同意する。

「ま…アレだ。」

「涼と俺達の違いを知った話さ…。」

朝陽ヶ丘高校の中庭が騒がしい。

多くの生徒が、校内の有名人、如月涼と神無月龍一に注目していた。

「龍一、覚悟はいい？」

バリカン片手に、いつも以上の微笑みを浮かべる涼。

恨めしそうに涼を見つめる龍一。

「…オマエ、絶対え楽しんでるだろ。」

そういう龍一の髪の色は銀色。

髪型はナチュラルな無造作ヘア。

修学旅行が終わった次の週。職員会議と生徒会で、今日の処分が決まった。

提案者は如月涼である。

退学や役員辞任など物騒な話も持ち上がったが。

涼の交渉と説得で今日の処分が決まったのである。

友人として、龍一の性格を知り抜いているからこそ。

最も効果的な罰を与えられる。

涼は会議でそう主張してきた。

「…別れは十分に惜しんだよね。」

手に持ったバリカンを掲げる涼。

「じゃ、僕の分から。」

そう言って、前髪にバリカンを走らせる。

そう。

抽選で選ばれた五人と涼が、龍一の断髪式を行うという処分だ。

じよりじよりじより。

バリカンが走るたびに、龍一の頭から銀色が舞い上がる。

「次はボクの番。」

「…僕は『残念ながら外れた』けど、悠太と一緒に刈るって、て。」  
忍は悠太の手を導きながら、龍一に哀れみの視線を投げる。

じょりじょりじょり。

がりっ。

龍一の左前の髪が、ざっくりと抉られる。

「…お前ら…日頃の恨みをこぞとばかりに晴らすのか…？」

龍一が、無惨な髪型に変わっていく自分自身を慰めるように毒を吐く。

「こんな形であなたに仕返しができるなんて…」

真琴がにっこりと、黒い笑顔で微笑む。

「如月先輩。」

「思うように、やって宜しいですよね？」

半分恫喝を含んだ口調で、涼に確認する。

「いいよ。河本の好きなようにして。」

微笑を絶やさなまま涼は許可を出す。

じょりじょじょ…

ガリ！ ガリガ…

じょり。

樹は自分の彼女が自分の親友をいのように髑っているのを、複雑な気持ちで見ている。

『自業自得なのだが。』

じょりガリじょり…  
ガツ！…じょりガツ！…じょりじょり…

樹が無意識のうちに滑らしたバリカンは、芸術的な軌跡を描いて、龍一の頭を旋回した。

「はい。鏡。」

龍一の頭を写真に収めた涼が、龍一に鏡を差し出す。

「…思いつき校則違反じゃねえか、この髪型…」  
違う意味でビジュアル系になった龍一の髪型は、暫く坑内の語り草になった。

がたん。

涼、樹、龍一は、混雑する電車に乗り込んだ。

龍一は、涼が持ってきたニットの帽子を被っている。



髪型が、あまりに他人の目を引いたからである。

電車はやがて、郊外へ向けて走り出す。

車内は、帰宅ラッシュの時間帯で混雑している。

「しかし、テロとの戦いとはいえ、戦争をしている国に派遣を継続、か。」

樹が溜息混じりに呟く。

「樹のお父さん、今回の延長でまた総指揮官なの？」

「ああ。…親父から定期的に連絡は来るが。」

昨日の今日じゃ、と言って、樹は暗い顔になる。

国が、国際協力の一環として派遣している災害救助隊が、現地の反政府組織に襲撃されたというニュースは、樹にとって人事ではなかった。

樹の父親は、災害救助隊の副司令官だからである。

旧世紀には、『自衛隊』と名乗っていたこの災害救助隊は、憲法の大幅な改正により違憲という判断が下され、完全に戦争行為を放棄しているはずだった。

「…まさか、この国にもテロリストとかいねえよなあ？」

眠そうな顔で、龍一が呟く。

「ありえない話をするな。」

「この国の警察機構は、先進国の中でも優れているじゃないか。」  
樹は不安を押しつぶすようにそう言った。

「でも…」

涼がそっぴいかけた時。

ガタン。

電車が大きく揺れた。

「急ブレーキかよ!？」

龍一が毒づく。

やがて、車内アナウンスが流れる。

『ご乗車の皆様に、お知らせします。』

『この先、鉄橋が爆破されていますので、最寄の駅に停車します。』

『駅係員の指示に…』

ガシャーン。

パン、パン、パン、パン、パン。

運転手のアナウンスが、途中で破壊音と銃声に掻き消された。

「涼、樹、これって…もしかして…」

龍一が眠気も吹き飛んだ顔で叫ぶ。

「もしかして、じゃない。」

「明らかに、これは少なくとも凶悪犯罪だ。」

樹が、青ざめた顔で、そう叫んだとき。

片言の言葉で、犯人と思われる人物がアナウンスを始めた。

「コノ国、我等ノ神ヲ汚ス国ニチカラ、カシタ。」

「報復デ、オマエタチミナ、ワレノ命トトモニ生贄ニスル。」

「多クノ仲間ノ、痛ミト苦シミ、アジワウガイイ！」

絶叫とともにアナウンスが切れ、電車はゆっくりとだが、爆破された鉄橋へと向かって走り出す。

車内に悲鳴と絶望が蔓延する。

「…終わったか。」

愛しい真琴のことを思い浮かべながら、樹は諦めたような口調で呟いた。

「お前！ 諦めるの早すぎ！」

「俺は生き残ってやる。どんなことでも、お前らとともに生き残ってやる……」

龍一が絶叫する。

「方法はあるのか？」

「ねえから、考えようぜ。死んでしまっ前に……」  
そうたる涼、と言いながら、龍一は涼に同意を求める。

涼は瞑目したまま、龍一の叫びに答えなかった。

やがて、無言で荷物を床に置き、学生服を脱いで、上半身裸になった。

「おいおいおい……」

龍一が呆れた顔で呟く。

「お前、状況……」

「わかつてる。」

涼が目を開いて、小さく、でもはっきりと言った。  
しかし、その次の台詞に、樹も龍一も耳を疑った。

「僕が、この電車を止める」

「二人は、僕の荷物と一緒に、安全なところへ避難してくれ。」  
「必ず、生きて帰る。絶対に、生きて帰る。」

涼は真剣にそう言った。

「こんな時に冗談は止め、涼。」

樹が言う。

「ムツツリの言う通りだ。」

龍一が言う。

その時。

樹と龍一は、涼の変化に気づいた。

涼の瞳の色が、明らかに違う。

紅と翠の瞳の色が、金色の光を帯びていた。

「涼…オマエ…」

龍一が啞然としながら呟く。

「ごめん…樹、龍一。」

「後でいっぱい怒っていいから、君たちを僕に守らせて。そっ言いで残して、涼は最前列の車両目指して駆け出す。」

樹も龍一も、何も言えないまま立ち尽くしていた。

夢中で駆ける。

見えた。

運転席だ。

涼は、人間離れした跳躍で乗客を飛び越えると、着地しながら運転席のドアを手刀で切り裂いた。

運転席にいた外国人の男が、涼に気づいて発砲する。

しかし、銃弾は、涼の体に当たる前に総て蒸発してしまった。男を気絶させた後、涼は非常停止装置を作動させようとする。しかし、システムがカットされているらしく、作動しない。

涼は、決意を胸に、運転席の横のドアを開けた。

普通の人間なら、風圧だけで命が絶えそうなか。

涼は意を決して、外へ飛び降りた。

少なくとも、車内の人間にはそう見えた。

樹と龍一が、先頭車両にたどり着いたのは、正にその瞬間だった。その直後。

前方を、一瞬眩い光が包む。

光が収まった後。

樹と龍一が光のしたほうを見ると。

背中から羽根が生え、光に包まれた涼の姿がそこにあった。

啞然としている樹と龍一。  
そんな二人をよそに、涼の体が、再び眩い光を放つ。

『ねえ…寒くない？』  
『寒いよね…』

そんな会話が車内から聞こえてきたとき、樹と龍一だけが、涼の意図を理解した。

「涼の奴、電車凍らせる気だ。」  
龍一が断じる。

龍一の言葉を裏付けるように、電車の端が凍結してくるのが、樹にも見えた。

「涼、やめろ、無茶をするな！」  
樹が運転席に駆け寄った、その瞬間。  
今までより遥かに眩い光が、車内を包んだ。

「…」  
「…」  
樹と龍一は、目を恐る恐る開ける。  
電車は、停まった。

いや、正確に言うと、凍りついたのだ。

樹は我に返り、電車を凍らせた張本人を探す。

しかし、背中から羽根が生えた如月涼の姿は、どこにも見当たらなかった。

黒いコートを着た男の前に、白と黒の羽根を生やした青年が舞い降りてくる。

いや、落ちてくるといふべきか。

男は慌てず、青年が落ちてくるだろう場所に移動した。

青年の背中から、羽根が溶けるようにして消える。

銀色の髪が、蒼に変わったその瞬間。

急速に落下した青年は、男の腕の中に抱き留められた。

「閣下……」

男が、青年を呼ぶ。

「……」

青年は、どうやら気を失っている。

男は、躊躇したが。

右手を掲げると、数人の男女が、男のそばに駆け寄る。

「…来てくれたんだ。」

「ああいう事件の場所に居合わせないのに、たいした役職者だね。」  
青年が目を開けて発した第一声に、周囲の空気が緊迫する。

男は、手を上げて周囲を制しながら、呟く。

「閣下。息災で何よりです。」

「…樹を脅迫しておいて、よくそんな台詞が吐けるね、君は。」  
不機嫌を隠さずに、青年が呟く。

男は苦笑しながら、

「国家の機密でしたので…。」  
と続ける。

青年は、大きな溜息をつきながら、瞳を開ける。  
夕闇に映える紅に、涙雲がかかっていた。

「レール。」

青年が男の名を呼ぶ。

「僕は戻るから、適当に情報进行操作しておいてくれ。」  
直接事情を説明しないといけない人間がいるから、といって、涼は立ち去ろうとする。

遠ざかってゆく涼の背中を見たレールは、

「シヨウ閣下。」

思わずそう呼んでしまった。

涼は不機嫌そうに振り返りながら、

「…捨てた名前で、呼ばないでくれる？」



左手を掲げた瞬間、軽い爆発音がレールの眼前で炸裂した。

「…事故処理、任せたから。」  
そう言い捨てて去る涼に、誰も何も言えなかった。

樹と龍一は、無言でバスの車内に乗り込んだ。

いや、自分たち二人『だけが』、一般人とは違う、二人だけのバスに強引に乗せられたのだ。

見慣れない夜の景色。

見慣れない光景。

そして、見慣れない親友の姿。

涼に何があったのか。

何を背負って涼は生きているのか。

樹も龍一も、涼に伝える言葉を知らなかった。

サービスエリアと思われる場所で、バスのブレーキが荒々しく踏まれる。

「ここ、地元じゃねえよな、どー考えたって。」

龍一が疲労を隠さずに言う。

「地元一步手前、というところだが。」

樹も極度の疲労に襲われていた。

しかし。

バスのドアが開いた。

たんたん、と軽い足取りで、誰かがバスに乗り込んでくる。

「樹、龍一、ただいま。」

「約束、守ったから、ちゃんと、帰ってきたから……。」

そう言っつて、涼は樹と龍一の方に駆け寄ろうとした。

しかし。

突然、涼の体が、崩れ落ちた。

樹も龍一も、無言でコンビニの駐車場に腰を下ろしていた。

あの後、樹にとって、見覚えのある男が、涼を連れて去ってしまったからだ。

樹は、手にした柚子茶を持て余しながら、何も言えない。

龍一も、ホットココアをすすりながら、同じく無言である。

「…龍一。」

「…樹。」

同時に口を開いた二人。

互いの顔を見やって、深く溜息をつく。

「あんな秘密があるとは…」

樹が混乱した思考を龍一にぶつける。

「俺もビックリだっつーの。」

樹の感情を強く拒否しながら、龍一も同意する。

「あの黒コートの話だと、2、3日は絶対安静だそうだが…」

「俺は、今日のことをどうして割り切ればいいのか分からん。」

樹が混乱を極めた思考で呟く。

「…俺っちも、わかんねー。」

「分かるのは、涼は俺たちと住む世界が違う人間だってことだ。」

冷酷に龍一が斬り捨てる。

「…だが。」

樹は、なおも食い下がろうとする。

「ま、いずれ全て分かるだろうよ。」

龍一は無理やり生ぬるのホットココアを胃に流し込む。

「…おつかねえ黒コートに何かされそうだから、この話題はしばらく封印しようぜ。」

呆れるほど切り替えが早い龍一の思考を、樹は少しでいいから分けて欲しかった。

「…そうだな。」

言葉では同意していても、樹の心情は複雑なままだ。  
だが。

『このことは、ご友人として、何卒内密に願います。』  
必死そうに黒コートが言った言葉の裏の闇が、涼と自分たちを分けているようだった。



第十一話：発露（後書き）

お読み頂いてありがとうございます。

いかがでしょうか。

物語もそろそろ大きな山場を迎えます。

五人は一体どうなるのでしょうか？

これからも、光野ワタルをよろしくお願いします。

## 第十二話：暗転（前書き）

涼に秘められた秘密が明らかになったとき。  
全てが、動き出す…。

## 第十二話：暗転

涼が目を覚ますと、左腕にチューブが生えていた。

それが点滴であると認識するまで、少し時間がかかった。

「お気づきなられましたか。」

涼の視界に、あまり見たくない顔が入る。

こんな状態じゃなければぶっ飛ばしているのに。

涼は、心の中で深くため息をついた。

バスの中で卒倒した涼は、樹と龍一の通報で、近くの公立病院に搬送された。

しかし、直ぐにまた、ヘリコプターで国立の病院に搬送され、特別室に入院することになったのだ。

涼の目覚めを確認して、レールが話しかけてくる。

「丸一日、お眠りになっておられました。」

「お加減は如何でしょうか。」

レールがそう尋ねても、涼は不機嫌な顔をしたまま沈黙を貫いた。

やがて、食事が運ばれてくる。

牛乳、ヨーグルト、赤味噌の味噌汁、サラダ。

無言で食物を口にし、立ち上がって、歯を磨きに行くこととする。

そういえば。

「…ねえ。」

嫌そうな顔で、レールに尋ねる。

「どこ…どこの？」

しかし、今度はレールが黙って答えなかった。

涼は重い溜め息を零し、点滴を引き摺って、洗面台の方へ向かおう

とした。

ばたり。

レールが自分の下に駆け寄ってくる足音だけが、涼の耳に微かに聞こえた。

『生きて……』  
『私……の……分も……生きて……』

『嫌だ……何で君が……』



『逝かなければいけないのは、血塗られた僕のほつなのに…』

『…逝かないで…!!』

涼が布団から身体を起こす。

寝具は大量の汗で濡れている。

「…」

涼は、暫く、病院の上にあるだろう空を眺めていた。

朝陽か夕陽か知れないが、光が涼の身体を茜色に染め上げた。

「みんな、おはよう。」

「はよー。」

樹と龍一が、連れ立って教室に入る。

「おはよう、水無月君、龍ちゃん。」

「おっす、水無月、龍！」

如月涼が病欠してから二日目。

樹も龍一も、敢えて涼の話題には触れなかった。

何かが、壊れそうな気がして。

龍一が、最近人気のお笑い「ひがしたによどこ」のモノマネをしている。

クラス内は龍一の寒いギャグと、セクハラ発言のせいで、殆どいつも通りだ。

『何か足りないのは、事実なのだが…』

樹が物思いに耽っていると、始業の鐘が鳴り響いた。

真奈美が教室に入ってくる。

真奈美の表情も、何時もと変わらない。

「朝のHRを始めます。水無月君。」

真奈美が樹のほうを見やる。

「はい。」

本来、ホームルームの司会は、涼の役目だが、涼がいない今は、樹が代行している。

樹が教壇に立とうとしたその瞬間。

がらがら。

教室のドアが開き、姿を見せたのは。

如月涼、その人だった。

「遅刻しちゃった。」

「後で、反省文書いておくね。」

いつもの微笑み。

いつもの声。

クラス内がどよめく。

「みんな、静かにして。」

涼が、いつもの口調で喋りだす。

「今回は、突然倒れてしまって、迷惑をかけて申し訳ないと思っています。」

「ちゃんと元気になって戻ってきたので。」

樹、悪いけど交代ね、と言って、涼は教壇に登る。

「はい。」

「今日の朝のHRを始めます。」

石川先生お願いします、と言って、真奈美に話題を振る。

「石川先生？」

涼が真奈美の顔を覗き込む。

「え、はい。」

真奈美が、いつにもなく狼狽しているのを見た龍一は、

「そんなややドジっ娘属性な真奈美たん萌え〜」

と、最近話題のドラマ『海男』の真似をする。

ごすっ。

いつものように、涼と樹の鉄拳が、龍一の体に吸い込まれるのを見ながら、真奈美は朝自宅を訪ねてきた男のことを心底恨んだ。

『しばらく入院だって聞いていたのに…』

役人の言うことは当てにならない、と思いついて、真奈美は生徒た

ちの前で喋りはじめた。

「如月先輩、お加減は如何ですか？」

ほうじ茶を淹れながら、真琴が心配そうな表情で涼を見つめる。

「大丈夫だよ。」

そう言つて、涼はいつものように微笑む。

「河本、僕がない間、何か変わったことはあつた？」

「いえ、特に何もありませんでした。」

本当は些細なことがあつたのだが、病み上がりの涼に心配をかけまいと、真琴は涼に負けないようににっこりと微笑んだ。

「それで……」

涼の顔が暗い影を帯びる。

「…やっぱり、今年も着なきやダメなのかな…」  
諦めを含んだ口調で、涼が呟く。

「はい。」

悪魔のような笑顔で、手にした資料を片手に真琴は微笑む。

真琴から資料を渡された涼。

「…去年より、増えてない？」

「僕だけじゃなくて、悠太、忍、…樹に龍一までか…」

涼は軽い眩暈がした。

「如月先輩は、どのような服も着こなすと、大変人気ですよ？」

「…わかったよ。」

涼は諦めた顔で、

「ただし、期日だけはちゃんと守ってよ。」

「はい。…一部の生徒には、堪らない日ですから。」

この可愛い後輩の後ろに、意地悪の神様がっているのを感じて、涼はまた気が遠くなった。

「みんな、揃ったね。」

涼は、副会長席の樹を見やる。

「これより、生徒会会議、及び、学祭実行委員会を開会します。」

「生徒会長より、開会にあたっての挨拶です。」

樹が涼を見やる。

「みんな、忙しいのありがとう。」

「僕たち三年生にとっては最後の、一年生にとっては初めての、二年生にとっては二回目の学祭です。」

「今年も、よりよい学校祭を目指して、みんなの力を僕に貸してく

ださい。以上です。」  
涼がいつもの台詞で、挨拶をする。

「それでは。」

樹は今度は龍一を見やる。

「会計から報告。」

「今年度の…」

学術の1日目が終わわり。

文化の2日目。

朝陽ヶ丘高校の講堂は、学校伝統の服飾展示会が行われていた。

『一年生、…冬椰君』

場内アナウンスが、生徒の名前を呼び上げていく。

『二年生、河本真琴さん』

真琴は、中セルネッサンス期を思わせる服装で、ステージに上がる。  
…男物の服で。

『続きまして、朝陽ヶ丘高校が誇る、5人の変わり衣装』

一年生は何のことか分からない顔をしているが。  
上級生は既に何が行われるかわかった顔で、特に一部の生徒が異常な盛り上がりを見せ始める。

『トップバッター、3年A組、神無月龍一先輩w』

紫色の髪をした、龍一がステージに上がる。

唇には、遠目から分かる鮮やかなピンクのルージュ。

本人の好みと、要望と容貌で選ばれた、バストシャツに、脇が見えるシャツ。

所々破れたパンツに、巻きつけられたラメ入りのベルト。

『黙っていれば』格好いい龍一が、セクシーな姿で歩き回った後。

『続いては、同じく3年A組、水無月樹先輩。』

龍一で盛り上がったボルテージを沈めるかのような。

会場からはため息しか聞こえてこない。

髪型は漆黒のポニーテール。

腰まである髪は、全てエクステである。

恥ずかしさで俯いた樹の顔に、男女ともに『萌えて』いるようだ。

長身で、腰の細さを活かした、樹の服には、薄いピンクのフリルがふんだんに散りばめられている。

ぎこちない笑顔で、樹が一礼した後。

『続いては、3年B組。皇月忍先輩!』

忍が投げやり気味に登場したとき、会場内が色めきたつ。

頭にはリボンつきのカチューシャ。

純白のアンダーシャツに、首もとの大きな赤いリボン。

胸から下は、淡い水色のエプロンをかけて。

右手には丸い盆を下げて。

そんな忍は、もうどうにでもなれという気持ちで、

『おかえりなさいませ、ご主人様。お嬢様。』  
恭しく頭を下げて一礼する。

この日のために恥を忍んで練習してきたのだ。  
完璧なメイド姿に会場内が『ピンクの』空気に包まれる。

『更に、3年B組、ゆうたくん!』

はあゝい、と飛び出した悠太の姿に、男子は息を呑み、女子は騒ぎ出す。

右の頭には黄色いリボン。

赤いランドセルを背負って、ホットパンツが見えそうなスカートで、くるくる回りだす。

どう見ても、高校生には見えない。

現役の小中学生で十分通用する。

悠太がひとしきりステージで『遊び終わった』後。

『最後になりました。』

『我らが朝陽ヶ丘高校生徒会長!』

『3年A組。如月涼先輩です!』

ちなみに彼女はいないから、みんな今年が最後のチャンスだよというアナウンスが流れ。

会場内が暗くなる。

スポットライトの中、姿を現した涼は。

純白のヴェール。

頭には花冠。

白いドレスに負けない、涼の色の白さに、会場内から溜息がこぼれる。



ステージの中央に立った、ウェディングドレス姿の涼に、誰もが未来を予想した。

一年生側に向かって、手にしたブーケを放り投げ。

涼は、ドレスの両裾をつかんで、恭しく一礼した。

どくん。

『嫌だ!』

『逝かないで、逝かないで!』

頭を上げた涼の目から、急速に力が消える。

『逝かないで! ……な……』

『…い…な……』

涼の口元が微かに『れ・い・な』と形を作ったとき。

どきっ。

全ての人間の前で、涼の姿は暗転した。

第十二話：暗転（後書き）

お読みいただいております。  
いかがでしょうか。

物語が大きく進みました。

これからの五人、よろしく願います。

第十三話・転変（前編）（前書き）

倒れた涼。

涼がない日常が、始まる。

### 第十三話：転変（前編）

県立朝日ヶ丘高校の校門に、救急車が到着した。

樹と龍一によって、普段着に戻った如月涼が、担架に乗せられて運ばれていく。

「水無月君、神無月君。」

樹と龍一が振り返ると、担任でもあり、学年主任でもある石川真奈美が、険しい顔をしている。

「二人とも、早く支度して。」

学校の車で病院まで行くから、と言って、真奈美は駆け出す。

真奈美の頭に、以前黒コートの男から言われた言葉が甦る。

『あのお方に、何かあったら、唯では済みせんよ？』

こんな時に、と思いながらも、真奈美は男の言葉に囚われていた。

龍一が、無言でパソコンの画面を再び再生させる。

『』

何か、画面上の涼が、言ったようだった。

『僕が倒れたとき。』

『あの時は、みんな、僕が難病だとは思っていなかった。』

『でも。』

『僕は薄々気付いていた。』

『僕の命の光は、闇に吞まれそうだということ…』

最後に辿り着いた国立病院に、漸く涼は入院することになった。

市立病院、県立病院、私立病院……。  
何故か、全ての病院に、如月涼の受け入れを拒まれたからだ。

涼は、左腕から点滴、口には酸素吸入のマスクがつけられている。  
学園祭で、華やかなウエディングドレスを纏った、華麗な姿の面影は、どこにもなかった。

変わり果てた涼の姿を見ながら、龍一は一人ごちた。

『俺：どうしたらいいんだろう……。』

神無月家は、病気とは無縁の一家。

龍一は、病院には、彼が大好きだった曾祖父が大往生する間に二、三度行っただけである。

祖父も祖母も。

離れて暮らしている両親も、妹も、健康そのもの。

それなのに。

血の繋がりにより濃い、如月涼の異変に、思考が混乱して、碌に役に立たなかった。

龍一が呆然としていたその頃。

樹は、如月家の質素な門扉を潜っていた。

如月家の生活状態は、決して芳しくない。

父親を早くに亡くした涼は、経済の面で相当苦労していた。

進路を決める際も、名門私立学校への推薦を辞退して、学費が安い公立校を選んだ位である。

ピンポン。

樹が、ドアのチャイムを鳴らすと、荒々しい声が聞こえてきた。

少しして、明らかに不機嫌な顔をした、中年の女性が、玄関先に現れた。

「わざわざ来なくても良いのに。」

樹を見て、放った第一声が、樹の感に障った。

しかし、急を要する事態である。

真奈美からは、既に必要な連絡は行き届いていた筈だった。

「ご存知の通り、如月君が、意識不明の重態です。」

「担任の石川先生から……」

樹が言いかけたとき、女性の金切り声が、樹の頭に鳴り響いた。

「倒れたなんて、あの水商売向けの女の狂言でしょ。」

樹は、耳を疑った。

自分の息子、それも一人息子が生死の境を彷徨っているというのに。

樹は、怒りを通り越して、呆れた。

「あんな餓鬼、どうにかなってしまえばいい。」

「私一人だったら余裕で食べていけるのに、あんな厄介な……」

そうまくし立てる涼の母親に、樹は純粹な嫌悪感を抱いた。

「陽子おばさん。」

樹が努めて、努めて平静を装いつつ、話しかける。

「ともかく、保険と書類のことがありますので、お忙しいとは思いますが、病院までご足労願いますか。」

しかし、樹の態度が涼の母親、陽子の勘に触ったらしい。

『ぶざけたこと抜かすんじゃないわよ！』



樹は、陽子の呪詛に、耳を塞いだ。  
こんな親の下で、涼はよく生きている。

樹は、『早く家から出たい』とぼやく涼のことだけが気がかりだった。

『水無月君：水無月君。』

声の主が真奈美だと認識するまで、少しかった。

「すみません。」

「みんな、朝のHRを始める。」

そう言つて、樹は涼の事を説明する。

「如月は、まだ意識が戻っていない。」

「当分の間は、俺が涼の代理として様々な活動をする。」  
「みんなよろしく、と頭を下げる。」

真奈美が後を続ける。

「そういうことだから。」

龍一を見て。

「かなり不安だけど、神無月君、君も水無月君を支えてあげてね。」

「了解！」

龍一が元気よく了承する。

「真奈美ちゃんが俺の嫁になってくれたら……」

「ごすっ。」

樹は、毎日こんな情景が続くのかと思うと、少し気が重くなった。

「……そういうことで、自分が生徒会長代理ということになった。」

何時も涼が座る、生徒会長の席に座った樹がそう告げる。

涼不在の生徒会の体制は、樹を会長代行に、真琴が副会長、龍一が書記、そして一年の梢冬椰が新しく会計に座った。

忍を会計に据えるという案も出たのだが、受験生ということもあり、忍は辞退したのだった。

「いつ……水無月先輩。」

真琴が樹のほうを見やり。

「如月先輩は、相当重態なのですか？」

先輩の功績以前に、生徒会としてお見舞いしたらどうですか、と助言する。

樹は真琴を優しく見つめながら、

「りよ…如月は、まだ意識が戻っていない。」

「自分と神無月が、交代で様子を見ることにしたいと思う。」  
見舞いは如月の意識が戻ってからだと、嘆息しながら告げる。

と、末席に座っていた一年の梢が、無言で挙手をした。

「どうした、冬椰。」

龍一が筆を走らせながら問う。

「僕も…如月先輩の様子を見に行きます。」

水無月先輩も神無月先輩も受験生なのだから、と理由を述べる。

「わかった。」

樹が承認する。

「涼のことは神無月と梢。」

「生徒会のことはま…河本を中心に。」

最終的な判断は自分がするから、気負わずにやって欲しいと付け加える。

「これで、臨時生徒会を終える。」

「みんな、急なことで申し訳なく思う。」

一礼して、生徒会室から人の気配がいなくなった後。

樹は、夕闇に消えゆく紅い夕陽のような瞳をした、涼のことに暫し  
思いを馳せた。

「…またあなたたち？」

不機嫌な陽子の声に、龍一はムツとする。

「あのくたばりかけなら、まだ寝たまま。」

「あのまま心臓が止まってしまえばいいのに。」

私は来月まで来ないから、と言い捨てて、陽子は樹と龍一を置いて帰ってしまった。

「…テメエが逝けよ…」

龍一がぼそつと呟く。

樹も、無言で龍一に同意する。

如月涼は、最上階の特別個室で、まだ眠ったままだった。

昨日面会した梢からは、『まだ意識が戻っていません』というメールがきている。

樹と龍一は、そつと涼の側に腰を下ろす。

涼の綺麗な寝顔を見ながら、龍一がぼそつと、

「このまま起きないんじゃないだろうな…」

そつ、呟く。

「莫迦を言うな」

「過労か何かか…起きない事はない。」

半分は、自分に言い聞かせるように、樹が嗜めたときがちゃん。

病室のドアが開けられ、一人の男が入ってきた。樹にとつても、龍一にとつても、見覚えがある顔。黒コートの男だった。

「先だつては自己紹介もせず、申し訳ありませんでした。」男が柔和な表情で、寒気がするほど暖かい声で挨拶をする。

「私、内閣参謀室総室長の如月瑞樹と申します。」

「お二方のことは、閣下より伺っております。」

「ちよつと待ってください。」

樹が、瑞樹の言葉を遮る。

「如月…ということは。」

「はい。」

「私は、閣下の遠縁のものです。」

樹も龍一も、何も言えなかった。

瑞樹と涼は、全く似ていない。

顔の形も、髪の色も、瞳の色も。

「…あんだ、胡散臭えよ。」

龍一が不機嫌を隠さずに言う。

「ごもつともです。」

瑞樹が、龍一の疑念をあつさり肯定する。

「ですが。」

瑞樹が言葉を続けようとした時。

眩い光が、部屋を包んだ。

三人が目を開けると。

一瞬、漆黒のロングヘアの女性の姿が、確かに見えた。

やがて、光が収まる。

光が収まると、そこには、意識を取り戻したらしい涼が、悲しそうな瞳をして立っていた。

第十三話：転変（前編）（後書き）

お読みいただきありがとうございます。ごさいました、

いかがでしたでしょうか。

涼くんの本当が、語られるかもしれません。

ご意見ご感想、お待ちしております。

第十三話：転変（後編）（前書き）

目覚めた涼が、語りだしたのは。



### 第十三話：転変（後編）

「樹、龍一、…それに瑞樹さん。」

悲しい顔をした涼の瞳は、普通の黒色だった。

「僕は…ほぼ完全に能力を失ってしまった。」

「樹と龍一は覚えているだろ？」

「…忘れるはずもない。」

樹が沈痛な面持ちで言う。

「…あんま、考えないようにしてたのが、正直な話だな。」

龍一も、真剣な表情で同意する。

二人の表情を確認した涼は、瑞樹の方を見やり、

「もう、話してもいいでしょ。」

「…樹と龍一は、僕の姿を見たのだから。」

口調はいつもと同じ穏やかな口調だった。

しかし、涼の口調から強い決意を読み取った瑞樹は、

「…やむを得ません。」

嘆息しながら、同意せざるを得なかった。

「もう、分かっていると思うけど、僕は俗に言う『超能力者』だ。」  
「瑞樹さんは、僕が未だ国家の一員として活動していた時の部下なんだ。」

「そして。」

強い瞳で三人を見つめながら。

「僕は、あの人の実の息子じゃない。」

「実の両親は、既に暗殺されている。」

「本来の『如月涼』は、産まれたときに既に息絶えていた。」

「何百万分かの確率で、同じ姓だったあの人に託されただけだった。」

「故意に取り違えられて、今日まで生きてきたんだ。」

涼は一息に言い切った。

瑞樹は、総て分かっているのだろう。

表情には、一分の変化も無い。

しかし、樹と龍一は、あまりのことに何も言えなかった。

超能力者であることは、電車の一件で解っていた。

しかし、血の繋がりまで秘密があったとは。

どれくらいの時間が流れただろう。

樹が、口を開く。

「涼…。」

涼の話を理解できないような顔で、呟く。

「…お前は、何をして生きてきたんだ？」

「何故、そうしなければならなかったんだ。」

「俺には」

理解できない、という単語を口元で飲み込んで、涼を見つめる。

「僕の任務は、国家機密の収集と管理、それに付随する…。」

次の一言に、また樹と龍一は耳を疑う。

「…暗殺が任務だった。」

「…悠太のこと、覚えてるよね。」

涼が言う。

「全て終わった今考えると。」

「悠太も、僕と同じことをされていたから。」

瑞樹の方をちらり、と見て。

「だから、友達になれた。」

悠太と同じこととは。

言うまでもない。

強姦。

それも、同姓による。

いや、男めかけというべきか。

「…そろそろ、本題に行こうか。」

にこやかに告げる涼。

今までの話で十分衝撃を受けていた樹と龍一。

彼らを見た瑞樹。

一人と二人を隔てる溝の深遠を、瑞樹は感じていた。

『その責任の一端は、私にあるのだから…』

涼の全てを、二人の『一般国民』である青年たちが、受け止めてくれることを瑞樹は心から祈った。

「人間には、色々役割がある。」

「革命を起こすのが役目の人がいれば、普通に生きることが役割の人もいる。」

「僕の役割は。」

そう言って、三人から目を背けて、涼は夕暮れの朱に身を染める。

「この世界のための、生贄。」

「それが、僕の役割。」

「そして、その役割は果たされて。」

「僕もまた、実の親のように暗殺されるはずだった。」

振り返り三人の見つめる涼の瞳が、薄い銀色に染まっている。

「…麗奈、出てきて。」

涼のつぶやきに呼応するように、涼の背中から、黒く、長い髪的女性の姿が現れる。

しかし、瑞樹の姿を認めた瞬間、その女性は、空に融けてしまった。

「彼女に、僕は救われて生きてきた。」

「僕は。」

「本当は、生きているはずじゃない人間なんだ。」

そこまで言い切ったとき。

それまで、珍しく黙っていた人物が口を開く。

「…おいおい、と書いてえとこだけど。」

龍一が疲れきった顔で、涼を見つめながら言う。

「悠太の一件を知った後、オマエが『普通』の学生じゃねえことは分かってた。」

「だから、俺は。」

龍一が涼に歩み寄る。

次の瞬間、涼の華奢な体が宙を舞った。

「そんな大事なこと…黙ってやがって、この野郎！」

龍一が、涼の身体を引き起こしながら、泣きながら、続ける。

「ばっきゃろ」

か細い声で、龍一が囁く。

無言で涼を抱きしめた龍一は、人目を憚ることなく泣き続けた。

「僕は。」

「僕は、あの時。」



「僕は、自分が守れなかった命に、命を救われた。」

第十三話：転変（後編）（後書き）

お読みいただきありがとうございます。  
いかがでしたでしょうか。

涼くんの秘密が、語られました。

五人はこれからどうなってしまうのでしょうか。

ご意見、ご感想お待ちしております。

## 第十四話：誘惑

閉じられたドアの向こうで、樹、龍一、瑞樹が、難しい顔をしている。

一人残された、涼。

涼は、龍一が瑞樹と喧嘩しないか。

それだけが気がかりだった。

襲ってくる疲労感に預けきるように、ベッドに身体を横たえると、懐かしい声が、涼の耳に聞こえてくる。

いや。

その声は、涼にしか聞こえないものだった。

『涼。』

聞き違えるはずもない。

自分がこの世界で、初めて愛した人の声。

彼女が悲しそうな顔をしていそうで、涼は複雑な面持ちになる。

『…良かったの？』

問う声に。

「後悔はしてないよ。」

気づかずに淋しそうな顔をして、涼は答えた。

『…無理して。』

首にかかる感触がある。

形亡き者の、命の鼓動。

生の亡者より暖かい、温もり。

世界が、彼女を中心に回っていたとき。

あどろきに比べたら、と付け加えようとした己を、涼は呪った。

「朝のHRを始める。」

樹が瞑目したまま、教壇に立つ。

如月涼が入院して、一週間。

樹がホームルームを務めて、一週間目。

「昨日、如月の意識が戻った。」

樹はクラスの皆に言う。

瑞樹のことを思い出して、樹は胸が悪くなった。

が。

かけがえのない友のことである。

「ま、しばらく無理できないから、よろしくだつてさ。」

努めて軽く振舞う龍一。

龍一もまた、樹と同じように、瑞樹、そして涼に対する疑念が立ち上っていた。

そんな二人の心を知ってか知らずか。

担任の石川真奈美が、二人の後を取る。

「そういうことだから、みんな、如月君のお見舞いに行つてあげてね。」

「俺がぶつ倒れたら、真奈美さんのそのきよ……」

ばきっ。

樹のストレートが、綺麗な軌跡を描いて、龍一の鳩尾に突き刺さる。  
と。

「…忘れるところだった。」  
ばきっ。

更にもう一度、樹のストレートが、龍一に吸い込まれる。

「ちょ！」

龍一が抗議の声を上げる。

「二発は大杉。」

むくれ顔の龍一を見て。

「二発目は、委員長の分だ。」

樹は何時か言われた『老け顔』で、ため息をこぼした。

「そっか…」

彼には珍しく、心情が顔に現われていた。

樹と龍一を交えながら、忍は悠太とともに昼食を啄ばむ。

「涼、元気そうだった？」

忍が龍一に訊く。

「ああ。」

「その小生意気なツラ、もっと小突いてやれっさ。」

言いながら、龍一は忍の頭をぐりぐりと撫でまわす。

「痛いよ。」

口ではそう言いながらも、忍も心底嫌というわけではない。

樹は、涼がいない日常も、たまには悪くない。

そう、思っていた。

「いつきくん、あーん。」

悠太が物思いにふけっている樹に、食事を勧めてくる。

涼がない。

自分の『ちょっと自信がある』料理を、美味しそうに食べてくれる涼が、悠太は好きだった。

しかし、涼は、いない。

何気ない時間が、微かだが、ほんの微かだが。

音を立てずに、壊れ始めていた。

終末へ、向かって。

こんこん。

「どうぞ。」

樹がドアを開けると、涼はベッドから起きていた。

「みんな、いつもありがとう。」

樹と龍一は一日おきに。

忍と悠太も体が空けば訪れている、涼の病室。

「…やっと、外泊許可を貰ったよ。」

涼の微笑みは柔らかい。

龍一は、涼の微笑みに『癒し』を感じるようになっていた。

「それで、テストを受けるのか。」

溜め息を吐きながら、樹が諦めたような顔で言う。

「うん。…受験生だし。」

梢に頼んでいたであろうプリントの山を見ながら、樹は軽く眩暈がした。

(…俺も、負けてはられない…)

不謹慎だと思いつつ、樹は『涼を超える』ことができそうな誘惑に、しばし身を任せた。



そんな樹の思惑を知ってか知らずか。

「忍も悠太も、ありがとう。」

腰に『すりすり』してくる悠太の頭を撫でながら、涼は。

「みんな、僕のことば聞いている？」

寂しそうな。

悲しそうな。

決意と憂いを帯びた顔で、その場にいる人間に尋ねる。

「…僕は、涼が何者でも。」

真っ先に口を開いたのは忍だった。

「…僕にとっては、大切な人間だから。」

相当照れた顔で、語尾の最後は聞き取れないくらい小さな声ではっきりとそう言い切った。

「俺は。」

樹が、一步前に進み出て。

「お前という人間が高みにあればあるほど、越え甲斐がある。」  
それが幼い日の約束だから、と、樹は締めくくる。

「僕は。」

悠太が真剣な口調になる。

「如月君のこと、好きだから。樹くんの大切な人だから。」

僕は如月君の味方、と悠太が話を締める。

「…あー…」

乗り遅れた、という顔で、龍一が四人を見る。

「…正直、涼をぶん殴ってやりたい気持ちはあるし。」

「はつきり言って、理解できねえことのほうが多い。」

「龍一…！」

樹が割って入ろうとするのを、涼が無言で制する。

「んが、俺様は、涼の悪友だからな。」

とん、と涼を小突きながら。

「早く治して、お前の口から語れや。」

四人の話を聞いた涼は、安心した顔をした。

「ありがとう…」

流れてくる涙を、涼は止めようとは思わなかった。  
いや。

思えなかった。

#### 第十四話：誘惑（後書き）

お読みいただいておりますがとうございました。  
いかがでしたでしょうか。

ご意見、ご感想お待ちしております。

第十五話：虚飾（前書き）

夏休み。

樹たちは、涼の実家に呼び出される。

## 第十五話：虚飾

全てを吐き出したような涼の顔を思い出し、龍一はやり場のない気持ちに苛まれた。

同じ時を生きているのに。

全て、一人で抱えて生きているような涼のことが、龍一は許せなかった。

がたん。

地下鉄のドアが開き、四人はラッシュアワーの人ごみの中を、すり抜けるようにして進む。

暗い闇が待っている、地上へと向かって。

地上に出てから、誰ともなく、歩き出す。

如月涼がいない、朝陽ヶ丘高校へと。

「：お前、よくこんな抜け道を知っていたな…」

樹が呆れ顔で龍一を責める。

「ホントに。」

忍が同意する。

「ナンパより、こっちのほうが才能あるんじゃないの？」

忍の指が、鍵型に曲げられて龍一の眼前に突き出される。

「へへーん。」

龍一は、二人の厭味など気にしない風で、自慢げに胸を張る。

「この抜け道を『作る』のは苦労したぜえ。」

完璧超人の眼を欺くのは容易じゃないぜ、と付け加えて。

一方、悠太は一人、『深夜の探検』に、心を躍らせていた。

「うわあ〜すご〜い。龍ちゃん天さ…。」

ずりっ。

足を滑らせて転げ落ちそうになった悠太を、樹が抱きとめる。

「悠太。足元には気をつけるんだ。」

「うん…あ・な・たゝにやは。」

「…頼むから…。」

樹が後を継げようとしたとき。

「…やめてよね。」

忍がムツとした顔で、二人を見つめている。

「…ムツツリさ、悠太に対して過剰に反応するの、止めたら?。」

冷たく樹に対して言い放つ。

樹が次の句を発する前に、忍は今度は悠太に向かって、

「…悠太も、あんまりキョロキョロしないで。危ないから。」

最後にじろりと龍一を見ながら。

「…尤も、一番責められるべきなのは、こんな危険な抜け道を作った張本人なんだけどね。」

先急ぐよ、と言って、忍は歩き出す。

ずりつ。

「ふー、あぶねーあぶねー…」  
間一髪。

龍一は、忍を抱きとめた。

…が。

樹と悠太の目が点になっている。

「え…もしもし？ …もしもし？」

龍一が問いかけても、二人は反応しない。

「…ねえ。」

沈黙を破るように、不機嫌な声が。

「助けてくれたのはいいけどさ。」

暗闇に相応しい、低い声。

「この体位、かっこうどうにかならない？」

「へ？」

きよとんとする龍一。

呆れたように樹が告げる。

「…龍一、お前、忍をどうしているか分かっているのか？」

「どうしてって…？」

「お姫様。」

「へ？」

「…僕を『お姫様抱っこ』して、どうするつもり？」

龍一はようやくやく気づいた。

自分が、忍を両腕で抱き上げていることに。

「龍ちゃん、忍きゅんを狙ってるの?」

悠太が蔑むような視線で、龍一を見つめる。

「悠太、だから何で…」

龍一が反論しようとしたそのとき。

ずりっ。

ずりっ。

ずりずりっ。

「う、うわ?」

「…駄目だ、せめて受身を取らないと…」

「にゃ? にゃ、にゃあ〜!?!」

「…馬鹿ばっか…」

どわっ。

四人が着地したのは、プールの真裏だった。物音に気づいて、人が駆け寄ってくる。



「…。」

真奈美表情が険を帯びている。

幼い顔立ちに不釣り合いに浮かんだ眉間の皺が、ぴくぴくしているのが、遠目からでもよく分かる。

「…あなたたち。」

長く、永久に続くかのように思われた沈黙から。

解き放たれた真奈美の声は、深く、黒い闇を帯びていた。

「神無月君についてはもう諦めてるから。」

さらりと教師にあるまじき台詞を言っただけのけたあと。

「…如月君に、報告しておくね。」

真奈美がそう告げた瞬間、四人の顔が凍りつく。

「や、いやあゝま、真奈美ちゃん、俺たち、ほんの可愛い出来心で

…」

「…とりあえず、作った張本人と、管理人の責任ということで、僕

は

「みやあゝ…いやあゝ。お説教とれぼうと嫌だよっ…」

「お黙り。」

威厳のある一言に、三人は口をつぐむ。

真奈美は無言で携帯を取り出し。

ブルルルルルルル...

『はい、如月です。』

「あ、如月君。寝ているところごめんね。ちょっと...」

『...ちよつと、当事者にならなかつただけですか？』  
真奈美が無言で携帯電話を差し出す。

龍一が恐る恐る『も、もしもし』といいかけた刹那。

『...』

涼の声は、何時になく殺気と怒気を帯びていた。

.....

夏休み。

お盆間近。

県庁に近いこの街は、誰もいなくなる。

公務員が夏季休暇に入ると。

そこには、灯火のように、蜻蛉のようにして、命を永らえてきた。生き物たちが、野生に還る時間。

ひっそりと佇む人口建造物。

通いなれた高校ですら、違和感を感じる。

樹は、詩情は龍一の役割だと、現実に戻る。

「で、ムツツリ。」

「…ムツツリと言っな」

「樹きゅん、やっと反応した〜」

「…」

もう一人。

現実に還れないでいるのだろうか。

真っ先に叫びそうな龍一が、沈黙を保っていた。

「龍一。」

「ん…あ、ああ…どした？」

「いや…邪魔をしたなら悪い。」

「や…。覚悟はできてるさ。」

「覚悟？」

「…これ、覚悟だろ。」

「…何故だ。」

「知りたくないものを知らされるんだから。」

『みんなを僕の「本当の」実家に招待するよ。』

テストが終わった後。

病院に帰る直前。

涼に呼び出された四人は、唐突にそう告げられた。

『悪いけど、お盆までの3、4日、空けといてくれないかな？』

見たこともない。

寂しげな微笑で。

涼は何かを、伝えたがっているようだった。

黒塗りの。

最高級のリムジンが、四人を迎えに来る。

「お迎えにあがりました。」

中から現れたのは、瑞樹だった。

「...まあーた、胡散臭いオツサンと一緒にかよ。」  
龍一がぼそつと毒づく。

瑞樹は苦笑するしかなかった。

見かけよりは相当若いつもりだが。

リアルofティーンエイジャーには負ける。

「ご足労いただき、誠にありがとうございます。」  
瑞樹はもつともらしく頭を下げる。

四人を乗せたリムジンは、富士の裾野へと消えていった。

- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -

ゆつくりと、リムジンが進む。  
あたりを見渡せば、木、木、また、木。

単調な風景。

黄泉の国に魂を引かれた者たちがたどり着く、一つの場所。

さっと、両脇のカーテンが開く。

「ここ到着です。」

何故緊張しているかは分からなかったが。

瑞樹の顔から、先程までの余裕が消えていた。

口調も心なしか、固い。

四人がいそいそと車を降りると。

映画のセットか、何かの特集番組か。

白亜の『宮殿』が、そこに広がっていた。

四人があまりの事に呆然としていると。

瑞樹の表情が厳しくなる。

樹は、瑞樹の視線の先を見やった。

重い。

この扉を潜ることが。

何故だろう。

龍一は言いようもない不安に、逃げ出したい気持ちでいっぱいにな

った。

玄関とおぼわしき扉が開かれる。

玄関から。

忍がよく知っている顔が、近づいてくる。

顔だけは、よく知っている。

悠太の瞳は、初老の老人を従えて歩いてくる『たいせつなともだち』の服に、釘付けになる。

外国の貴族とか王様とか。

淡い紫に、薄い銀を中心に縁取られた服。

左肩から下げたマント。

この宮殿の所有者、如月涼の姿があった。

「みんな、お疲れ様。」

寂しさも幾分和らいだ顔で、涼が微笑む。

顔色も普通である。

「それじゃ、先に荷物だけ運んでもらおうか。」

涼が右手を軽く上げる。

涼の合図に、奥から数人のメイドが現れ、四人の荷物を運び入れる。

呆然としている四人を見た涼は、悪戯っぽく。

「…驚いた？」

と、告げる。

真っ先に口を開いたのは龍一だった。

「ちよ！」

「涼、あのメイドさんたち可愛いじゃないか。…俺も此処に住んでいい？」

車に乗り込むまでの陰鬱な気分など、すっかり忘れた顔で涼に直訴する。

「良いけど、犯罪行為はだめだよ？」

「う…。」

「それから…一人、1メイド。何かあつたら僕じゃなくて、メイドに言いつけて。」

僕は屋敷のことで忙しいから、と、涼は付け加える。

「それじゃ、二時間後に、みんなを『迎えに行く』から、待っててね。」

.....

「…何、この部屋…。」

案内されたドアをくぐると、そこには信じられない光景が広がっていた。

真っ先に目に入ったのは、天蓋つきのベッド。

これだけでも数千円はくだらないだろう。

見事な彫刻を施したサイドボード。



最新型の、76インチワイドテレビ。

我に返るまで、忍は呆然と、『数日過ぎす』部屋を見ていた。

こんこん。

「失礼します。」

かなり若い女性の声だ。

ああ、そういえば、涼が一人1メイドって言ってたっけ、と思い出した忍は、「どうぞ」と、部屋の中にメイドと思われる人物を招き入れる。

「本日より、皐月忍様の身の回りのお世話をさせていただきます、水樹杏奈と申します。」

よろしくお願いします、と頭を下げた杏奈の服に、忍は見とれる。

いつか自分が来たメイド服が、貧相に思えるほどに。

豪華なフリル。

高いだろう生地。

純銀の眼鏡。

自分はこんな豪華な生活、したことないのに…。

忍は、いつになく空想にふけていた。

『…さま。 忍様。』

杏奈の声に、忍は我に返る。

「お呼びしても、お返事がなかったものですから…」  
心配そうに忍の顔を見つめながら。

「私、何か粗相をいたしたでしょうか…」  
「ややうつむき加減な顔で、忍に訊く。」

「…や。別に何もありません。」

こういうのに慣れていないものですから、と言って、忍は自分の荷物を片付けにかかる。

「忍様、それは私の仕事です。」

慌てて杏奈が忍の傍へと駆け寄る。

「…そんな服で走ると…」

どきっ。

「…。」

自分の予想は何故こうも当たるのだろうか。

特に悪い方向で。

忍は溜め息をつきながら。

自分ともつれ合って倒れた杏奈を起こす。

「大丈夫？」

今度は杏奈がぼーっとしている。

「…どこか、痛い、の…？」

自分を見つめる皐月忍の眼が、不安げに自分を見つめている。そうだ。

私は由緒ある如月家の使用人。

粗相はできない。

皐月様は、当主であり、主人である、涼様の親友だ。

気を取り直した杏奈は、忍に「大丈夫です」と告げる。

「…全然、大丈夫じゃないじゃん。」

ぶっきらぼうに忍が言い放つ。

豪華なメイド服に、ほんの微かだが、紅い染みがついている。

「あ……」

自分の失態に、言葉を失う杏奈。

「……きつと、これで切ったんだね。」

忍が指で示した方向に、忍のポストンバッグのファスナーが、少し赤の色を帯びていた。

「待っててよ。」

涼の口ぶりど。

こういふ部屋には。

忍の頭脳が高速で計算を開始する。

「やっぱり、あつた。」

忍の手には、消毒薬が握られている。

「……沁みるから、我慢しててね。」

「は、はい……。」

手早く忍は消毒ガーゼに薬を染み込ませ、杏奈の傷口を拭う。

「これで大丈夫だから。」

やれやれ、といった顔で、微笑を作った忍を見て。

杏奈は胸が詰まる想いになった。

自分の失態。

如月涼以外で、初めて触れる、「大人になりかけ」の異性。

ぶっきらぼうで。

不器用そうで。

でも、いっぱいのおしよしさがある……。

「もう、片付けは終わったよ。」

忍はそう告げる。

杏奈がボーっとしている間に、忍は荷物を片付けてしまった。

「……申し訳ありません。」

杏奈は純粹にそう思った。

自分の役目を果たせず、客人に仕事をさせてしまったという罪悪感から、杏奈は深く俯いてしまった。

「そんな顔しないでよ。」

また、忍がぶつきらぼうに告げる。

ほんの微かに、朱が挿した顔で。

「あ…あの、私…。」

どうしてだろう。

忍に見つめられると、動悸が止まらない。

何故だろう。

「…ちよつと、手伝ってよ。」

コンタクトを取りたいから、と言う忍を、杏奈は洗面台へと導く。

「こちらでございます。」

杏奈がどうにかこうにかして気を取り戻して。

いそいそと忍は洗面台でコンタクトを外す。

コンタクトを外した忍は、銀の彫刻が施された眼鏡をかける。

「杏奈さんと僕、眼鏡仲間だね。」

悪魔を虜にする微笑が、杏奈に向けられる。  
どうしよう。

こんなにドキドキするのは、初めて…。

杏奈の顔は、太陽よりも紅く染まっている。

「…杏奈さん。」

忍が杏奈に顔を近づける。

「あ…。」

杏奈の声は、忍の唇の中で、微かに響いた。

- - - - -

こんこん。

「どいぞ。」

樹は、飲み終わったばかりのカップをソーサーに置きながら、答えた。

がちゃ。

「樹。」

宝石が縫いこまれた白のカッターシャツを着た、如月涼が部屋に入ってくる。

「慣れたものだね。」

涼は言いながら、樹の向かいに座る。

「そうか？」

これでも緊張しているぞ、と樹は告げる。

「またまた。」

いつもの涼の微笑みだ。

樹は、ほっとした気持ちになった。

玄関で涼を見たときは、威厳たっぷり、近寄り難い空気を醸し出していたが。

こうしていると、着ている服が違うだけで、いつもの「ほんわか」した空気だ。

「俺の部屋に来たということ、そろそろ時間なのか？」

樹がそう尋ねる。

「うん。そうだよ。」

「俺で最後か？」

「いや、まだ忍を迎えに行っていないよ。」

「そうか。」

「早速、龍一がうちのメイドにこつてり絞られたけどね。」

「そうか。」

「悠太は逆に、メイドさんからお菓子を貰ったって喜んでたよ。」

「そうか。」

「樹。」

珍しく、涼が頬をぶくつと膨らませながら。

「樹は『そうか』しか言葉知らないの？」

「『そうか』以外の言葉も知っている。」

「じゃあ言ってみてよ。」

「そうだな……」

「何故、お前の身体が大変なときに、ニ実家へ呼び出したりしたんだ？」

弾けるような視線を、樹は感じる。

ややあつて。

涼が閉ざされた重い口を、ゆっくりと開き始めた。

「…みんなに。」

「樹、龍一、忍、悠太。」

「僕は君たちより多くを見てきたけど…。」

そこまで言つと、涼は悲しそうに、瞳を伏せる。

「信じられるみんなには、嘘はついていたくはないから。」

悲しそうに瞳を開けた涼は、樹を見据えてそう言った。

「そういうことか。」

樹は嘆息する。

「…大方、俺たちと一緒に過ごしたかったんだろう。」

「…うん。」

「でも、僕が夏と一緒に過ごすということは、ここへ来てもらわな  
いといけないということだから…」

「…瑞樹さんの様子を見れば、俺たちにとって些細なことも、只事  
じゃないというのはよくわかる。」

「樹…。」

「俺は、お前のような不思議な能力があるわけでもない。龍一のよ  
うに、素直に自分の感情を表現も出来ない。忍のように冷静な分析  
も出来ない。悠太のように強くも明るくもない。」

「そんな俺を、お前たちは友としてみている。」

「俺のほうこそ、お前たちには感謝している。」

「樹…。」

「だから、俺は、お前が真実を打ち明けてくれたことに感謝してい  
るし、その信頼に応えたいと思う。」

そう言った樹の顔が、ほんのりと紅いことを、涼は認めた。

「樹も、そんな顔をするんだね。」

「涼…！」

「ごめん、茶化してないよ。」

「ただ、樹って、損な性格してるなって。」

「何時か言っただけど…肩の力を抜くというか…」

「樹は、もっと、怖がらずに信じて話をするように、心がけたほうがいいよ。」

そう言って、涼はまた悲しそうな顔をする。

涼が言葉を告げようとしたとき。

こんにちは。

「失礼します。」  
年配の女性の声がした。

「あ、はい。」

女性のほうに振り返った涼の顔は、いつもと同じ顔だ。  
きつと、この宮殿では気も休まるまい…。

樹は、そう断じた。

女性の顔が、険を帯びている。

「涼様、宜しいでしょうか？」

「ここでもいいですか？」

女性がちらりと樹のほうを見て、『構いません』と告げた後。

「涼様、お耳を…」

「どうぞやら…」

女性から話を聞いている涼の顔が、段々険を帯びてくる。



何事もなければ良いと思いは、どつやら叶わないと、樹は思った。

- - - - -

「みんな、改めて長旅お疲れ様。」

四人を自室に案内した涼は、水色の上着を椅子にかけながら言った。

「ここが僕の部屋だよ。」

最新型のパソコン、テレビ。

豪華な天蓋つきのベッド。

宝石で装飾が施されたクローゼット。

淡い紫の地に、手縫いの模様が施された絨毯。

四人の目に入るすべてが、普段の質素な如月涼とはかけ離れていた。

そして。

真っ先に目に入ったのは。

大きな金の額縁に入った、髪の毛の長い少女の肖像画だった。

樹と龍一はこの少女に見覚えがある。

涼の病室で見た。

形亡き姿の美少女。

「さて…晚餐会が始まる前に、一つ昔話を聞いてほしくて。涼が。」

いつもの微笑で。

強い決意を。胸に抱いて話し始める。

「忍と悠太は見たことなかったよね。」

そう言った涼は瞑目し、やおら右手を掲げる。

淡い光が、室内に充満する。

光が収まると。

肖像画と何一つ変わりのない、少女の姿がそこにあった。

『…無理して。』

声ではない。

少女の意思が、直接樹たちの脳裏に響く。

少女が、慈しむように涼を抱きしめる。

「無理してないよ。」

そう言った涼の声は、無理をしているように感じられた。

「彼女は。」

「三年前、僕を庇って肉体を失った魂だ。」

「…彼女と、僕は、恋人同士だった。」

涼の言葉に、少女の魂も頷く。

「彼女の名前は、桂木麗奈。」

「僕たちと同じ年。…生きていたら。」

『でも、私は後悔していない』

樹たちの脳裏に、また少女の意思が伝わった。

「彼女は……」

『私は……』

「僕のために……」

『涼を守るために……』

「僕の能力で、彼女は僕と共に生きている」

『無理をしてほしくない……けど、一緒にいたいのも、**真実**。』

涼の言葉と、麗奈の意思が、四人の脳裏を駆け巡る。

「……解る、気、する。」

白衣に眼鏡をかけた忍が、頭を抑えながら言う。

「ついさっき、逢ったばかりの人だけだ。」

「彼女がいなくなったなら……僕も、どうなるか、わからない。」

初めてのキスを交わした杏奈の顔を思い浮かべながら、忍は言った。

『わだかまり、ね。』

また。

麗奈の意思が四人の脳裏に響く。

「僕は、彼女と生きていたいから…好きな子は、僕にとって、世界で彼女一人だから…」

『私にとって、涼は光だから。世界を照らす光だから…』

「…抱えきれないんだろ。」

龍一が言う。

「だから、俺達にも話したんだろ。」

龍一の本気。

涼も本気で応じる。

「うん。」

「龍一との約束もあるし。」

「約束？」

「…いつか、僕の口から語れって、約束。」

言われた龍一は思い返す。

『早く治して、お前の口から語れや』

自分にとっては些細な言葉なのに。

涼はそれを覚えていた。

そして、その約束を守ってくれている。

そのとき。

四人の意識が、急速に戻る。

麗奈の意思は、もう頭に響いてこなかった。

.....

.....

「……」  
楽しそうに、悠太が手にした蟹を平らげた。

悠太の皿には、綺麗に剥かれた蟹の殻が片付けられている。

「……どこで覚えたの、それ。」

そう尋ねた忍の皿は、台風と地震が一度にきたような惨状を示している。

蟹とおぼわしき破片が、辛うじて皿の上に乗っている。

見かねた龍一が『俺が剥こうか』と言ったのだが。

忍は、別に食べればいい、と断ったのだった。

そんなやり取りを、涼は微笑みながら見ている。

時折、茶々を入れながら。

「でもよ。」

龍一が食事の手を休めて、涼に訊く。

「『晩餐会』って言うのに、俺たちしかいないんじゃないじゃ、ただの『豪華な夕飯』だろ？」

一瞬。

ほんの一瞬だが。

涼の顔が、憂いを帯びた。

「ふふ。」

涼も食事の手を止め、テーブルから立つ。

「ここは、ホールの真上にあるんだよ。」

そう言っつて、絨毯を自動で巻き取らせる。

そこには、マジックミラー張りの床面が現れた。

「よく、下のレセプションにいる人間の顔を見てごらん。」

言われた樹たちは、床を覗く。

下のホールには、この国だけでなく、世界各国の首脳、有名人が集

まっていた。

四人が息を飲んで、涼を見つめる。

「もう、大体わかっていそうだけど。」

涼は執事が持ってきた礼装用の服に着替えながら、言葉を繋ぐ。

「本当の僕……『如月涼』は、如月財閥のトップなんだ。」

「如月財閥は、各国の政治、経済の管理を目的にしているんだ。」  
「だから。」

汚いものを見るような目で、着替え終わった涼が下を見つめる。

「僕のような子供のご機嫌を取りにくるんだよ。わざわざ。しかも税金を使って。」

冷やかに言い終えた涼。

執事が、時刻を告げると、涼は無言で退室した。

やがて、下のホールから歓声が上がる。

首脳や社長、貴族が瞬く間に涼の周りに集まる。

龍一たちは、見ている胸が悪くなった。

## 第十五話：虚飾（後書き）

お読みいただいております。ありがとうございます。

今回、非常に長い上に、前回からかなり間が空いてしまいました。申し訳なく思っています。

これからも、光野ワタルと、『黄昏ゆく街で』をよろしく願います。

第十六話：転落（前書き）

そして、夏が過ぎ。



## 第十六話：転落

「…以上が。」

瑞樹がコート裾を整えながら、真奈美に告げる。

「この夏の、閣下の出来事です。」

真奈美は憮然として、瑞樹の顔を直視しない。

「…そんな顔をせず、無事に励めば、貴女には校長か教育委員会の席が約束されています。」

くれぐれも、大事無いように、と念を押して、瑞樹は嘆息しながら真奈美の部屋を出る。

「言われなくなっちゃって…」

解ってる、と言いついて聞かせて。

自分が教師を目指した時とは違つと、言いついて聞かせて。

真奈美は部屋を後にした。

世界を震わせた、あの凄惨な事件が、彼の仕業とはどうしても思えなかった。

「…間に合わなかったか。」  
樹は胸の奥で、溜息を吐く。  
如月涼の容態が急変して一週間。  
重い気持ちで、教壇に上る。

これから毎日、こんな気持ちで朝を迎えるかと思うと、樹は涼の苦  
労がわかるような気持ちになった。

「はい、静かにして。」  
真奈美は、樹に自分の教室を任せて、隣の。  
忍と悠太のクラスにいた。

「寺島先生は、今学期から県外の学校に赴任されました。」  
「今日は、新しい担任の先生と。」  
クラス内がざわめきたつ。

「転校生を紹介します。」

転校生、という言葉に、教室内が一層ざわめき立つ。

「まず、担任の先生から紹介します。」

入ってください、という真奈美の声に導かれ。

教室のドアを潜ったのは、真奈美より一回り大きな、若い女性教師だった。

「鑑勇です。」

凜とした声に、沈黙が支配の力を強めてくる。

「今日から、朝陽ヶ丘高校の教鞭を執ります。」  
みんなよろしく。

あっさりした挨拶に、一瞬、完璧な沈黙が訪れ。

次々と質問が飛ばされる。

「先生彼氏いるんスか？」

「先生歳いくつ？」

「先生ノーメイク？」

「先生」

「先生……」

『じりー』

勇と真奈美の声が、生徒たちの声を覆い隠す。

「質問は、この後の自由時間にすること。」

「それと。」

真奈美の視線が、窓際が一番奥の奥に注がれる。

「臯月君。起きなさい。」

しかし、忍は起きない。  
隣の席の悠太が、慌てて忍を起こす。

「…ん…。」

不機嫌そうに辺りを見渡して。

空気が違うことに気づく。

「…あれ？ 誰、そのモデルさん。」

素っ頓狂な声に、クラス内に失笑が響く。

真奈美が呆れた顔で、

「臯月君、よく寝てたから気づかなかったんだね」

ストレートに猛毒を含ませて告げる。

「新しい担任の先生よ。」

「…そう。」

興味ないよ、と言い捨てて、忍は再び机の上に突っ伏せようとする。

「しのぶきゅん、まってよあ〜。」

悠太が制服の裾を掴む。

「てんこうせいもいるんだよ。」

「ふーん。」

一層興味のない顔をした忍をよそに、真奈美は、『続いて転校生を  
紹介します』と告げる。

真奈美に呼ばれて教室の扉を潜ってきた顔を見て。

忍の眠気が、一気に醒めた。

「みなさま、はじめまして。」

そう言った転校生の顔は。

如月家の使用人であるはずの、水樹杏奈だった。

その日の早朝。

神無月龍一は、如月涼の病室にいた。



そして、涼は孤独へと墮ちていった、

## 第十六話：転落（後書き）

お読みいただきありがとうございます。  
いかがでしたでしょうか。

前話に比べると、分量としてはかばり少ないですが、ご理解いただけるとありがたいです。  
これからも、光野ワタルと『黄昏ゆく街で』をよろしく願います。



## 第十七話・停滞

『…涼。』  
行かないで。

『涼。』  
嫌だ。

『ごめんね、涼…』  
嫌だ…

麗奈！

嫌だ、僕は、僕は…

『涼には、まだやることがあるから。』

『私は、先に逝って待ってる。』

『最後の命の灯火で。』

『涼の光が、少しでも長く世界を照らして欲しいから…』

『。ゆるゆる。』

『…じゅめんね、涼。』

「席に着け！。始めるぞー！」

低い勇の声が、忍の眠気を吹き飛ばそうと、襲い掛かってくる。

「臯月、眠たいのなら、プールに突っ込んでくるか？」

勇の脅迫に、忍は嫌々瞳を開ける。

忍の後ろの席の杏奈が。

「忍様。昨晩は何時頃御休みになられたのですか？」

と、囁き声で聞いてくる。

忍はこれもち嫌々。

「…夜中3時。」

ぼそつと呟く。

顔を紅く染めながら。

「いけません！」

杏奈の声が、勇の声に被さる。

一瞬、視線が杏奈に集まる。

「あ…い、いえ、何でも…」

「何でもないなら聞かないですよ。」

忍がムスツとしながら聞いてくる。

「何でもなくはありません。他ならぬ忍さ…ま…」

言い切つて、杏奈の顔も紅くなる。

「あ…」

勇が手にした竹刀を手持ち無沙汰に回転させて。

「夫婦漫才は、放課後やるように。」

ビシッと。

でも、どこかやる気なく告げる。

真っ赤になつて俯いてしまった忍と杏奈を見ながら。

「二人とも赤いよお」

多分、何も分かっていない悠太がきょとんとした顔で告げる。

「霜月…頼むから引つ掻き回すな…。」

勇の声は、年齢以上に疲れて響いた。

樹は、気が重くなる思いで、病室に足を踏み入れた。  
龍一とあんなに激しくやりあった後では、涼に何を言われるか。  
嘆息して、覚悟を決めて。  
特別室のドアを開ける。

そこには、黒髪。  
人工的な匂いがしない、天然の、黒、  
蒼い髪を失った、如月涼が、横たわっていた。

樹は無言で、カーテンと窓を開ける。  
郊外の病院からは、鮮やかな緑が良く見える。  
半分は涼のため。  
半分は自分のため。  
樹は、涼が目覚めるときを、待っていた。

「龍一先輩。」

後ろから低い声で呼ばれたのに気づくまで、相当かかったことに気づいた。

龍一の右頬は赤く腫れ上がっている。

「ああ…、んだ、梢か…。」

この小生意気な後輩の顔を見ると、友達の小生意気な顔が脳裏にちらちら揺らめく。

樹との派手な喧嘩の余韻を、龍一も引きずっていた。

「どしたんスカ…その顔。」

「うっせえ、今そのことに触れるんじゃねえ。」

「早くしないと生徒会始まるッスよ。」

「わーってる、わーってる。」

「…水無月さんと、何があったんスカ？」

怒気と殺気。

抑えきれない感情を隠そうともせず、龍一は梢の首根っこを捕まえた。

「…やめて、くだ、さいよ。」

その声に、龍一に残っていた僅かな理性が顔をもたげる。

「龍一先輩にガチ喧嘩売ろうなんて人は、今は水無月さんしかいないじゃないッスカ。」

言われて。

龍一は気づく。

涼と樹だけが、自分を見ていたことを。

梢が言葉を続ける。

「マジの龍一先輩の怖さ、自分始め多くの人間知ってますから。」

言われて、龍一の顔に苦笑が浮かぶ。  
同時に。

そんな自分を、二人が見守ってきたことも。

「冬椰。」

不意に自分の名前を呼ぶ龍一の声が、何時も以上に生き生きとして  
いるのを、冬椰は認めた。

「…何スか。」

嫌々答える。

「雲雀ちゃんと、どこまで進んだ？」

「…関係ないじゃないスか…。」

「いいや、関係あるね。…雲雀ちゃん元気なかつたぜ？」

ムツとして、冬椰が踵を返そうとする。

「…今度喧嘩の仲裁してやるから、今日はオマエ生徒会よろしくな。」

「…ちよー！」

冬椰が追いかけてようつとする気が失せるほど、龍一はその場から華麗  
に消え去った。

「…。」

無言で瞳を開けると、開け放たれた窓から心地よい風が入ってくる。誰が開けたのか、考えるまでもない。

本人が、涼の視界に入ってきた。

「起きたか。」

樹は、見開かれた瞳を見て。

黒い髪と黒い瞳を見て。

鮮やかな色を失って光る瞳を見て。

何から言葉を告げればよいのか、分からずにいた。

「大丈夫だよ。」

第一声は、その声から始まった。

「昨日龍一が来て、大騒ぎになったけど。」

「…また、命がけで守られて、今度こそ僕は一人になって。」

「あとどれくらいなのか分からないけど、何か遺さないといけなから。」

そこまで言った涼は、また無言になる。

「もう中間テスト終わったんだよね。」

はぁ、とため息をつく。

「テストを受けないことなんて初めてだから、どうしたらよいか分



からなくて。」

「…入試は無事に終わった？」

「ああ。」

「龍一と俺が、推薦で国立大学に合格した。龍一は法学部、俺は医学部だ。」

「忍は結局、北山の科学部、悠太は日本家政科大学。」

「みんな、進路は決まった。…お前以外は。」

「そう。」

いつもの微笑で、涼が答える。

「俺は結局、卒業まで石川先生の家の下宿することにした。」  
樹が答える。

「…間違い、あっちゃダメだよ？」

涼にしては悪戯っぽく。

唇に手を当てて『内緒』のポーズを作る。

「…治れば、お前は海外か。」

「…うん。イングランドオックスフォードの世界経済部。」

「国内がいいって駄々こねたけど。」

「…瑞樹さんに押し込まれたか。」

「…うん。」

「大丈夫だ。俺たちは仲間だ。…どこにいても。」

「そうだね。」

そこまで話して、涼はやつとベッドから立ち上がる。

「主治医の先生は何て言ってた？」

「…栄養を取り込む遺伝子情報が欠落しているそうだが。」

樹は強く。

「俺も研究チームに参加している。必ず、お前を治してみせる。絶対に、治してみせる。」

「これは…。」

『俺と僕の約束だ。』

。ん。ん。ん。ん。ん。

「龍一？」

涼の顔が明るくなる。

「そーだぜー。」

病室の中に入ってきた龍一は、たくさんの荷物と最近持ち歩いているギターを抱えて入ってきた。

「頼んでいたもの買ってきてくれたんだ。」

「おうよ。」

龍一はどさどさ、と机の上に数え切れないくらいの美術用品を並べていく。

「請求は、あの胡散臭いオッサンでいいんだよな？」

「構わないよ。」

にこにこしながら、涼は承諾する。

「…何を、するんだ？」

樹が訝しげに聞く。

涼は寂しさを満面に湛えた顔で。

「屋敷の肖像画。…覚えてるよね。」

樹と龍一は無言で頷く。

「あれを描き直して、今度の展覧会に出そうと思って。…他にも作品を出そうと思うし。」

「そっか！」

龍一が努めて明るく振舞う。

「がんばれよ、涼。」

「無理をするなどいっても聞かないだろうから、納得いくものを描け。」

「ありがとう、二人とも。」

「そうそう。」

龍一が思い出したように、ギターを取り出す。

「新曲できたから、聞いてくれよ。」

樹は渋い顔をしたが。

「いいよ。」

涼の承諾に、樹も従うしかなかった。

第十七話：停滞（後書き）

お読みいただきありがとうございます。  
いかがでしたでしょうか。

これからも『黄昏ゆく街で』と光野ワタルをよろしく願います。

## 第十八話：聖夜

「ありがとう、杏奈。」

そう言つて、よろよると涼はベッドに雪崩れ込む。

「涼様…。」

杏奈の顔からは、涙が零れ落ちそうだ。

「済まないと思つている。迷惑かけて。」

涼はふう、とため息をついて。

「…僕は、もう、長くないから…。」

「そんなこと仰らないでください、涼様。」

「…昔みたいに、『涼くん』でいいよ。」

「でも…。」

「…忍と、幸せにね。」

朝の光より紅く染まつた顔から。  
雨が零れて、病院の床に落ちた。

朝が来る前。

「…樹。」

寝ぼけた真奈美は、樹の胸で目覚めた。  
越えてはいけない一線を越えてしまつて。  
何度も樹の若く荒々しい波に打たれて。  
至福のときを真奈美は感じていた。

二人とも何も纏っていない。  
やがて、樹が目覚めます。

真奈美の顔に気づいて。  
樹は無言で真奈美を引き寄せる。  
真奈美の身体に、また熱い熱が燈る。

朝陽が強くなるまで。  
何度も、何度も、樹と真奈美は求め合った。  
互いの寂しさを罪悪感で埋めるように。

「…珍しいじゃん。」

龍一は珍しい訪問客に、眉を潜めた。

真琴は怒った顔で。

「…樹と別れた。」

ぶすつと呟いた。

「…ありえねえんだが。」

そう言つて。

未成年にはダメなアレを懐から取り出し。

一息に。

一息ついて。

「…何が原因？」

と、囁く。

真琴は俯いた顔で。

「如月先輩。」

小さな声で、はっきりと言い切る。

「あー…」

わかる気がするわ、という台詞を辛うじて飲み込んだ後遺症で。  
気まずい沈黙が流れる。

「何で俺なんだ？」



真琴との破局の余韻は、卒業を間近に控えた今も、二人の間に漂っている。

それなのに、何故、俺かと。

「…。」

真琴の顔が崩れる。

端正な顔立ちが崩壊する。

「如月先輩には…言えない。あとどれくらいかもわからない人には、言えないよ！でも！」

真琴が叫ぶ。

「どうしたらいいのかわからない。如月先輩だったらきっと私が納得できる答えをくれる。」

「…うつん、私は如月先輩の言うことなら納得できる。」

「でも言えないから。教師が生徒を寝取ったとか言えないから！」

「だから…！」

「貴方みたいなどうしようもない人にしか言えない…。」

龍一の胸の中で、真琴が呟く。

「今日だけ…今日だけだから、私を壊して！ アナタたち『三人』で！」

龍一はもう、どうしたらよいかわからなくなった。

ましてや掛ける言葉などどこにも見当たらなかった。

「…。」

「どうしたの？　しのぶきゅん。」

「…別に…。」

「昨日の悪夢から、忍もまた立ち直れずにいた。」

『旦那さまに何かあったら、私は屋敷に戻らなければなりません…。』

悲しそうな瞳を見て。

一切の感情を封じ込めて。

「…ごめん、悠太。」

忍は悠太を抱きしめる。

「どうしたの…?」

悠太の瞳の色が変わる。

「…僕は、ダメな友達だよね…。悠太のこともあるけども、結局誰ひとり守れずに。」

「涼の心も救えていないのに…。」

「ごめん…」

それだけ眩いて、忍は悠太の肩に顔を埋めて泣き出す。

止め処もない思いだけが堰を切ったように溢れて悠太を侵食していく。

忍の求めに。

悠太は何も言わずに、ただ。

忍の細い背中を抱きしめた。

「涼様。」

「ありがとう、杏奈。」

電動の車椅子に、涼は弱々しく腰を落とした。

「今日は発表会だから、行っておかないと……。」  
電動車椅子が、無音で駆け出そうと。

した、その時。

「うーっす。」

空元気だとわかっているから。

大切な友達に、心配をさせたくないから。  
努めて平静を装う。

「今から、展覧会へ行こうと思っていたんだ。」

「龍一が車椅子を押してくれるとありがたいんだけど。」

言われて。

元々華奢なほうだった涼だが、痩せ細って。

体が栄養を受け付けないのだから当たり前なのだけど。  
蜻蛉のように、やつれて。

逃げ出したい、正直。

でも、逃げちゃいけない。

「へえ…。」

「お姉ちゃん、龍ちゃん、涼きゅん♡」

「涼、辛くない？」

「…正直しんどいけど、でもみんなが来てくれたから、ちょっと平気。」

「涼くん、お菓子作ってきたよ。」

「ありがと。味覚はまだ生きてるから大丈夫。」

忍が悠太のお手製のお菓子を、涼の口に入れる。

こきゅ、こきゅ…。

飲み干す力も奪われていく。

「美味しいよ、悠太。」

力の限り。

太陽のような笑顔を心がけて

悠太の心が曇らぬように。

がちや。

「…。」

病室に入った樹だったが。

特段、語ることもない。

いや、語ってはいけない。

こんなことは、いけないのだが。

「…どうしたの、樹。」

問いかけてくる声が、痛い。  
不誠実な自分は…居るべきではない。

「…問題ないようだから、帰る。」

踵を返して、帰ろうとする。

体を重ねる度に、真奈美から聞いた。  
これまでの涼の人生。

養育環境以外の全ての条件は、如月財閥…、いや、如月瑞樹によっ  
て整えられていたことを。

涼のことだ。

薄々感づいているだろう。

俺は…。

「待つて。」

小さく。

弱々しくなっても。

諦めを覚えずに、もがくように。

「ごめん、龍一。」

「…わーっ たよ。」

龍一は涼を車椅子から引き上げる。  
悠太が歩行杖を持ってくる。

忍が涼を支えながら、歩き出す。

「待ってよ！樹！」

だが、脳で歩行を望んでも、涼の足には力が入らない。

「待ってよ！…待ってよ、行かないでよ、樹！」

床に崩れ落ちた涼が。

半狂乱の体で、自分と呼ぶ。

病院の守衛に呼び止められるまで、樹は自分が走ってきたことに気づかなかった。

「…着いたよ。」  
車椅子の上で、涼は龍一に停止を促す。  
そこには。

『本年度最優秀賞』と書かれた帯と。

いつか屋敷で見た少女が、絵の中にいた。

「へー…。」

龍一がまじまじと見つめる。

「こりゃあ…。」

別嬪さんだ、と言いかけて、口を嚙む。

「…涼の純愛と、龍一の邪な欲望を一緒にしないでよ…。」  
忍が龍一を睨む。

「…黙ってればこいつらも…。」  
言いかけて。

悠太が怖い顔で睨んでいるのに、気づく。

「えい。」

どす。

「ゆつた…ちょ…は、ん、そ…。」

音もなく崩れていく龍一を見ながら。

(悠太を怒らせるのだけは、絶対やめとこ…)

忍は呟きながら、親友の描いた絵に見入っていた。

「…如月先輩？」

不意に声がかかる。

その声が真琴のものであると認識するまで、涼は少し考えなければ



ならなかった。

「河本…?」

弱々しく答えた涼を見て、真琴は胸が痛くなった。涼から『学校の公務を任せる』と言われて。生徒会長になって、時間が過ぎて…。これほどまでに弱っていたとは…。

「河本は、どうして?」

「たまたまです。」

「…樹と…」

続けようとした台詞を、涼は飲み込んだ。

今朝の報告を聞いて、瑞樹をあらんばかりの勢いで説教したの思い出した。

「如月先輩。」

「…今日だけ。」

「え?」

「…僕からのお願い。今日だけ、『涼』って、呼んでほしい。」

「…はい…。」

「涼…。」

「真琴…。」

寄り添うようにして、二人は絵に見入っていた。

「…ねえ…」

「…あによ、馬鹿冬椰。」

「…走らなくてもいいじゃん。」

「うつさいわね…。」

「…ここ、美術館だよ。」

「言われなくても分かってる。」

「だったら。」

「あたしはあんたの…。」

言いかけて、雲雀は顔を真っ赤にしてしまった。

「変なの…。」

冬椰と雲雀が歩いていると。

一際大きな絵。

そして。

離れてその絵を見守る、小さな人たち。

「ねえ。あの絵…。」

冬椰も頷いた。

『本年度最優秀作品 如月 涼』

そう書かれた帯の下へ、冬椰と雲雀は歩いていった。

「先輩、ご病気…。」

沈痛な面持ちで雲雀が、涼を見つめる。

冬椰は相変わらず、我関せず、という顔だ。

「…心配してくれて、ありがとう。」

涼が弱々しく微笑む。

「今日だけ、特別だから…。」

言葉を切って、涼は、自分の絵を見つめる人たちのほうへ、目を向ける。

やがて。

視界の外れから。

高そうなジャケットに身を包んだ樹と。

真奈美と勇が、連れ添って歩いてくる。

樹の姿を認めた真琴が、立ち去ろうとする。

涼が、真琴の腕を弱々しく掴んで、「行かないで」と呟く。

「…。」

（ほら、早く仲直りしなさい。）

（水無月、だからヘタレと呼ばれるんだぞ。）

「…涼。」

樹が、重く閉ざされた口を、ようやく開いた。

「済まなかった。」

ため息を大きく一つ吐いて。

「…樹のバカ。節操なし。へたれ。」

「でも…」

「ちゃんと謝るんだったら、お仕置きで許すよ。」

「すまない…。」

「悠太。」

悠太を呼んで、何やら涼は、耳打ちする。

悠太は渋っていたようだったが。

やがて。

「えい。」

どす。

どす。

どす。

どす。

緩やかに重い鉄拳が、4発、吸い込まれた。

「…うわ…」

霜月先輩容赦ねえ…

冬椰は、樹に、ほんの少しだけ同情した。

「…。」

嵐が過ぎ去って。

いつ終わるかわからない、長い沈黙が訪れた。

涼がやっと、口を開く。

「今日は、みんなに逢えて、嬉しかった。」

「今度は何時になるかわからないけど。」

「でも…」

そう言った涼の顔から、生気が急速に消える。

「僕は…みんなと出会えて…よか…っ…」

がっくりと、涼は首を下に落とす。

それを合図にしたように。

時間が、また未来へと向かって動き出す。

遠くなる意識の中。

涼は、皆が口々に自分を呼んでいることだけはわかった。

## 第十八話：聖夜（後書き）

お読みただいて、ありがとうございます。  
いかがでしたでしょうか。

ご意見、ご感想お待ちしております。

第十九話：臨終（前書き）

全てが。

この日に向かっていた。

そして、この日から、新しい日常が始まる。

## 第十九話：臨終

年をまたいでも、まだ如月涼は目を覚まさなかった。

誰もが奇跡を、願った。

叶うのなら、再び…。

経官栄養という案も出たが、どうやら、如月瑞樹が如月涼の意思を捻じ込んだらしい。

変わりに、彼の両腕、大腿部には夥しい数の管が伸び。

酸素吸入器からかすかに聞こえる呼吸音と、心拍数を示す電子音だけが、彼の生存を示していた。



入れ替わり、立ち代り。  
如月涼の病室に人は訪れる。

まるで、最期の別れを済ますかのようじ。

「涼。」

「おきてよ、涼。」

「…早くおきやがれっつもの…。」

「…。」

珍しく。

年が明けてからはそれぞれが進路や家の用事で忙しく過ごしていたが、この日初めて、四人は涼の病室に揃った。

「…しっかし、中々うまくいかねえなあ…。」

「何が？」

「いや、こつちの話。」

「…手が早すぎると思わないのか？」

「不誠実な関係よりはマシだっつもの。」

「樹きゅんの不潔。」

「いや、だから…。」

「気にしちゃだめだよ悠太、これはただ年上を誘惑しているに過ぎないから。」

「あのかな…。」

「そうそう。しかも担任ときた日にはやってられらんねえぜ。」

「…。」

「あ、逃げた。」

「逃げやがった。」

「追っかける？」

止まない樹への追及。

その時、風が吹いた。

窓が閉まっている病室で、確かに、微かに。

鈍く、光るものがある。

紫紺の闇の中。

『もう…やり残したことは、ないのね…。』

『…。』

『お疲れ様、涼。』

紫紺の闇から、いつの間にか現れた麗奈が、涼を抱きしめる。

『…もう、ちょっとだけ。』

『最期に、お別れだけは、言って逝きたい。』

『…わかってる。』

『でも、あまり時間はないから、手短かにね。』

蒼。

久々に見た、蒼い髪。

目覚めると、大切なものがある。

目覚めた、大切なもの。

最期の、とき。

「最期に。」

目覚めた涼が、吸入器を外しながら、ベッドを持ち上げる。

「本当に、最期の時間だから。…覚悟してね。」

空気が変わる。

彼が持つ過去、その重みが。

もうすぐ消え去ろうとしている。

「悠太。」

「嫌。…嫌。どこにも行っちゃ嫌。」

「ごめんね、悠太。」

「でも、僕を待っている人がいるから。」

「それに、悠太はもう、一人じゃない。」

「大切な親友と、頼りない旦那と、変態がいる。」

「…何気に扱い酷いな、おい…。」

「…空気嫁よ、『変態』。」

「本当に扱い辛い旦那だけど、僕に代わってよろしくね。」

「悠太が世界を料理するところ、見たかったなあ…。」

「忍。」

「…分かってるよ。」

「僕は必ず、涼を生き返らせる。それが僕の希望だ。」

「…そう。」

「その覚悟が固まったら、僕の屋敷を訪ねてほしい。」

「多分、必要なものは揃っているから。」

「…うん。」

「三人のこと、宜しくね。」

「…それと、必ず嫁をもらうこと。」

「変態。」

「…最期まで、それかよ…。」

「龍一。」

「龍一の歌は、僕を勇気付けてくれた。」

「これからは、僕以外の人たちにも、勇気を与えてほしいと思う。」

「…おういえず…。」

「それと、あんまり華々しい関係は、控えたほうがいいよ。」

「う…。」

「約束しないと、グーで殴る上に、死んでから恨むよ?」

「わーった、わーった…頼むから化けて出るなよ?」

「大丈夫だよ。」

「どこにいてもちゃんと二人で見守ってるから。」

「…樹…。」

「…涼…。」

「…今まで、ありがとう…。」

「…こちらこそ…ありがとう。」

「本当はね。」

「…こんな風な別れなんて嫌だよ…!」

「…もっと、もっと…と、みんな…など…生…きていた…かつ…た…」

「……こんな運命…嫌だよ…。」

「早くそのへたれた根性支えてくれる人、見つけるんだよ。」

「後のことは、僕の育った家にある金庫に、全て書いてある。」

「それじゃ、みんな、おやすみ。」

「また…逢いたいな…。」

流れる涙は滝のようで。

還るべき時を迎えても、尚、運命に対する最期の抵抗。  
やがて、運命は小さくなった体を飲み込む。

再び、大いなる大河に、戦い疲れた魂を帰すように。

三日の時間が流れ。

緊急放送の後。  
真奈美が強がった顔をして、樹を見たとき。  
樹は悟った。

「みんな、今病院から連絡があった。」  
「…如月君、安らかな顔で旅立ったそうよ。」  
真奈美の顔が、崩れている。

悠太も、忍も、龍一も。

そして、樹も。



享年十八歳。

如月涼は、最期まで孤独を戦い、逝った。

彼が、遺したもの。

それは…。

第十九話：臨終（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

ご意見、ご感想などお待ちしています。

第二十話：残香（前書き）

悲しみに暮れる樹たち。

未来から過去へ、鮮烈な記憶とともに時間が動く…。

## 第二十話：残香

「…終わったか。」

「ああ。」

「…長かったようで、短かったね…。」

「如月くん…。」

パソコンから、再生を終えたDVDを取り出す。  
終わりの始まり。

「もう、二年経つんだね…。」

「ああ。」

「涼のやつ、今頃…。」

「…。」

「どうした、悠太？」

「…如月くんのお葬式のこと、思い出してた。」

悠太の顔に、深い影が射す。

「黒くて、悲しくて。」

「如月くんのこと考えていたのは、僕らだけだったよね…。」

『妙法蓮華経…』

僧侶の読経が力強く響く。

樹、龍一、忍、悠太、真奈美、真琴、冬椰、雲雀、そして瑞樹も後列で参列していた。

忍と悠太は友人代表として。

冬椰と雲雀は後輩代表として。

真奈美は学年とクラスを代表して。

瑞樹は、涼の昔の関係と、実家を代表して。

真琴は生徒会を代表して。

それぞれが、如月涼の短い生涯に思いを馳せていた。

如月涼の葬儀は、火葬場に併設されている斎場で、しめやかに営まれていた。

生前の人徳か、全世界から彼を知る者が焼香に訪れた。

『…久遠の人生…』

異質。

それは、若い樹たちにとっては、異質な空間。  
死んだのに、人が、死んだのに。  
流れるクスクス声、微笑み、嘲り。  
死者に鞭打つ言葉の数々。  
安らぎなど何処にも無い。

『…。』

『どうしたの、涼。』

『予想通り、かな。』

『…私るときもそうだったよ…。』

『本気で泣いてくれたのは、涼だけだった。』

『…麗奈。』

『なに…？』

『人の性とはいえ、悲しいね…。』

埋め尽くされた式場から、すすり泣く声が聞こえる。  
真琴が、雲雀が、真奈美が、悠太が泣いている。

樹、龍一、忍、瑞樹も、溢れる涙を堪えようとしない。

しかし、遺影に近いほうでは。

笑い声、雑談。

死者を嫉み、詰る声の数々。

許されない言葉の数々。

悼みを悼みと思わない顔の数々。

『涼。』

『もうちょっと…もうちょっとだけ。』

『最期に僕が遺したものが、息づいているか、見てから逝きたい…。』

『相変わらず、頑固なのね。』

『結構言われた。』

『…でも、そんなあなただから愛することができた。』

『愛してるよ、涼。』

僧侶が一礼して、席を後にする。

自分に乗せた棺が、火葬場に向けて運ばれていく。

僧侶が戻ってきた。

先導しながら、如月涼の遺体を茶毘にふす。

悠太が叫んで、涼の棺に取り付いた。

樹と忍が、ゆつくりと、悠太を棺から引き離す。

龍一は顔を背けようとした。

しかし、この瞬間まで見届けなければ。

そう思うと、吸い込まれていく棺を凝視しざるを得なくなった。

冬椰は、生前の涼から託された使命を思い返していた。

そして、その重さを、改めて噛み締めていた。

『龍一と悠太には、それぞれに遺したものがわかってるみたい。』  
『そう…みたいね。』

遺体を焼いている間、集まった親族に、樹が自分の遺言を読み上げているのがわかった。

親族が反発する。

しかし、忍と真奈美が樹をフォローしたようだ。

やがて、茶毘にふされた遺体が、火葬場から出てくる。

華奢な体に似ない、骨太の体。

まだ若いからか、しっかり骨の端々まで残っている。

真琴が、声にならない声を上げた。

その肩を、雲雀がそっと抱きしめる。

『…涼。』



『…何？』

『良かった。正直、どうなるかと思った。』

『僕も、同じ気持ちだよ。』

『…ちゃんと、遺せたみたいだね。』

麗奈が涼を抱きしめる。

『…辛かったね、涼。』

『これからも、ずっとずっと一緒だよ、涼…。』

涼が麗奈を抱き返す。

『僕も、君と一緒にだよ、麗奈。』

『君が僕に遺してくれた事、確かに伝えたから…。』

少年と少女の魂は、落ちる夕陽に、溶けるように消えていった…。

第二十話：残香（後書き）

お読みいただきありがとうございます。  
いかがでしたでしょうか。

今後とも、光野ワタルと『黄昏ゆく街で』をよろしくお願いします。

終章・黄昏（前書き）

未来へと動き出す時間。

黄昏の時は過ぎ、黎明へと動き出す、時間。

## 終章：黄昏

微かに残ったものがあつた。

生きていた時間は過ぎ去り、今は深い深い闇の中。

総ての魂が集う場所。

同じ世界を、違う尺度で俯瞰する場所。

この世界で肉体が朽ちるとき、悲しみが生まれる。

この世界で肉体が産まれるとき、慈しみが生まれる。

失われつつある、根源の定理。

『悲しみ』

人を傷つけ、傷つけられたときに生まれる想い。

『喜び』

想いが叶うときに生まれる想い。

『愛』

想いの生まれることを、想う想い。

『夢』

想いを繋げるための、想い。

強い想いは人を狂わせ、留め、そして強くする。

如月涼が遺した、想い。  
それは…。

自宅に戻った水無月樹は、意を決して、自分宛の遺言状を開いた。  
開く機会はあった。  
開こうとするきっかけもあった。  
しかし、開けないでいた。

書かれていたのは、数行の文章。

『親愛なる樹へ。』

君が何時この文章を見ているか分からないけど、君がこの文章を見ているということは、少なくとも僕の呪縛から逃れ得ているということだと思う。

君は、僕を意識しすぎるあまり、水無月樹という人間がどういう人間なのか、自分自身で分からずにいた。

君は今、君が望んだ道を、君らしく歩いている、  
それは、誇りに思うべきことだ。

君の未来に輝かしい成功があらんことを、久遠の彼方から見守って

いる。

最高の親友へ。

如月 涼 』

総て見終わって。

樹は嘆息する。

『涼には一生かかっても敵わない…。』

しかし、顔を上げた樹は、過去を引きずる様子はなかった。

「…俺も、いずれそっちへ逝くだろう…。」

「だが、俺は最期の瞬間まで、俺らしく生き抜いてみせる。それが俺がお前から受け取った想いだ。」

自分の決意と想いを口にして。

遺言状を自分の金庫に仕舞う。

「明日は国際医学論文の提出期限か…。」

樹は、最終チェックのために、分厚い論文を取り出した…。

神無月龍一は、自慢のスカイラインの車中で、如月涼の遺言状の封を切った。

『大切な親友の龍一へ』

龍一は今、何してるかな？

僕は…わからないな。

龍一は二つ。

逃げないことと、恐れないこと。

嫌な事や現実から目を逸らさない事、そして、本当の姿を曝け出す事を恐れないこと。

忘れたら死んでから恨むから、覚悟してね。

それと、女の子の気持ち、もっと大切にするように。

龍一の成功を祈っています。

最高の悪友へ。

如月 涼  
『

…敵わなえな…』

読み終わって、封筒に手紙をしまいながら、龍一は呟く。

「俺のことはお見通し…だってか…。」

はぁ、と深い溜息をついて。

成年だから良くなったアレに手を出そうとして。

「…歌、歌うんだから、止めなきゃ、な。」

そう言って、愛車から降りる。

「…結局、俺はオマエのこと、なんもしてやれなかったよな…。」

ふう、と呟き。

「ま、俺は俺のやりたいようにやるだけさ。」

そういつて、自宅のパソコンに向かう。

新曲の音源をいじるために。

皐月忍は、結局大学の科学室に戻ってきた。  
今の自分の居場所。  
誰もいない研究室。



自分が始めた禁忌の研究。

「僕は…きつと許されないだろう…。」

如月涼を、再び呼び戻す。

その為に科学の道を選んだ。

樹のように、医学を習っていてもよかった。

しかし、趣味だった実験に、一つの大きな目的ができた。

不意に頭をよぎるものがある。

忍は、何度も読んでくしゃくしゃになった、遺言状を取り出した。

『大切な親友へ。』

忍は、きつと実験に明け暮れていると思う。

でも、僕を生き返らせるだけじゃなく、僕のような人間を無くすために実験をして欲しい。

忍のことだから、禁忌だとわかっていてもやっているだろうから。

それでも、僕は、忍が自分の理由を見つけてくれることを願っている。

忍は、誰よりも、優しいから。

あまり、無理しないでね。

最高の親友へ。

如月 涼 』

「…涼、君は僕の理由だよ。だから何も怖くない。」

そう呟くと、忍は実験の続きに取り掛かった…。

霜月悠太は、もう人手に渡ってしまった旧生家を訪れた。  
夜遅くなので、静まり返っている。

狂気に身を狂わせた父親、抵抗できなかった母親と祖母。  
自分の為に命を捧げた、血縁の家族。

悠太は、最後の別れをするために訪れた。

「みんな…僕は、もう新しい道を生きている。心の奥底にはしまっ  
ておくけど、もう思い出すこともない。」

高校と大学で得た、新たな関係。

忍、樹、龍…。

そして、悠太は鞆から、涼の遺言状を取り出す。

『大切な悠太へ。』

悠太は、正直なところ弟みたいに思っていたところもあった。でも、悠太は辛くて、悲しくて。

その想いを感じたから、僕は悠太を見ることができた。

悠太は、強いよ。

僕より、樹より、龍一より、忍より。

強い。

強い信念がある。

その想いを貫くことができたなら、悠太はきっと、昔の辛いことも乗り越えられる。

悠太は、もう一人で泣かなくていいんだよ。

大切な悠太へ。

如月 涼 』

一度だけ見た、遺言状。

総てを知った今なら、涼の想いが解る。

そして…

「僕は、僕のやり方で、想いを繋げていくよ、涼」  
初めて、『涼』と呼び捨てにできた。

瑞樹は、執務室の金庫から、一通の書状を取り出した。

「今日は…ご命日でしたか…。」

目を閉じれば、生前の涼の姿が目には浮かぶようだ。

そして、彼を守るために、何を為してきたか。

何度も何度も見返したはずだったが、何故か引つかかるものがある。

書状に目を通して、再び仕舞おうとしたとき。

弾かれた様に思い浮かぶことがあった。

瑞樹は、専門の電話で。

『急遽、屋敷に立ち戻ります。』

それだけ告げて、特務隊の庁舎を後にした。

やがて、如月涼の部屋に辿り着く。

そこには、美少女と、涼の肖像画が飾られていた。

美少女と涼の肖像画を隣り合わせに飾り変えたとき。

カチッ

何かの音がした。

瑞樹は無言で、涼の机を開ける。

そこには、瑞樹宛の遺言状があった。

「手の込んだ……」

そう言いながら、瑞樹は遺言状に目を通した……。

『瑞樹さんへ』

僕の件について、色々と工作をしていただいてありがとうございます。  
す。

おかげで、如月の家でなく、普通の人間として死ねました。

今後、暫くは僕のような人間は現れないでしょうから、あなたを如月家の長に任命します。

如月の家を守ってってください。

当代で家が絶えないように、血を繋げてってください。

いつも、汚れ役ばかりですまないと思っています。

必要だと思われる書類などは、この遺言状があった場所に保管してあります。

忍がそのうちここに来るでしょうから、手厚くもてなしてください。  
彼の研究を全面的に支援してください。

それでは、またいつの日か会いましょう。

如月 涼  
』

読み終わって。

重責を一身に担ってきた重みが、自分に襲い掛かる。  
だが。

「それがあなたの願いなら…聞くまでです。」

次の如月一族の集まりまでに、必要な手筈を整える。  
そして、如月涼が守りたかったものを、守っていく。  
決めたことだから。

瑞樹は、如月涼の部屋から、静かに去っていった。

夜が、明けようとしている。

黎明の時。

それぞれが、それぞれの時間を、再び生きる時が近づいて。  
長い黄昏が終わる時。

『大丈夫…だね…。』

深いまどろみの中。

聞こえた優しい声。

彼がいない世界は、今日も回っていく。

しかし、彼の遺した想いは、今日も誰かに受け継がれていく。  
黎明から黄昏までを生きる、全ての者たちに。

『この街が、この世界が、呼吸を続ける限り。』



## 終章・黄昏（後書き）

長い間、お疲れ様でした。

『黄昏ゆく街で』、「本編」はここで終わりを告げます。

お読みいただいて、いかがでしたでしょうか。

ご意見、ご感想、お待ちしています。

今までありがとうございました。

これからも、光野ワタルと、紡ぎだす言葉たちをよろしく願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4355d/>

---

黄昏ゆく街で

2010年11月19日08時19分発行